

---

# 歪に素敵短編集

啓鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪に素敵な短編集

### 【コード】

N0198Z

### 【作者名】

啓鈴

### 【あらすじ】

この世に不定義なモノは数あれど、彼ほど歪で造形不可思議摩訶不思議。そんなモノがあったらどうか。少し不思議な短編集。

## 第一話 『リモコン先生』

それに気がついたのは朝、学校に登校してきてから1時間目の授業が始まって少ししてから。

1時間目の授業は数学だったので俺はうつ伏せになって寝ていた所を先生に殴り起こされた時のお話。

しぶしぶ俺は起きて、自分の机の中から教科書を出そうとするとき、何だか黒い塊が見えた。

「何だこれ???」

その塊は長方形でずっしりと重い箱だった。ボタンが沢山あって『電源』『やら』『録画』と書いてある。

どうやらこれはリモコンらしい。どうやらとこのも変だがなぜこれが机の中に入っていたのだろうか???

何気なく『早送り』のボタンを押してみる。

突然と世界が変わったように数学教師の板書するスピードが加速した。一体どういう事だろうか???

「誰も……気がついてないのか」

周りを見るとどの生徒達も別に何か変わったという事も無かった。

驚いた表情もしているのも恐らくは俺だけだ。そこで次に『再生』のボタンを押してみる。

今度はやっぱり今までどおりの授業になった、このリモコンは一体どういう事だろう???

2時間目、それは丁度世界史の時間だった。

勿論あの後にはリモコンを使って授業を一気に終わらせた。これがあれば随分と楽になるだろう。

そんな事を考えながらもふとポケットに入れておいたりリモコンを取り出した。

そう言えば『録画』とはどついう事なのだろう???

俺は『録画』してみる事にした。

「……何も起きない……」

「……！！ ちゃんと授業を聞け……！！」

怒られてしまった。



.

.

.

その後も俺はリモコンを使って2時間目を終わらせて休み時間を取っていた。

休み時間と言っても次の時間が体育なので着替えてから各自グラウンドに出ている。

ふと『再生』のボタンが光っている事に気がついた、点滅しているといったほうが正確だろうか。

気になって仕方が無いので『再生』のボタンを押してみた。

「！！ちゃんとう業を聞け！！」

突然と教室のドアが開いて世界史の先生が入ってきた。

なるほど、『録画』した状況を『再生』したんだ……。

それにしても一体このリモコンは何なんだろう???

そう思いながら体操服のポケットにリモコンを入れた。



ラジオ体操を終える時に体育の先生が出てきた。

年齢は26歳位で両手にサッカーボールを持っていることから今日はサッカーらしい。とても楽しみだ。

すると体育の先生が口を開いた。

「今日は外周1周した者から自由にサッカーやれ。俺は少し用事がある」

生徒から歓声上がる。……外周か、だるいな。

そっだ!! こんなときに『先送り』したらどうだろう????

俺はポケットからリモコンを取り出して『先送り』した。

.

.



俺はサッカーを五時間ほどした後に教室に戻ってきた。正直死に  
そうなほど疲れてしまった。

4時間目と5時間目は『スロー再生』にして休息を取っていた。

6時間目。俺は目覚めて『早送り』しようとポケットの中を

探った。

あれ???

……無い???

そんなはずは無い。確かに俺はここにしまったはずなのに!!!

制服の内ポケット、鞆の中、机の中。思い当たる節を全て探してみてもリモコンはどこにも無い。

「何処だ……何処に行った……あれが無いと……」

「  
.....  
.....  
誰.....  
ガ.....  
アル.....  
.....  
イ.....  
て.....  
」

先生が俺の服を掴んだ。何もかもがスロー再生。

1秒が10分を感じるようにスロー。

「

「 あ

れ

が

無

い

「ねえねえ知ってる！？何か噂で聞いたんだけどね。リモコン先生って言うのがあるらしいよー!？」

「えーなにそれえー???」

「何かあ先生の周りの空間を早送りしたり、指定した先生を撒き戻ししたり出来るらしいよ」

「えーなんかうそくさーい」



リモコン先生。それは今日も何処かの街の片隅にポツンと捨てられていたかのようだ。

あるいは誰かに拾われるのをずっと待っているかのようだ。

もしかすると貴方はもう既に持っているかもしれない。

貴方の家にある数々のリモコンに紛れているかもしれない。

もし無かったとしても又いつか。

おっと……電池切れでしたか……。



## 第二話 『殺言葉』

俺の名前は木村健治<sup>きむらけんじ</sup>。今日からこの会社で働く事になった。

ネクタイもしっかりして、髪の毛もセットして家を出た。

……何もかも上手くいったと思った。けどどうだ???

「……会社までどうやって行くんだったっけ……???’」

なんという事だ……!

ここまで来たのに入社初日から遅刻なんて許されるはずが無い！  
！！

今から家に帰って道を調べるか???

いやそんな時間は無い。

風邪を引いた事にして休むか???

……あり得ない……。

もっともつとありそうな嘘をつかなければ……。

そうだ 大学の時にこれを使ったら簡単に部活を休めた……！

！！ 違和感も無いし誰も俺を疑わない！！

俺は会社に電話する事にした。

『もしもし、 株式会社ですが』

「もしもし、こちら木村健治という者なのですが……実は昨夜母が危篤しまして……」

『解りました。心が落ち着くまで会社には来なくて結構です。上の者には私が伝えておきます。でわ』

完璧だ!!!

なんて俺は演技派なんだろう!!! 誰も疑いやしない。

そうだ。一応殺してしまったんだから母には謝っておくことにしよう。

もう一度携帯の番号を鳴らした。

数回のコール音の後、受話器を取るような『ガチャ』という音が聞こえる。

いつもならそれと同時に俺は誰もが言つてあるつ言葉を言つのだ  
けれど何だか様子がおかしい。

誰かがすすり泣くような声。この声は……姉か???

「俺だけど……姉ちゃんどつかしたの??？」

「ヒッ……ク。。。ヒッ……ク……さっきネ……お母さん  
が……アエア」

「じめん。もう少し大きな声で言って」

「お母さんが死んだ」



•

•

まさか言った事が本当になってしまつとは、とんでもない偶然もあるもんだ。

そういうわけで俺は本当に病院まで来て病院のベットの上に横たわっていた母さんを見た。

突然の交通事故で死んでしまつたらしい。

俺はずっと啞然としていた。啞然と言うより魂が抜けたような顔。

明日からどうしよう。。。少しの間、実家に居ようかな???

仕事はどうする??? あの人は少しの間休んでいいといったが本当だろうか???

会社の初日から二日も休んでいいとは思えない。一体どうすれば……。

とにかく会社に電話した。

『はい、もしもし 株式会社ですが』

「もしもし、木村健治という者なんですが」

『ああ、明日から会社には来られるんですか???』

「実は……姉が後追いで自殺してしまって……」

俺は一体何をしているんだ???

こんな馬鹿げた作り話が通用するわけが無い。これじゃ今日のサボりの事もばれてしまう!!!

二呼吸後に受付の女の人の声が返ってくる。

『解りました。上の者には私が連絡しておきます』

.....  
なんだと.....  
???

•

•



朝の目覚めは最低だった。

まず何処かからする異様なまでの生臭いにおいで頭がガンガンする。

昨日の夜もまともに寝ることは出来なかった。散歩がてら公園にでも行って来るか。

そう思って布団から出てリビングに出る。

部屋の中心で血まみれの姉が倒れていた。

「ウ……ウゲツ……ツツ!……!」

込み上げる物を台所にはき捨てた。死んだ人間とはここまでくさいものなのだろうか。

そうして自分の携帯を手にとって警察を呼ぼうとボタンを押す。



『君!!! 入社当日から何サボってるの!!!』

「え??? 受付の女の人に電話したんですが……」

『ハア???? うちみたいに小さいな会社は受付の子なんか雇って  
ないよ!!!』





電話が切れると同時に全てが繋がったような気がした。

俺が言ったとおりに人が死んでいった。それも言葉だけで。

勿論そんな事あり得ない。オカルトや幽霊何かあるはずが無い。

じゃあ誰がしたか??? 俺はしていない。これだけは解る。

「……俺の言った事を知っている奴は他に誰が居る……いや一人しか居ない。」

あの受付の女しか居ないっ!!!!!!!!!!」



俺が二人の人間を殺した事にしたのを聞いていたのはあの受付の女だけ。

その時、また携帯がなった。

『もしもし、株式会社ですが?????』

「テメーがやったんだろ!!!! 何の為に二人を殺したんだよ!!!!」

『……………』

「二人を殺した事にした事を知ってるのはお前だけなんだよ!!!!」

『ふうん……これまで何百人と同じような事をしましたが気がついたのは貴方が初めてです』

女はそれでも勝ち誇ったように言う。

『何の為にっ！！！！ 何で二人を殺した！！！！』

「警察は呼んでおきました」

『質問に答えろ！！！！』

「簡単な事ですよ。」

が

で

だからですよ。」

警察が到着したときには木村健治は携帯を握り締めながら死んでいた。

彼の顔は何かとんでもないようなことを見てしまったような顔だったらしい。



### 第三話 『嘘』（前書き）

これからする話は全て『嘘』です。

登場人物もストーリーも作者の言う事も全て『嘘』であり『嘘』でしかありません。

つまりこれは全てを偽った『嘘』の物語です。

誰もが騙されるような『嘘』でしか成り立っていません。

ここで良く考えてみてください。貴方は本当に生きていますか？  
?? 私も考えて見ます。

少なくとも私が生きているという事が『嘘』である可能性は零ではありません。

もしかすると貴方は『嘘』で私も『嘘』かもしれませぬ。

だから『嘘』なんです。

全部『嘘』なんです。

『嘘』に耳を傾けてはいけません。だから本来はこの物語も見えてはいけません。

『嘘』は『嘘』であるように『嘘』も『嘘』であるように。

この物語の全てが『嘘』であるように……。

## 第三話 『嘘』

僕は生まれたときからお姉ちゃんが居る。

歳は7歳離れている。僕は12歳でお姉ちゃんが19歳。

これはそのお姉ちゃんが誕生日の日に起きた『本当』のお話。

それはある一言から始まった。

今日はお正月。僕の家に関戚の人達が集まっていた。

その時に僕のお母さんの兄。つまりおじさんが酔っ払った勢いでこう言った。



「知ってるか！？ お前の姉さんは実は男なんだよ！！！」

「……え؟؟？ どういうことですか??？」

「そのままの意味さ！！！ 見かけは女だがね、中身は立派な男なのさ！！！ つまりあれだな。オカマってやつだな」

おじさんはそのまま隣の人とお酒を飲み始めてしまった。

それより僕のお姉ちゃんは男なんて……いやもしかすると驚かす

ための『嘘』かもしれない。

その日から僕のお姉ちゃんを見る目は変わった。監視……まさしくそんな感じだった。

•

•

「ちょっと拓也……！ 早く起きないと学校遅刻しちゃっよ……！」

「はい。今行くよー」

お姉ちゃんはいつでも僕の見方だった。あれは僕がもっと子供だった時。

僕がいじめられて学校から帰った時、お姉ちゃんはそいつらをボロボロにしてくれた。

ほかのこともいつでも僕の見方だった。お姉ちゃんは僕の味方

だった。

「…………男、だったなんて…………」

確信があるわけでもない。もしかするとやっぱり『嘘』なのかもしれない。

だけとお姉ちゃんは本当に男なのかもしれない。

今度お母さんに聞いてみようかな…………。

その日も僕はお姉ちゃんを監視していた。証拠を探さなくちゃ…。

ついでにもうすぐお母さんは帰ってくる。いい機会だから聞いてみようかな。

ちなみに僕にはお父さんはいない、僕が生まれてすぐに死んじゃったみたい。

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。お母さんだった

よし!!… 聞いてやる!!…!!

「あのね……お母さんに聞きたいことがあるの」

「ん???? どうしたの????」

「お姉ちゃんって本当は男の人なの????」

その瞬間、お母さんの顔は複雑そうな顔をした。

まるで僕が聞いてはいけないことを聞いてしまったかのような。

そして震えるような声で言う。

「……いつから知ってたの??」

「親戚のおじさんが言ってた……それより本当なの??」



「  
本  
当  
は  
男  
な  
の  
」  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
本  
当  
よ  
。  
あ  
の  
子  
は

僕は絶句した。

その後は来年に性転換手術というのを受けらさしいという話を聞いた。

話の内容が難しくてわからない。

「お母さんも『嘘』をついてるのかもしれない……………探さなくちや……………本当の証拠を……………っ!」

気がつけば僕はバタフライナイフを持ってお姉ちゃんの部屋にいた。

お姉ちゃんは今、お風呂に入っている。

部屋の中を物色していると一つだけ開かない引き出しがあった。

確かこの鍵穴にナイフを入れてガチャガチャすると……………。

開いた。

扉が開いた。

「  
拓  
也  
・  
・  
・  
・  
・  
何  
し  
て  
ん  
の  
」

同時に引き出しの中から出てきたのは一枚の写真。

一人は小さな女の子。そして隣にいるのは……お姉ちゃん???

そして部屋に入ってきたのはお姉ちゃんだった。

「あなた……その引き出し開けたの……!？」

「……………」

「ちょっと……写真返してよ……!」

「僕は……知ってるんだよ……」

僕は叫ぶように言う。

「……お姉ちゃんが……男だっ事」

「……あんた何言ってるの……」

「ずっと僕に『嘘』付いてたの!?　ずっと僕を騙してたの!?

お姉ちゃんは!?!　お姉ちゃんは偽ってきたんだろ!?　……  
本当だったんだね……」

するとお姉ちゃんの口から予想もしなかった言葉が出る。

それも僕の知っているお姉ちゃんじゃないみたいな口調で。

「んな訳ないでしょ。それにね、今までずっと『嘘』付いてきたのは拓也。あんたの方でしょう!?!?」

「……………え……………」

「あんたはね、本当は女なんだから!!!」





「違わないっ！ あんたは昔、お父さんが無理矢理に性転換手術を受けさせたのよ」

「嘘だ……違う……」

「あんたはまだ小さかったから覚えてないだろうけどね……」。

……その写真……私の隣にいるのはあんたよ」

もう一度、僕は写真の女の子を試みる。

これが……僕?????

「そうよ……あなたはね……、ずっと自分を偽り続けてきたのよ!!」

あんたこそ自分自身にも『嘘』付いてきたのよ!!」

「……違う……僕は……違う……。嘘だろ!!!!　嘘だといえよ  
「……!!」

「ちよっ……やめてよ……!!」



「いっしょ……キヤアアアアアアアアアア……！」

•

•

次の日



「おい……三咲どうしたんだ??？」

「……昨日ね、家に帰ったら拓也と舞が死んでた。ついでに拓也の遺言状があつた」

「なになに……」。

僕は勢い余つてお姉ちゃんを殺してしまいました。何で僕が男じやないって教えてくれなかつたの???

もう何が『本当』で何が『嘘』なのかわかりません……さようなら

あらら……」

「本当にあらら……な話ね」

「お前が言ったら駄目だろうが。」

それにしても……舞ちゃんが男だったんじゃないかと、拓也君が女の子だったなんて」

「拓也は男よ」

「え？？」

「あの子達はちゃんとした男と女よ」

「じゃあお前……俺に舞ちゃんは男だったって言ったのは『嘘』か

「?」

「『嘘』よ」

「何だよ?」

「あの子達を引き取った時、舞が一枚の写真を持っていたの。」

「その写真には舞の本当の妹が写っていたから。嘘吐くしかなかったの」

「……ちょっと待て、引き取った??」

「あの子達は『本当』の姉弟でもないし。私の子供でもないのよ」

「なるほどね……………ずっと『嘘』付いてたのはお前の方だったか」

第四話 『この手誰の手』

その日、東<sup>私</sup> 恵美は友達と一緒に買い物に来ていた。

まさかあんなことになるなんて……。

「ねえ恵美！！ ちょっとあの喫茶店行こうよ！！」

「はいはい、どうせ私がイヤって言うてもいく事になるんでしょ？  
?..?」

「さすが恵美様様。よく心得てらっしゃる」

そう言っ<sup>て</sup>私と鈴<sup>りん</sup>はショッピングモールの中にある小さな喫茶店  
にいく事にした。

勿論、私は本気でその喫茶店に行きたくないわけではない。

その時、耳の中に奇怪音が入ってくる。。

パチ……パチ……。





急に目の前にあったゴミ箱が爆発して吹き飛んだ。

爆風でゴミ箱の破片が私の上を飛び越えて真上の方にあるガラス窓の枠組みが外れてガラスが落ちてきた。

「うっ、うっ……」

目の前が真っ暗になって、全身に激痛が走った。

その激痛で私は気を失った……。



気が付けば私は病室のベッドの上に横たわっていた。

この鼻をさすような病院のにおい……好きではない。

そして右腕がずきずきと痛んだ。右腕を見るとその腕は包帯でぐるぐる巻きにされている。

その時、前触れもなく扉が開いた。



病室の扉が開いた入ってきたのは私のお母さんだった。

瞳に涙を溜めてこちらにスタスタと走ってきてベッドの私に抱きついた。

正直少し痛かった。

「恵美……また心配ばかりかけてえ……」

「お母さん……ごめんなさい」

「……恵美のせいじゃないんだから……それよりもう大丈夫???  
右腕は痛まない???」

右腕は痛かった。正直千切れるんじゃないかと思うくらいに痛かった。

ただお母さんにはこれ以上心配をかけないために大丈夫だと言った。

そういえば……そういえばあそこに一緒にいた鈴は一体どうなったんだろう???

「お母さん……鈴は……鈴はどうなったの!？」

「それが……爆風で吹き飛ばされて壁に叩きつけられたみたいで……」。

病院に着いたときにはもう駄目だったみたいなの

「……『嘘』……????? じゃあ……」



「……………」

それ以上お母さんは何も言わなかった。

正直鈴がもう駄目だって事は解っていた。

あの爆発の時、隣を見たら鈴はそこには居なくて私の真後ろの壁にもたれ掛って血を流していた。

…………私だけ生きていて…………良かったのだろうか…………???

するとお母さんの真後ろに居たお医者さんの人がカルテを見ながら私に言う。

「君は運が良かったんだよ。」

実は君の腕は落ちてきたガラスで一度切断されてしまった  
んだけどね。

人間の体って言うのは 切り離されて も暫くの  
間、生体反応が残るからね。

もう少しでも君の手術が遅れていたらもう切り離され  
た ままだったんだけど」

切  
り  
離  
さ  
れ  
た  
？  
？  
？

切  
断  
？  
？  
？



一体……どういう事だろう???

私の腕が一度切断された???

じゃあこのギブスの中は???

「大丈夫よ、恵美。貴方はすごく運が良かったんだから。神様にお礼を言いなさい」

「あ……うん。それよりあの爆発は一体何だったんですか???

「それは警察の仕事。仮説としては何らかのテロ集団が関与しているみたいだよ」

そうして医者の方はTVをつけるとあのショッピングモールが映った。

真下には「テロか!？」とデカデカと題名付けられている。

その後は医者の人から右腕の説明を聞いた。

なぜ切断されたのか??? 退院は出来るのか??? 元的生活に戻ることが出来るのか????

私の質問は全てYESだった。もし私の腕に生体反応が残っていなかったら後遺症が残ったらしい。



一カ月後、私は無事に退院した。

右腕は今では自由に動かすことができる。本当に何も無くてよかった。

その後はお母さんと一緒に鈴のお葬式に参加してから家に帰ってきた。



それから数日後……。

私は右腕に時々起こる違和感に悩まされていた。

違和感　　と言っても特別何か出来ないわけでもない。

ただし違和感があるのだ。まるで何か間違っ  
てしまっているよう  
なそんな違和感。

それからさらに数日の事。

今日から夏休みなので私の学校は昼までだったから早めに左手で鞆を持ちながら帰路を歩いていった。

夏が近づいているのか、セミが鳴き始めて、最近猛暑日が多くなっている。

余りの暑さに私はポケットに手を入れて120円を取り出すとそれを自販機に入れてジュースを買って近くの椅子に座る。

「あつついな~~~~」

飲み終わった後にやはり後悔してしまった。家はもうすぐそこなのだから我慢すれば良かった……。

これからは自分に厳しくならないといけないと思いつつ、この性格は直らないだろうと開き直ってしまう。

そうして私がゴミ箱にスチールの空き缶を捨てようかなと思った時。



予想もしなかった。まるで骨が折れるような音が右手の中からし  
た。

恐る恐る右手を開いてみる。

そこにはまるで紙くずのようにグチャグチャに丸まっていたスチール缶があった。

「うっ……うわっ!？」

私は驚いてそのスチール缶を地面に投げ捨てると家に向かって全力疾走した。

……力は一切加えていなかった。それにどれ程加えたところでスチール缶だ。

一体なぜ……???





さらに事件は続いた。

クーラーの設定温度を25 にして現代科学の素晴らしさを満喫しながら私がベッドの上で携帯を弄っている時。

私が少しゴロンと横に転がった瞬間。

携帯のボタンを押していた右手が突然と私の首元に対して攻撃してきた。

「……がっ……」

それも途轍もない力で、こんな力が私にはあるはずが無い力で…  
…。

このままじゃ殺される。本当に自分の右手に殺される。

私は無我夢中になって机の上にあるボールペンに手を伸ばす。

……後5cm……3cm……届いたっ！！！！

「じわあああああああああ……！！！！」

勢い良く私は自分自身の右腕に向かってボールペンのペン先を振り下ろした。

血がにじみ出て鋭い痛みが全身を襲う。

すると右手は我に返ったように私の首を締め付けていたのを止めて重力に逆らわずにベッドの上に落ちる。

? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? あれ

私はそこで始めて気がついてしまった。

翌朝。

「お母さん！！！！ 私の右腕変なの！！！！」

「まだ違和感があるの??？」

「違うの！……この腕、私の首絞めたり……ご飯のとき無意識に箸を折ったり……」

するとお母さんは難しそうな顔をする。

当たり前だ。誰でもこんなことを言われたらそりゃ不思議に思っ  
だろつ。

「まだ慣れてないだけじゃ……」

「それにね……それにね……」

よ 私  
! 右  
! 手  
! 首  
! に  
ホ  
ク  
口  
な  
ん  
て  
無  
か  
っ  
た



！ ね  
？ え  
「 ！  
！  
こ  
の  
手  
は  
一  
体  
誰  
の  
手  
な  
の



私の思ったとおり、私の切断された瞬間に手の行き先を知っている人は居なかった。

知っていたとしてももう、この世には居ない。

その後、私の話を信じてくれたお母さんはすぐに医者の人に相談してくれて、私は右腕を切断してもらった。

私の体の一部に知らない人の体がかくっついてるのが怖かったから……。

これはその後、私が調べて解ったことなんだけど。

実はあのショッピングモールでは以前にバラバラ殺人があったらしい。

そして被害者の女性の死体をどれだけ捜しても『右腕』だけは見つからなかったらしい。

そう言えば医者の方は生体反応は死後1時間だと言ってた様な気

がするんだけど……。

気のせいかしら???



## 第五話 『仮面記念日』

俺の名前は江六英二えむいえいじ変わった名前だろ???

職業は自動車整備士。夢は日本一の自動車整備士になること。

その為、今じゃ自分の家を使って『江六モータース』という自動車整備の会社を開いている。

客は一週間に一人か二人なんだけどやっぱり自分が好きな仕事を  
するって言うのは凄く楽しい。

このお話は俺の仕事場に一台の車が入ってきた所から始まる。

「いらっしゃいませ！……どうなさいましっ……た？？」

「いや実はね、何かエンジンから変な音がするんだよ……！ん？  
どうかしたのかい？？」

いや………どうかしたのかいって言われても……。

年齢は………解らない。

服装はジーパンに革のジャンパーをしている。

だけどそんなことは関係ない。

この人の顔………アフリカ部族の神が宿ると言われてそんな独特の  
『仮面』を被っていた。



「取り合えず来週には受け取るからさー！ー！　それまでに直しておいてくれよー！ー！」

「あ………ありがとうございました………」

そう言つと仮面の男の人はトボトボと歩いていった。

一体あの人はなんだったんだろうか???　もしかするとそういう趣味があるのだろうか???

気を紛らわす為にTVをつけて見る。

情報番組。画面の右下に『今日はいよいよー！ー！』表示されている。

あれ???.  
今日って何かあった日だったっけ???

画面が女子アナウンサーに切り替わって俺は絶句した

ひょっとこの仮面を被りながらマイク片手に話している

『今日はいよいよ“仮面記念日”です！！！』

私は今、スクランブル交差点にきています。

見てください！！ この“仮面”をつけている人達を！！』

「嘘……だろ……??？」

真後ろの横断歩道の何百という人間が仮面をつけて歩いている。  
それぞれ皆の仮面は違ったけど確かに全員が仮面をつけている。

何かのドッキリか??? チャンネルを変えて見る。

料理番組。仮面をつけている。

バラエティー番組 『俺をブサイクとは言わせないからな!!!』  
『!』

顔見せるよ。

通販番組 『今日はこの最高級の仮面を……』

旅番組 『何でもここにはとても珍しい仮面があるとか』



•

•



とにかく俺は町に出てみた。仮面、仮面、仮面。

皆仮面をつけていた見たことがあるような物から無いような物までとにかく皆つけていた。

さっきすれ違った男はタイガーマスクだった。関係あるのか???

信号待ちOL達の会話が聞こえてくる。

「ねえねえ、その仮面どこで買ったの??？」

「解る!? この仮面の良さがわかる!？」

実はネットオークションで1千万円で落札したんだよ!!

まあ家は無くなったけど本当にいい買い物したわ!!」

「一千万円って安すぎない!? 私だったら三千万位出すけど??？」

テメーらはどこの馬鹿だ。

取り合えず町を歩き回った結果、解ったことは二つある。

一つ、どうやら今日は『仮面記念日』という日らしい。

勿論俺には仮面記念日について何の思い出も無いし、こんな不思議な日も初めてだ。

二つ、人々は仮面について大変な執着があり、仮面が無い人間が居ないほどだ。

さて、どうしてくれようか……???

俺は取り合えず洗面所に向かって顔を洗うことにした。これから……一体何をすべきか……???

俺が顔を洗って鏡を見た時、絶句した。

真後ろに小さなおっさんが立っていた。

当然、今の俺ならその程度じゃ驚かない。何に驚いたのかという  
と……。

「このおっさんは仮面を『つけていなかった』、俺の同類というべきだろうか??」

俺がびっくりして振り返る。そしてゆっくりとその小さな口を開いた。

「やあ 江六 英二」

「何で、俺の名前を……いやそれよりお前は何で仮面をつけていない……??」

「仮面なら私はつけているさ。だがそれは表面上の意味ではあるまい」

「何の話をしている!?! 俺の質問に答えろ!」

するとおっさんは嬉しそうにクククと本当に嬉しそうに愉快で愉快で仕方が無いように笑って見せた。

そして何を語るわけではなく。懐から一枚のプレートを取り出した……仮面だった。

それも不思議な仮面だった。その仮面には額に『悲』と書かれている。

「人はいろんな仮面を持っている物だ。」

社会での仮面、恋愛の仮面、悲哀の仮面、そして自分自身の仮面。

つまり人間の感情の全ては仮面なのだよ



喜ぶ仮面、怒った仮面、笑った仮面、哀れむ仮面。全部そろってその個人になる。

そんな難しい顔をしなくていい。これは単純な話だよ。

ただ単にこの『物語』はそれを知って貰う為のことだよ」

「物語……何のことだ!!! それよりこの世界はどうなってるんだ!!!」

何で……なぜ皆が仮面を被ってる!!! 仮面記念日とは何だ!？」

「……そうか……彼らの技術はもうそんなに進歩していたのか……」

彼ら……???

技術……???

まるで話が噛み合わない。このおっさんは……俺の知らない何かを知っているような。

「仮面記念日。それを知ってしまった時には君はデリート（削除）されてしまう。」

それでも知りたいのか??？」

「教えてろ!!! 教えてくれ!!!」

「仮面記念日とはね……」

がー……ガー……ピーガー……ガガガガガガガガガガガガガガガガ……





「おい、製品番号『ME AG』はどうなった????」

「それが……バグのおかげで破壊するしか出来なかったので削除しました」

「また奴の仕業か……解った。 電腦世界を一度リセットするか……????」

ここは現実世界。

灰色のコンクリートの部屋でパソコンがいくつも並んでそこに何名かの作業員が居る。

そしてそのうちの一人の画面に『新作。 仮面記念日』の文字が点

滅している。

「本当にリセットするのですか……??？」

いくら人工頭脳ですが意思を持たせることが出来る段階まで来ているのですよ????

やはりプログラムの中のバグを取り除くのが一番……」

「もしプログラムに異常があるならもうとっくにそれは修正しているはずだ……。」

「だとするとバグ……あのジジイはプログラムでは無いのか……??？」



「『**電腦世界**』 コンピューター内で人工頭脳を主人公として様々な状況に向かわせてそれを観察させる。

言わば人間観察ゲーム。

だけでもうこの世界を作り始めて3年が立ちます……。

しかし今の段階は主人公に『**意思**』を持たせるまでしか出来ていません」

「……あのバグが主人公に自分達が製品だと教えてしまったら物語はそこで終わってしまうだろう。」

一度主人公は放置して今はバグを取り除くことを考えた方がいい」

「この製品が完成したら絶対に流行しますよ。」

もう後少しです。頑張らしましょう……！……！



第六話 『??.?』

疲れた。この世界に疲れた。

男は今日もそんなことを言いながら仕事から家に向かって歩いて  
いた。

そんな事より彼は疲れていたのだ。どうしようも無く墮落し、壊  
れて、欠陥がある世界。

別に何か失敗したとか絶望したとかそんな小さな理由ではない。

それはもう地球規模で表す位の大きな問題だった。

ふと歩きながら彼はこう考える。

『死ぬ』とは何なのだろうか???

心臓が止まる事???  
生きていない事???  
生体反応が消える事???

どれも正解。どれも『死ぬ』事、だけどどれも違う気がする。

『死ぬ』とはもっと違う何かの気がする。

例えば 電池が切れたような。その程度の事。

そんな事を思考しながら彼はあることに気がついた。

ここは毎日通る商店街なのだが今朝見た時にはあのような店は無かった。

店の看板には『Answer Shop』

•

何かを引き寄せられるように男はその店に入っていた。



•

•

店の中は古びれた様子で棚に穴が開いていたり、地面に亀裂が入っていたり、とにかく壊れかけていた。

棚の商品は全て白い箱に詰められている様子で何なのか解らない。

すると店の奥から一人のお爺さんが出てきた。

いらっしやいまし、何の『答え』をお探しですか???

答え???

その通りでございます。ここには全ての『回答』を販売しております。

面白い。じゃあ何か売ってもらおうじゃない。

面白い。私は単純にそう思った。

ただただ愉快だという感情が湧き上がってきた。

俺の望んでいる回答なら何百と何千といや何億とある。まず手始めに……。

『死ぬ』とは何なのだ???

……料金は20000円です。

貴方の真後ろの箱を開けて御覧なさい。

男は店の店主に20000円を渡すと真後ろにある箱を探した。

一つの箱には『悲しみ』一つの箱には『笑う』一つの箱には『絶望』そして最後の箱には『死ぬ』

男は『死ぬ』箱を開いた。

中には黒い塊。ずっしりと重いその塊を手取る。

拳銃だった。

男はその拳銃を握り締めて振り返って商店街を歩いていた女性に照準を定める。

ばあん！！！！！

鮮血。女は何の前触れも無く、何の抵抗も無く、何の意味も無く、その場に倒れこんだ。

男はその女に歩み寄って見る。そのとき、何か感じる物があった。

これが『死』なのか。



その通りでございませう。

死ぬ事に絶対に必要な物は『生きる事』です。

生があつて死がある。死があるから生がある。

『生きていることこそ死』なのです。

俺は思った。

つまり俺はこの女を死なした訳じゃないのだと。

この女はずっと死んでいたんだと。

単純にこの女の電池が切れてしまったのだと。

そこで男は疑問に思った。

店主。『生きる』とは何なのだ???

•

•

男はありとあらゆる答えを求めた。

希望とは何か??? 絶望とは何か??? 失敗とは何か???

気がつけば店の中の商品は残りが少なかった。

そして男は気がつく。

あの奥のショーケースの箱には何が入っているんだ???

ああ、あれには『世界』が入っております。

『世界』……???.?

その通りでございます。あの箱には『世界の答え』が入っております。

これが男が待ち望んだ答えだった。

この墮落し、壊れて、欠陥だらけのこの世界の答え。

そして男自身がこの世界をどうしたいのか 救いたいのか??  
? 壊したいのか??? 支配したいのか???

男はその箱に歩み寄る。

値札には100万と書かれていた。

男は財布を漁る。出てきたのは12円だった。

店主!...! この商品は俺が買う!...! 今すぐ家に帰って金を  
持ってくるから!..!

お買い上げありがとうございます。



男はAnswer Shopを飛び出して自分の家を目指した。

気がつけばもう朝になっていて商店街は警官達でいっぱいだった。

とにかく走った。あの箱の中身を見たい！！ 俺は世界をどうしたいのか、その答えを知りたい。

だが男が商店街に戻って来た時にはもうそこにAnswer Shopは存在しなかった。

男はその日からあの店を何年も探し続ける事になる。

•

•

あれから16年が経った。そして男はついに店を発見した。

場所はロサンゼルス、本当にこの16年はいろんなところを行ったり来たり。

金が無くなる度に『補充』した。

男は店に入る。

いらっしやいました……おや、貴方は……

16年前に世界の箱を買った者だ……！ さあ早くあれをよこせ

！！

荒々しくそう言うと札束を投げるようにして店主に投げつけてシ  
ョーケースを叩き割って世界の箱を手を取った。

これをずっと望んでいたのだ。この答えをずっと待ち望んでいた  
のだ。

男は箱の中身を開けた。

これが……世界……???

世界の箱の中身であった地球儀は動いていた。

ドクン、ドクンと脈を持っている心臓のように動いていた。

そして箱の奥には鋭利な刃物が入っていた。

俺は……世界を壊したいのか……フッフ……!!

……さあ貴方の答えはそのナイフです。

男はナイフをつかんだ。







男の腹部から大量の血が噴き出した。

そのまま力を失ったようにその場に倒れこんでしまった。

店主は地球儀からナイフを引き抜いて男の体に向かって言う。

貴方は世界を救いたいわけでも壊したいわけでも無い。

飽きていたんでしょうこの世界に???

貴方の答えはこの『世界から消える事』

この世界の外側、何も無い世界へと逝く事。

それが貴方の『答え』

方 い  
は ら  
・ つ  
・ し  
・ や  
・ い  
ま  
し  
・  
・  
・  
・  
お  
や  
貴

店の扉が開いた。

！ 8  
！ 年  
前  
に  
世  
界  
の  
箱  
を  
買  
っ  
た  
者  
だ  
！



## 第七話 『交換日記』

こんにちは私の名前は山田夏美。 中学1年生。

今私のクラスでは交換日記と言うのが男女の間で流行っている。

それも最初は2人か3人だったんだけど、なぜか今ではクラスメイト全員でやる事になっていた。

やり方は簡単、日記を書いた人は教室内の何処かに隠す。それでそれを見つけた人はその日に書く。

私達のクラスは全員で26人居るので一ヶ月に1、2回位だ。

これがやってて結構楽しい。実は私も結構、授業が始まるまで日記を探していたりする。

これはそんな交換日記がある日、突然と無くなってしまった所から始まるお話。

「ねえ夏美!!! 何か交換日記が無くなっちゃったみたいなの」

「ええ???? 隠したまま出てきてないだけじゃないの????」

この子は中江 千秋。私とは中学校で知り合ったはじめての友達。

小学校のときにはいじめられていたらしい。



けど私達の地区は中学が2つあるので苛めていた子達はほとんど違う中学に行ったらしい。

それより交換日記が無くなったって本当だろうか???

「どうすんのよ!?!? もしもそのまま先生に見つかったらまた怒られちゃうよ!?!?!」

「そう言えば先週見つかって怒られたばかりだっけ……皆で探すしか無いよね……」

そうして私達は皆で交換日記を探すことにした。

けれど不思議な事に一番最近日記を書いた男子が隠した場所にも交換日記は無かったのだ。

となると日記は誰かが持っていることになるのが普通なのだが誰

も持っていないと言っている。

— 一体どういふ事なのだろうか???

•

•

•

それから数日後……。

私が朝、学校に来て教室に入ると皆が教室の前の教卓に集まっていた。

その輪の中に私は無理矢理入るとそこには一つのノートが置かれてあった。私は事情を知るために近くの男子に聞いてみた。

「ちょっと、何があったの??？」

「ああ山田か……実は交換日記が返って来たんだけど……何かおかしいんだ……」

そこで私は気がついた。

教室の後ろの方で女子達が何かにかえるような顔で中には泣いている者も居ることに。

そして私は視線を下ろして日記を覗いてみた。

なぜか赤い文字……???

違つこれは血文字だ。



何  
だ  
こ  
れ  
は  
？  
？  
？



「悪戯にしたらちょっとやり過ぎかも……」。

あれ??? 27番なんてあったけ……それに道野チイなんて」

その通りだ。

このクラスは26人しか居ない。

つまりこのクラスに出席番号は26番までしか存在しないのだ、  
27番はありえない。

さらにこのクラスには道野　チイなんて人物は居ない。

じゃあこれは一体誰だ???

すると千秋が怯えた声で言う。

「……………どうすんのよ……………???’’　「このまま日記続けるの???’’」

「当たり前でしょ……！　こんなたち悪い悪戯に構ってられるもんですか……！」

声を出したのは学級委員長の足立　香奈枝。

そういうと皆の中心にあった交換日記を取り上げて自分の席に座った。

同時にチャイムが鳴って先生が入ってくると皆が自分の席に座った。

確かにこのクラスの皆が楽しんでいた物にあんな悪戯をするとは思えない……だとすれば誰なのだろう……???

私は後ろを振り返っているはずも無い27番目を想像したのだっ

.



あれから数週間。

あの悪戯が続くことは無く。皆は安心して日記を書き続けていた。

そんなある日、またあの日記が無くなったのだ。

今度も皆で探したのだけど不思議な事に日記は無いのだ。

私は嫌な予感がした。ここで先生に言えばよかったのだが怒られるのが嫌な皆を意見は一致していた。

そして日記が無くなってから数日が経ったある日。

普段どおりに登校して来た私に教室の前で千秋が待っていた。

「夏美！！！！ 大変よ！！！！」

「ちょっと、引っ張らないでよ」

あの時と同じ、教卓に皆が集まって後ろの方では女の子達が何かに怯えている。

まさか……。

そんな予感をしていた私は教卓に集まる皆を掻き分けてその中心を覗いた。

やはり      そこには無くなっていたノートがあったのだ。

私はギョツとした。





こ  
ろ  
す  
?  
?  
?  
?



殺す……？？？

「12番って……足立さんだよな……」

誰かが言った。

その足立さんは顔面蒼白と言っただろうか。本当に怯えてきつていた。

こんなものがあるはずが無い、本当に殺すなんてありえない。

それなのに、彼女は……。

「ア……………いやあ……………」  
「ロサ……………レル……………」

「大丈夫だよ。誰かのたちの悪い悪戯だよ」



そこで先生が教室に入ってきた。すると私達の中の一人が先生に全てを伝えた。

私達の交換日記。

突然と消えて27番目が現れた事。

そして殺人予告。

取り合えず誰がしたのか探す前に足立さんを探すことになった。

少なくともその間も私はずっと上の空だった。何だろっこの感じ

……悪い予感がするとか???

•

•



足立さんは死んでいた。

カッターナイフで胸を一突きされて女子トイレの中で死んでいた。

その場は悲惨な状況だったらしい。現場を見ていない私はそれを直接は見えていないけど。

それから一週間は学校は休校。そして一年後には廃校になってしまった。

勿論その後のお話は無い。それ以上人が死ぬことも無かった。

しかしまだお話は続く。

元 あ  
に の  
あ ノ  
る ー  
の ト  
だ は  
。 な  
ぜ  
か  
今  
で  
も  
私  
の  
手



それからまた数年。

私はもう25歳になって今はOLとして毎日バリバリ頑張っている。

勿論私もあの事件を完全に忘れてしまったとは言わない。

しかし人間の脳と言うのはもともと記憶を憶える事より記憶を忘れる事の方が長けている。

まあ要するにあまり詳しいことは覚えていない。

そしてあの時の中が良かった千秋は何かの縁なのかもしれない。私達は同じ会社で働いている。

あれから数日の間は千秋も余程ショックだったのだろうか、様子が変だったけど今では大丈夫のようだ。

確か足立さんと同じ学校だったらしい。

……あれ???

私は何かを忘れているような……。

「どうしたの夏美??? 何か怖い顔してるよ???」

「え!?!? な……なんでもないよ!?!?」

真正面に居る夏美と目が合う、顔に出ってしまったらしい。

うーん。思い出せない。

まあ過ぎた話だ今は仕事をしなきゃ!!--!

ふとパソコンのキーボードを見る。

私は今までこの会社に入るまでパソコンはあまり使ったことが無かった。

おかげでパソコンの知識は全くと言っていいほど無い。

しかし今のこの時代。パソコンくらい使いこなせないと会社の就職は不利になってしまう。

だから毎日勉強くらいはしているんだけど……。

そう言えば前から思っていたんだけどキーボードの各キーの右下にあるひらがなって何なんだろう????



ああ、例えばローマ字の『A』の場所なら『ち』

『S』のキーなら『と』

『D』なら『し』

みたいな奴のことだよ。

後で夏美……………。

千秋の苗字は『中江』

道野チイ。



私  
は  
目  
の  
前  
の  
女  
と  
目  
が  
合  
っ  
た  
。



## 第八話 『リアル箱庭』

### リアル箱庭セット

それがその商品の名前だった。場所は学校のすぐ近くの裏路地、状況は帰宅途中、値段は15600円なり。

勿論僕がその商品を買う必要はどこにも無い。

だけど僕は少なからずこの商品を欲しいと言つ気持ちがあった。

だが、この頃の僕は小学校5年生だったからそもそも『箱庭』と  
言うのがどうもしっくりこなかった。

しかし僕はこの商品に魅入っていた。あるいは魅入られていた、  
その日から僕は帰り道を変えてこの店に来ることにしていた。

店の店主は着物を着た若い女。だけどいつも僕に気が付いている  
のか気が付いていないのか解らないほど上の空だった。

そんな日が10日ほど続いた、ある日。

「君はいつもこの商品を見に来ている。それはなぜ???」

「……欲しいから……かな???」

「この商品を欲しい???' 確かに君はそう思っているの???'」

「……はい」

僕とその女の人が始めて言葉を交わした。

すると相手はニツコリと笑って立ち上がり、リアル箱庭セットの箱を僕に差し出してきた。

僕は相当驚いた顔をしたと思う、勿論僕がお金を払ったわけじゃない。そもそもそんなお金を小学生が持っているはずが無いのに。

僕はリアル箱庭セットを受け取る。ずっしりとして当時の僕には少し重たかったことを覚えている。



「何で……??？」

「この商品はね。お金じゃ買えないの、例え私は一億と言う大金を貰ってもこれを渡すことは出来ない。」

この商品はね、本当に欲しい。とても欲しいって人にしかあげられないの。」

だからこれは君の物。他の誰のものでもない」

それが僕と彼女が交わした最初で最後の言葉。



僕は家に帰ってきて、真っ先にリアル箱庭セットの中身を開けた。

中身から大きなガラス製の半円で直径が1m位の物体が出てくる。外側の形は野球盤みたいな感じだと思ってくれたらいい。

そしてその中身には何も入っていないかった。これが野球盤なら少なくとも人形の野球選手が入っているのだが……。

リアル箱庭セットの外側の出っ張った部分『OPEM』と言うボタンと『CLOSE』と言うボタンの二つがあった。さすがにこれくらいの英語は読める。

僕はもう一度、リアル箱庭セットが入っていた箱の中身を確認すると付属品らしい物を入れた箱が二つ出てきた。

真っ白の箱の一方には『創造』そしてもう一つには『破壊』とシールが貼ってある。

取り合えず取り扱い説明書を読むことにした。

「えーっと……」

### 『リアル箱庭セット』

この玩具はあなたが“神”になって箱庭の中に自分だけの世<sup>ワ</sup>界<sup>ル</sup>を作ります!!!

付属品の創造の箱には様々な動物のフィギュアや植物の種が入っています。

さあ貴方も自分だけの世界を作ろう!!!

注意

リセット、セーブ機能はございません。

もしやり直す場合は『破壊』の箱をお開けください』

何だか良くわからないが面白そうだ。僕は取り合えず『創造』の箱を開けてみる。

中には小さな植物の種やいろいろな動物の小さなフィギュアが出てきた。なるほど、これで僕の世界を作っていくのか。

僕は『OPEN』のボタンを押すとワールドの中に付属品の植物の種を蒔いた。次に動物を置こうかと思っただがふと思う。

さすがにまだ動物は早すぎる、まず環境を作らなければ。

「ごんよー」

「今行くよー」

僕は『CLOSE』を押しした。

「ふー、お腹いっぱいだー。ワールドはどうなってるかな……っ！  
「！！」

僕が夕食から戻ってきてきて部屋の中心に置いてあったワールドの異

変に気が付いたのはすぐだった。

確か僕はついさっき植物の種をこのワールドに入れたのを思い出した。勿論本物の種ではなくプラスチック製だ。

ワールドの中には大自然が広がっていた。





一杯すくってきてそれをワールドの中の一部に流し込む。

するとその部分には水溜りが広がって、やがてそれは湖へと変わっていく。

「さあこれで準備は整った!!!」

僕はワールドの中に動物のフィギュアを入れていく。

ゾウ、キリン、ライオン、シマウマ、トリ、ムシ、サル、サカナ

気が付けば日付が変わっていた。なるほど……何だかとても眠たい。

しかし神はそんな事は言ってもらえない。洗面所に行って顔を洗い、自分の部屋に戻ってきた。

そこにはサバンナ如く、動物達が繁栄していた。

独自で繁殖し、進化を経て、様々な種類へと派生していた動物達の  
ファイギュアが並んでいる。

僕は初めてこの世界が素晴らしいと思えた。これが世界なのかと  
初めて実感できた。

そんな事を考えながら僕は睡魔を感じ、その場で寝てしまった。

.



朝。目が覚めるとシマウマの群れを囲い込むように6頭のライオンが“狩り”をしていた。

うーん。弱肉強食。

取り合えず僕は学校に行く用意をしながらふと見た。いや見てしまった。

人間が居る。





なぜここに人間が居る。

僕は考える。……サルから進化したのか……。

人間達は鋭利な槍のような物を構えて1頭のライオンを10人で  
囲みこんでいた。

僕は何だかとても腹立たしく思った。自分の世界を壊されている  
と、そう感じ取った。

い ー  
! 平  
! 和  
! を  
ー 壊  
す  
者  
は  
・  
・  
・  
死  
ね  
ば  
い

僕は怖い声で吐き捨てる。

しかし、僕が直接出来ることは無い。フィギュアを取ればいいと思っただが実は盤上のフィギュアは取れなくなっている。

僕は『神』であるが傍観者だ。大丈夫、奴らは必ず滅びる。

悪は昔から死ぬと決まっている。

そう自分を納得させてから学校に行った。

•

•

学校から帰ってきた僕は自分の部屋に走った。

人間達は死んだ後、どうするのか??? これ以上無駄な生物は  
生まれてこなかったか???

僕は勢い良くドアを開けて部屋の中心を見る。

「  
な  
ん  
だ  
よ  
・  
・  
・  
こ  
れ  
・  
・  
・  
」

そこに広がっていたのは高層ビル、そして地面は整えられたセメントの道路、電車の路線。









僕は部屋の入り口に立ち尽くした。

一体なぜ……???

つ 「  
！ 違  
！ う  
！ °  
！ こ  
「 れ  
は  
僕  
の  
世  
界  
じ  
ゃ  
な  
い

これが世界。これが今の世界。

人間の文明が発達し、全てが人間のために回っていく世界。

今朝広がっていた大自然は灰色の地面に変わり果て、動物はほとんど絶滅。

唯一残された動物達は動物園で人間達の笑い者になっている。ふざけるな、貴様らは『神』になったつもりか。

神は僕だ!!! お前らはそうやって世界を壊すつもりなのか!

!!

湖は長い年月で海へと変わっていてそこに船が幾つ物が浮かんで  
いる。

そこで僕は初めて気が付いた。

「もうこの世界は駄目だ。」

いと

せめてこいつらを殺さな

僕は『破壊』のシールが貼られている箱を開ける。

そこからいくつものドラム缶のフィギュアが転がってくる。

これが世界を直す力。これがリセットボタン。これが……。

ドラム缶に何か書いてある。

「なほーむ？？？」

僕は『OPEN』のボタンを押して、人間共の世界にそのドラム缶を投げ入れる。

箱の中身が無くなるまでナパームを全て投入する。僕が神だ、だからどうするかは僕が決める。





•

•

.

『臨時ニュースです!!!!!!』

先ほど日本の東京が滅びました!!!!!!

詳しいことは解っていませんがテロリスト集団の犯行であると思われます!!!!!!

900ㄱ1,300度で燃烧し、広範囲を破壊された事により東京を破壊したのは『ナパーム』の可能性が極めて高いとされています。

政府は非常事態宣言を発令し、まだ仕掛けられている地域が無い  
か、全力で探して居るとの事です。

繰り返します』



## 第九話 『歪な愚形の果実共』

俺は殺し屋。名前は昔に捨てた。

コードネームは『フェニックス』

今回の仕事は雇い主のライバル会社の社長を殺す事。

何でも相手会社は新しいゲームの商品開発でこれが完成したら雇い主の会社が危ういらしい。

確か電腦世界だったっけな……???

俺は為に少し離れた旅館で作戦を練っていた。

暗殺か??? 狙撃か??? あるいは会社ごと吹き飛ばす爆薬か????

すると部屋の中に着物を着た仲居の人が入ってきた。そして俺の前には正座する。

「お夕食の前にお時間がありますが、この辺を散歩してみてもいいか  
がでしよう??」

中々いい街ですよ

「そうか、俺が住んでいた所はこんなに畑は無かったからとても新鮮だ。」

……そうだな少し気分転換に散歩にでも行こうか

そうして俺は旅館の外に散歩に出かけた。この辺は田舎で田んぼと畑が広がっている。

山の上に建っている灰色のビル。あの中にターゲットの社長は居るのだろうか??

それより風が気持ちいい、何処かから聞こえる川のせせらぎ、木の上で鳴いている鳥。

ふと視線を目の前に移してみる。

そこにはぽつんと一つだけ、不自然に、周りの景色とそぐわない

果樹園が広がり、誰かが収穫している。

……なぜこの季節にスイカが生っているんだ???

と  
言  
つ  
よ  
り  
俺  
は  
何  
か  
忘  
れ  
て  
い  
る  
よ  
う  
な  
……遠い昔に何かを……あ  
れ  
は  
何  
だ  
っ  
た  
か  
な  
???



果実???  
うーん……。

思い出そうとしても中々出てこないのが人間の頭脳。

ふと収穫しているお爺さんと目が合った。

いや相手は藍色の帽子で目が見えないから目が合ったというのは  
おかしいか……。

そして俺の方に近づいてきて背中の籠から取り出した赤い果実を  
俺に手渡した。

俺はその果実を見てギョツとした。

その林檎はぐにゃぐにゃに曲がっていた。

「な……なんだこれは……!？」

「……食べてごらん。とってもおいしいんだ」

俺はもう一度、視線を下ろして自分の手の中にある林檎を見た。

今までこんな形の果実は食べた事が無い。いや見たことも無い。

言うなら『歪な愚形の果実』だった。こんな物がおいしいなんて  
思う奴が居るだろうか???

それにその林檎は異常なほどに赤かった。まるで血だ。

「なぜこんな形を……???.?」

「……食べたいわね」

シャクシャク……

「うっ……うまい……！ 何だこれは……！」

「……ほらね」

その林檎はとてもおいしかった。俺はこんな美味しい林檎を食べたのは初めてだ。

不思議な事にその林檎には種が無く、中まで赤くて、血管のような筋が通っていた。

俺は目の前に広がる果樹園の果実を試してみる。

ジグザグなバナナ

ぐにゃぐにゃのミカン

腕のように細いスイカ

長方形のレモン

とにかく歪だった。

何もかもが歪んでいた。

……俺は何かを忘れている……あれは何だったんだ???  
俺は何かを忘れているんだ???

そう言えば先ほどから気になっていたんだがあのビニールハウス  
は何が栽培されているのだろうか???



「あのビニールハウスは……」

「あれはまだ収穫時じゃないよ。それより」

そ  
ろ  
そ  
ろ  
夕  
食  
だ  
よ  
？  
？  
？

旅館に帰ってから初めて気が付いた。

そう言えばあの人は何で夕食の時間を知っていたのだろうか???

夕食を終えた私は考えてみる。

もしかするとあの人は俺のような観光者にあの歪な愚形の果实を食わせていたのではないか???

そうする内に時間を覚えたのだろうか???

まあどうだっていい。するとドアが開いて先ほどの仲居さんが入ってきた。

「散歩。どうでした??？」

「中々いい街でしたよ」

それよりこの辺に歪な愚形の果実を栽培している農家はありませ  
んか??？」

「……知りません」

そう言つと仲居さんは食事を持って部屋を出て行った。

何だか様子がおかしかったように思えたが……気のせいだろうか  
???

まあいい。また他の奴に聞けば、そして俺は再び作戦を考えて始める。

.

取るもの手に付かず。

確か松尾芭蕉の奥の細道でこんな表現があつたと思う。

まさに今の俺だった。確か彼は旅への執着心からそんな状況だったと言われている。

だが俺はまた別の事への執着心。あのビニールハウスの中身はなんだったのだろうか???

知りたい。知りたい。知りたい。

味 ど  
だ ん  
。 な  
形  
だ  
。  
ど  
ん  
な  
色  
だ  
。  
ど  
ん  
な





気が付けば私は果樹園に来ていた。

旅館の場所からここまではそう遠くない為、行き道くらいは覚えていた。

聞こえるのは川のせせらぎとフクロウの声だけ、余りに静かな為、俺が砂利を踏む音が月夜に響き渡る。

あたり一面に人気は無かった。さっき来たときも無かったのだが、今ではあのお爺さんも居ない。

やはり木の枝から実っている果実の形は歪だった。

そんな物を見ながら俺は目的のビニールハウスの目の前まで来た。

一体ここには何があったのだろうか……???

ゆっくりとドアを開いて隙間から中の様子を伺ってみる。

真っ暗で何も見えないが人が居る気配は無い。

ビニールハウスの中に入って手探りで照明のスイッチを探す、あった。これだ。

電気がつく。

そこには木に吊り下げられた血まみれの人間が100体以上は居た。

「どづいづ、ことだ……？？？」

「……そついつ事だよ」

入り口に鎌を持った作業着のお爺さんが立っていた。  
四方八方から地面に向かって血が滴る音が聞こえる。

これは……なんだ？？？

「あの果实共は……」

「……その通りだよ。これがあの果实の『種』」

あの形、骨が砕けてしまった人間。

あの色、血まみれの人間。そして血管。

「……これが『歪な愚形の果实共』だよ」

……思い出した。

『歪な愚形の果実共』

それは昔、俺が趣味で作った小説の題名だ。

中身がどんな物語であったかはいまいち覚えていない。

……そうか、そうだったのか……。

あの小説は誰も得しない内容だった気がする。誰も得せず、誰も  
知りえない世界。

今になって解った……あの小説こそ歪だったのか。





第十話 『反転世界』

私は会社からの帰り道。奇妙な人間を見た。

その人間は歩いていて、横断歩道を歩いていた。

これだけ見れば当たり前のことなのだがその男の歩き方が奇妙だったのだ。

その男は後ろ向きに歩いていったのだ。

進行方向とは逆向きに向いてゆっくりと歩いていた。

それを見て私は昔、体育の時間にバック走という物を使ったのを

思い出した。

だが私はそれを普段の道で試したことは無かった。

勿論普通に前を向いて歩く方が早いし、何より周りから見たらただの変人だ。

だからあの人間は何を思って後ろ向きに歩いているのか不思議に思っていた。

帰宅してまず私はその事を嫁に話してみた。

「変わった人も居るものね」

娘が言う。

「そんな人に関わらない方がいいよ」

二人も驚いていた。当たり前だ。

私はその話を食卓でも使おうかと思っていたのだがその食卓でまた奇妙な事が起こったのだ。

食卓は私、嫁、娘で囲む。

そして食べる前には『頂きます』

食べた後には『ご馳走様』

これが常識であり、我が家のルールである。

だけど

「ご馳走様」

そう言うと二人は箸を使って食事を食べ始めてしまった。

しかし私は余り気にならなかった。最初は普通に冗談かと思ったからだ。

ところが様子がおかしかった。まず箸を反対向きで使っていた。

私は何かおかしいと思い始める。そして食事を終えた二人は、

「頂きます」

そう言って席を立って、娘は自室に向かっていった。

私はさすがに笑ってしまう。

「あははは。二人して私を驚かそうとしているのか???」



「????? 何のこと?????」

嫁は真剣な目で答える。私はこのときから異変に気が付いた。

娘はうがいをしてから歯を磨き、嫁は体をタオルで拭いてから風呂に入った。

寝る前には『おはよう』と言って眠りに落ちて、朝が来ると『お休み』と言って挨拶するようになったのだ。

私は二人の頭が可笑しくなってしまったのかと思いついで、朝まで眠れずにそのことについて考え込む日々が続いていた。

.

.

.

ある日の事、私は会社に行く道で異変に気が付いた。

た  
人々  
は  
皆、  
反  
対  
向  
き  
に  
歩  
い  
て  
い

異変が起こっていたのは我が家だけではなかったようだ。

歩道では人々は後ろを向いては歩いていていた。

しかし誰にもぶつからないし、周りの人も気にしている様子はその中には無かった。

その中を私は前向きに、普通に歩いて会社まで向かう。

「お疲れ様です」

「……あ……ああ」

職場ではそう言われて入社する社員まで現れた。

さらにテレビではニュースキャスターが報道を終えた後に「ニュースです」と告げる。

勿論、日常の挨拶は『さようなら』で始まり『こんにちは』で終わる。

これだけ可笑しい出来事が続くのに誰一人としてその異変に気づ

く者は居なかった。



•

•

会社からの帰り道。そう言えば私が始めて異変に気が付いたのも会社からの帰り道だった気がする。

私はふと顔を上げる。もう私以外の全ての人間は後ろ向きに歩いていった。

それが日常だったように、それこそが真実だったように。

私は考える。

「  
日  
常  
と  
は  
何  
だ  
っ  
た  
か  
な  
？  
？  
？  
」



日常。

今それが何なのかは全く解らなくなっていた。

全部が反転している訳ではないが、私にとってはやはりそれは可笑しかった。

そんな日常が続くにつれ、私の方が非日常であるような感覚が生まれ始めてきた。

何が日常なのだろう???.? 何が非日常なのだろう???.?

誰が正しいのだろう。誰が間違っているのだろう。

……そうか……、そうだったのか。

今まで私が正しいと思っていたことが間違っていたのか。

彼らはそれに気が付いたのだ。

私はゆっくりと後ろを振り返る。



反転世界になってから数日。

気が付けば、私は後ろ向きに歩いていた。

## 第十一話 『アドバイス』

人間と言うのは余り良い生き物じゃない。まあ当たり前だが……。

例えば、ここに二人の人間が居たとするよ。性別はどちらでも構わない、別に男でも女でも支障は無い。

AはBのことを親友だと思っている。じゃあBはAのことを親友だと思ってるか???

もしかするとBはAの事を嫌いなかもしれない。それも『殺したい』と思うほどに、殺意の対象だね。

それに人間とは本当に変わりやすい。世界のように変わってしまう。

昨日までの友達は今日の敵かもしれない。人間とはそういう生き物だ。

「君は解かっていたんじゃないかな???

解かっていたからこそ君は孤独を選んだ」

「孤独……ですか」

俺の目の前に居る人間はそう言う。まるで俺のことを全て知っているように。

ここで人間と表現したのには理由がある。

丁度1時間ほど前に散歩をしていた俺は裏路地にある小さな店を見つけた。店の名前は『助言屋』本当に胡散臭い。

この店は前々から知っていたのだが、客の立場になるのは今日が始めて。

本題に戻ろう。俺が人間と表現した理由。

それはまず俺の目の前の奴が全身を黒い布で包まれていて、さらになぜか顔があるべき部分に鏡があるからだ。

つまり性別もわからない。声の低さから言えば男だろうか???

「孤独、孤独とはいいい事だよ。そもそも人間は一人で生きるようにシステムされているからね。」

さつきも説明した通り、生きていくのなら孤独の方がよっぽど安全だよ。人間とは何をしでかすか解からないからね。」

さて、遠回りしてしまったけど俺は君に聞くことにしよう。」

さつきから思っていたけどこの男。」

生 、「  
き 君  
た は  
い 死  
の に  
？ た  
？ い  
？ の  
「 ？  
？  
？  
そ  
れ  
と  
も

かなり一方的だった。

俺は生まれたときから孤独だった。

両親は俺が小さいときに交通事故で死んだ。

学校で友達と呼べる友達は居なかった。いじめとかには会わなかった。

そもそも彼らは俺に関わることを避けていた。触れることも、喋ることも、もしかすると人生の中で関わることも避けたかったのかもしれない。

しかし、それを俺が嫌がることは無かった。俺は知っていたから孤独の良さを知っていたから。

そして今になって気が付いた。だからアドバイスが欲しかった。



「解からないんだ……俺が居る必要があるのか……。

だから生きるとか死ぬとかそんな高度な話は解からない」

「ふんふん、なるほどね。君は自分で解からないのか……君が解からない事が俺に解かると思う???

そもそも君は孤独なのが好きなのじゃなかったのか???

孤独なのが好きだから孤独になった。それを今になって死にたい???

少し可笑いんじゃないのかな」

「孤独だから死にたいわけじゃない……

今の俺が死んだらどうなる???

」

「どうもならないよ。……あー……。ちょっと解かってきた」

目の前に鏡があるため、そこに映っているのは俺だけが男に伝わったらしい。

俺にも解からないわけが、別に世界に不満があるとか言うわけじゃない。

単に俺が生きていて困る人も、俺が死んで困る人も居ないからだ。

「解からないんだね。生きる理由も死ぬ理由も。」

だから答えも解からないんだ、そういうのは本当に困るね。

そうか……君は死にたいのか生きたいのか解からない人間だったのか」

「だから俺にアドバイスをくれないか??? 俺はどうするべきなのか」

「少なくとも俺は君に死なれたら困る人間を知っている。

それでも君が死ぬのなら、彼は君を止めないだろう」

「……俺はそんな人間を知らない……一体誰のことだ???」

きみだよ。

おれ???

それは何かの例えなのか。それとも……。

「一体どういうことだ……??？」

「そのままの意味さ。君が死ぬのを困る人間は君自身さ」

彼は確かにそう言った。

何の含みも無く、何の例えでも無く、何の感情も無く。

そして彼は続けて言う。

「この場合の『君』と言うのは単純に『君』の事では無い。

聞いたことは無いか??? 人間には表と裏があるというのを。

もつと言えば二面だけじゃない。君には沢山の『君』が居る。

例えば そうだな、君が会社の上司と接するのと会社の後輩に接するのは同じかな???

『怒れる君』 『迷う君』 『悲哀の君』 その全てが集まって『君』と  
言う一人の人間になるのだ。

もし君が死ぬならそれらの『君』が悲しむよ。

つまりね……

どんな人間でも死んで悲しまない人間は居ないんだよ」

彼は笑う。と言っても顔は見えないので解からない。

だけど彼は確かに笑った。俺も笑う、作り笑いでない心からの笑顔で。

目の前の鏡に俺の顔が映る。すると不思議な事に気が付いた。



鏡の中の俺は泣いていた。

先ほど彼が言っていた『泣く君』と言つのを思い出す。

そうか……これが彼が言っていることなのかと思つ。

驚きはしない。

そして直感する。なぜ彼は俺を生かそうとするのか。

「お前は……」

「気が付いたみたいだな。そうさ俺はな

きみだよ。

その後は彼と少し遊んだ後、俺は外に出て行った。

外はすっかり暗くなって真夜中になっていた。

そう言えば彼と話しているとこんな話を聞いたことがあるの思い出した。

『人間は仮面を被っているのだと』

「あれ……あの話は何だったっけな……」

取り合えず家に帰ってロープとカッターナイフを捨てて寝転んで考えてみる。

孤独でもいいのかなと、生きていてもいいのかなと。

彼は確かに言った。どんな人間でも死んだら悲しむ裏の自分が居ると。

彼は俺の深層心理の中で生まれた俺自身だったなら俺が死ぬと困るのだろうか。

もしかすると本当に全てが嘘だったのかもしれない。

だけれども俺はあのアドバイスで変わったのかもしれない。

朝起きて鏡の前に立つ。

「死ぬんじゃないかったのか??？」

「まあね」

## 第十二話 『自分物語』

私はこう思うんだよ。人間は二つの種類に別けられる。

一つは『作り手の人間』。

一つは『作られる人間』。

どちらも似ているようで似ていない、いや正反対なのかもしれない。

それでね、私が考えているのはここから。

人間に『作り手の人間』は絶対に居ない。なぜか解かる???

そう、その顔。すごくいい顔してる。貴方の思っている通り。



『元々作られているのが人間だから人間は作り手にはなれない』

あの少年も、あの店の店員も、私でさえも、全て作られる側なんだよ。

でも唯一作る側の人間になることが出来る方法がある。

知りたくないか???  
自分の世界くらい自分で作りたいたんだろ  
う?????

「で……その方法は??？」

「それがこの『自分物語』」

そうして若い女の人が俺にA4サイズのノートを手渡してくる。

それより夏の夕刻とは中々風流だと思っ、まだ暑さは残っているが日中に比べると大分ましだ。

本題に戻ろう。俺は現在、どうも怪しげな女性に押し売りされているらしい。

本当はこんなこと断ればいいのだが俺は人の頼みを断るのが苦手です。いつでも損ばかりしている。

だから心を鬼にしなければならぬのだが、なぜかそれが出来ないで居る。

なぜか??？ この女の人と俺の考えは同じだからだ。

人間は作り手には決してなれない、これには同意できる。

「無料でお試し期間もやってますから、取り合えずここに置いておきますね」

「いやあ……あの困ります……って……」

気が付けば女性は逃げるように去っていった。

それより『自分物語』だと????

何かの宗教だろうか???



俺は一人暮らしで6畳の小さなアパートに住んでいる。

部屋の中には中心にちゃぶ台があって、それ以外は何も無い。冷蔵庫もテレビも。

基本家と言うのは寝る為にしか使っていないから別にそれで困ったことは余り無い。

夕飯を食べた後、俺はちゃぶ台の上に『自分物語』を広げる。

最初のページの説明書きを呼んでみる。

「えーっと何々??？」

貴方の望んでいる物語を書きましょう。そしてその詳細を書いてください。

すぐにそれが届くでしょう。

注。一ページに物語は一つだけです。

うわぁ……何かとんでもない物を手に入れてしまったみたいだ」

一ページめくる。

「結婚したい……！」

—ページをめくる。

「人間観察の為、世界を忠実に再現した玩具をください」

—ページをめくる。

「あいつむかつく。死ね」



•

•

そして最後のページだけ何も書かれていなかった。

これが最後の物語なのかと思う。

勿論俺がこんなノートを信じてはいない。こんな物が世界にあるはずが無い。

そう思って鉛筆を握り締めて力をこめる。

「金持ちに……なりたい……っ」と

「んんん」

部屋がノックされる音。

「誰だ???? こんな時間に」

俺は何の疑いもせずに扉を開ける。

そこに立って居たのは全身が真っ黒で両手にアタッシュケースを  
持った男だった。

「警察から追われているんだ。」

「少  
し  
だけ  
かく  
まっ  
て  
く  
れ  
な  
い  
か  
？」

俺はあっけに取られているとアパートの階段に二人組みの刑事が見えた。

それを見た男は慌てて、ドアの隙間に割り込んで力任せに俺の部屋に入り込んでくる。

取り合えず俺は扉を荒々しく閉めてチェーンをかける。

男の姿を良く見ると傷だらけで血が滲み出ている。まさに誰かに追われているに相応しい姿。

ドアをロックする音。おそろしく……



「こちら警察の者ですが、実はこの近くの銀行でとんでもない量の現金が強盗にあいまして……。」

「この辺に怪しい男を目撃しませんでしたか??？」

「いえ、特に……。」

「解かりました。何か思い出されたら警察まで連絡を……。」

そう言うと、二人組みの警察の人達は出て行った。

震えていた男はアタッシユケースを抱きかかえてこちらをギッと睨んでいた。

とんでもない量の現金とはどのくらいなのだろうか???

ふと俺は思い出す。机の上を眺める。

そこには綺麗な文字で一行。

『金持ちになりたい』

そうか……このノートは……『自分の物語』を作るんだっとな。

作られる側が唯一作る側になる方法。それこそがこの『自分物語』

これは この状況は俺が作り出したというのだろうか???

俺は台所に行って刃物を握る。

俺はふと我に返る。

彼ら……以前『自分物語』を書いた人間達はとうなったのだろうか???

物語と言うのは作り続けなくてはならない。じゃあなぜ彼らは作り続けないのか???

あるいは作り続けられなくなっただの

か  
？  
？  
？

「……あ……」

俺はそこで初めて気が付いた。

物語を作るといふのは作成すること、つまり俺が世界を壊そうと  
思えば壊せたわけだ。

男の姿は消えてそこにはアタッシュケースだけが残っていた。

アタツシユケースを開くとそこには一万円札の札束がぎっしりと詰められていた。

そしてその真ん中に一枚のメモ用紙が乗っけられている。どつちやら何かの地図らしい。



「んー……警察の人は『とんでもない量』って言ったけどこの中には大体1000万位だな。」

となると他の現金の隠し場所か???

あー……考えるのがめんどくさくなってきた。

ふとテレビをつけてみる。報道番組がやっていた。

『闇に消えた年金!!! 8億はどこに!?!』

そうか……物語とはこういう風に作られていくのか。どこかで歪んでもこうやって修正されて……。

小説を作るとは　　こういう事なのだろうか。

となると人生すら物語なのではないか???

そして作る側と作られる側。俺とあの男のように。

物語でも登場人物紹介には決して現れることの無い人間。俺はそれを作り出したのか。

「じゃあ、彼らは俺の人生の為に作られた人間だったのか???

んー……やっぱりこういうのは苦手だな」

貴方は作る人間ですか???

私は作られる人間です。

私は誰か　作る側の誰かの人生の為の登場人物にしか過ぎませ  
ん。

それが感動で勇敢な物語なのか。それとも残酷で歪みきつた物語  
なのか。

さて貴方は……???

第十二話 『神のお話』

【神のお話】

『貴方は神を信じますか？？？』

私はそんな看板を駅前で見た。つくづく人間は馬鹿だと思った。

神が居るから何だというのだろうか???

人は神に縋るとは前々から聞いていたのだがここまでとは思って  
いなかった。

教会で懺悔する。人に褒められることをする。神を信じて祈りを  
ささげる。

神だつて何でも出来るわけじゃない。神に出来る仕事なんてたか  
が痴れてる。

しかし彼らは居るのかもわからない神に縋って助けを求めている。  
それがどれ程馬鹿なのか気が付いていない。

「俺の知らないところで祈りをささげられても……みてねえんだか  
ら……」

紹介が遅れた。俺は『神』だ。

ん???  
神様のくせに髭が生えていないし、普通の服だつて?  
???

ふざけるな！！！！ 俺は19歳だし、かつこつけてキヤーキヤー  
言われたいわ！！！！

「……………本当に……………馬鹿だよな……………」

神の仕事が何なのか知らないのに……………。

褒められることはしていない。本当は憎まれるべきなのに。

人間など作るべきではなかったのかもしれない。こんな生物……………。



•

•

俺は家（4畳半のアパート）に戻って寝転がる。つくづく狭い部屋だと思った。

部屋には何も無い。何か置くだけのスペースが無いからだ。

ふと、俺の部屋のドアが開く。

そこからそれこそ人間が思い浮かべる『神』にふさわしいような白髪、髭、杖を持った老人が入ってくる。

「……………仕事、か……………???」

「ええ、今日のノルマは560人です」

その言葉を聞くと、いつも思い出すことがある。

あれは俺が神様としての初仕事だった時の事……。

6年前の寒い冬の日。あれは確か俺が『神』の研修だった時。

「良いですか???' 『ナナシ』は神である知識は十分にあります。

後は感情を全て捨てる事。可哀想だとか、罪悪感だとか、全て捨てなければなりません。

勿論、貴方になら出来ると思いますが……」

「うるせえ、んな事何回も聞かされてるよ」

俺は『ナナシ』。

名前は無いから『ナナシ』。

感情が無いから『ナナシ』。

神じゃ無いから『ナナシ』。

……何も無いから『ナナシ』。

場所は空、不思議に聞こえるかもしれないが文字通り空に漂っている。

相手は現在の神だが後数日で神の期間を終えて、天国ではなく地獄へと墜ちる。勿論、地獄で裁かれるだろう。

「んで???? ターゲットは誰よ????」

「あそこに二人の恋人が居ますね???? その内の一人を……」

2  
7  
時  
間  
以  
内  
に  
殺  
し  
て  
く  
だ  
さ  
い  
。

神の仕事。それは殺す事。

まるで狂った兵器のようにひたすら人間を殺す事。

それがたとえ子供でも、女性でも、老人でも……。

神はその人間達を選ぶ。誰がどうやって死ぬのかを選ぶ事。

具体的には毎日、指定された数の人間を殺さなければならない。

そしてその数に達さなかった場合、無理矢理バランスを戻す為に『戦争』を起さなければならない。

なぜか???

例えば、毎日800人殺せといわれて半分の400人しか殺さなかったとする。

これが一週間続くと仮定しよう。すると2800人の人が死ななかった事になる。

この2800人を殺す為に『戦争』をしなければならない。

とんでもないシステムだと思う。

そうか……これは俺が神にふさわしいか試しているのか……。

もしどちらかを殺さなければ俺は『神』にはなれない。

殺す覚悟があるのか……試しているのだ。

「どうしました??? 貴方は今何を考えているのですか??? まさか感情が無いくせに……」



「黙れ。ちょっと考えているだけだ」

俺には感情が無い。

俺には感情が無かった。悲しいだとか嬉しいだとか勿論慈悲の心も持ち合わせていなかった。

だから俺は周りから『神』にならされた。感情が無かったから。

勿論今だつてあの二人の事を可哀想などとは思っていなかった。

視線を降ろし真下のビルの屋上に居る二人の男女を眺める。年齢は……20歳くらいだろうか???

何の話をしているのか解からない。解からないが……。

二人ともとても幸せそうだった。

「さて期限はまだ26時間と58分あります。どちらの方が必要なの  
のか決め次第、消してください。」

「でわ」

「.....」

そう言っ て彼は消えた。まるで手品のようだ。

視線を再び下ろして考えてみる。

もし男を殺せば??? 女は悲しむだろう。だが死ぬ事は無い、俺が操れるから。

じゃあ女が死ねば??? 男は嘆くだろう。だけど……。

……俺に感情は無かったはずだ。可哀想だとか思うわけが無い。

だから『神』に相応しかったんじゃない無かったのか????

じゃあこの気持ちは何だ????

な  
ぜ  
俺  
は  
迷  
っ  
て  
い  
る  
ん  
だ  
？  
？  
？

「ねえ、裕二は神様って信じる???」

「そつだな〜……あんまりそついつの信じないからな……。可奈は???」

「私は信じるよ……神様が居るなら……運命も……あると思うから」

「最後の方聞こえなかった。もう一回言って」

彼らの後ろを俺は追っていく。この行動に何の意味があるのかは解からない。

いつもの俺ならあの場ですぐにどちらかを殺していたと思う。それもとてとても簡単に。

だがなぜ……??？俺は一体何を迷っているんだ??？まさか殺すのを躊躇っているのか??？

「……よし……次の横断歩道で飲酒運転の車に跳ねられて男が死亡……」

二人が横断歩道に差し掛かった時、物凄いスピードで車が突っ込んだ。



「可奈！？ 可奈！！！ どこだ！？」

「裕二！！！！ 大丈夫だった！？」

俺は解からなくなっていた。

神は正義じゃない事はわかっている。

以前にも何度も言われた。神には相当の覚悟が要ると、解かっていたつもりだった。

だけど……。

俺は小さな力だが人一人殺せる力を所有している。

その力は何か代償を負うことも無い。しいて言えば強力な罪悪感が残るくらいだ。

しかし俺には感情と言う物を持ちえていなかった。

罪悪感も正義感も悲愴感も虚無感すらも何も無かった。

何があった??? そう聞かれれば即答するくらい何も無かった。

「じゃあなぜだ??? なぜ俺はこんなに迷っている???」

あれから何時間もの時間が経過していた。

目に映るのは二人の背中。『どちらかを殺す』それが神になる試練。

目を閉じて手を前に差し出し頭の中でイメージする。

例えば偶然出くわした連続殺人犯にバツタリ出くわした二人、男は女を庇ってナイフで一突き……そして死亡。

それは偶然ではなく必然。俺が作り出した台本に過ぎない、そして彼らは単なる役者。

役者……やくしゃ……ヤクシャ……やくしゃ

「……おれは……どうしてしまったんだ???

まさか……今やらになって……」

俺は解からなくなっていた。もし片方を殺せばそれは残った方は  
絶望するだろう。

例え神であっても……それが許されるだろうか?? いや別に  
許されるのならやっついていいという意味ではない。

あんな二人から、幸せを奪い去る事は許されるだろうか???

約束の時間まで……後12時間と8分

.

.

あの二人が別れた後。俺はどちらに付いていくでもなく、ただ歩いていった。

ただただ道を歩いていた。まるで何かに取り付かれたように作業を繰り返していたように……。

ふと裏路地に目をやる。



「おら……！…… おっさん……！…… さっさと金だしな……！……」

「ひゅっひゅっ……」

俺は声をする方に向かっていく。

見た目は大体高校生くらいだろうか??? 人数は6人、なるほど……これが親父狩りという奴か……。

らは鋭利な刃物を振りかざして、威嚇してる。

そして地面に這いつくばっているのは少し太っているサラリーマン風の男。余りの恐怖に声が出ないらしい。

俺は何の考えなしにゆっくりと高校生達に近づいていった。彼らがこちらに気が付く。

「あっ??? 何なのデメーエ???」

「ん??? 俺の事か??? 俺は『神』さ。それより君たちは――



それを見て俺も笑う。そうか、こんな奴らが信じると思うと思った自分が馬鹿だと単純にそう思っただけだ。

すると彼らは笑うのを止めて殺気混じった目でこちらを睨み付ける。

「何??? お前俺らが怖くないの???」

「うん。私は怖いものなんて無いよ、例えばそうだな……君たちが持っているそのナイフ。」

「だけどその前に君が死んでしまえばどうなると思う??? 簡単だ。ナイフは何の脅威にもならない。」

「それに俺は神だ。君たちが持っているその玩具の刃が届くわけが無いだろう???」

「ああ!? 調子乗ってると痛い目見るぞ!!!」

手前の少年がナイフを構えて俺に突撃してきた。悪くない、スピードに乗ることが出来ればナイフの破壊力は格段と上がるからだ。

だが、問題なのはそれが俺に届くかと言うこと。簡単だ、届かない。

彼は止まる。俺がそうさせたと言ってもその通りだ、そして今度はその場に倒れこむ。

後でまた動かすから、命に別状は無いだろうがどんな人間も“心臓が止まれば”その場ではどうすることも出来ない。

ただただ彼は重力に逆らえずに地面に這いつくばる。それ以外にはありえない。

「さあ……10秒以内に俺の前から逃げることが出来たら許してやる。」

ちなみにそうしなかった場合、残念だが君たちにも痛い目を見てもらう。



? な  
? ぜ  
俺  
は  
彼  
を  
殺  
さ  
な  
か  
っ  
た  
の  
か  
?

殺そうと思えば全員殺せた。けど俺は彼らを殺すことは出来なかった。

そしてこう考える。その言葉に意味があるのかは解からないのだが、思考する。

『もし試練の標的があの不良共なら簡単だったのか???』

「……残り時間は……9時間と16分か……」



その後、俺は歩き続けた。

何処か行きたかったわけじゃない。何かしたかったわけじゃない……ただ。

ただ歩き続けた。

そう言えば試練に合格できなかった俺はどうなるのだろうか???

「たぶん……“消される”んだろうな」

消される。『消失』

死ぬのではない、消えるのだ。

俺の存在は初めから無かったことになってまた他の神がこの試験

を受ける。

しかし、そのことについては何も思わない。別に死のうが消えようが俺は困らないと思う。

その時、何の前触れ無く俺は初めてこう思った。心からこう思ったのだ。

「そう言えば……俺は何で“神”になりたいんだっけ???’」

俺は止まった。

.

.

神になりたい理由。それは人それぞれだと思う。

支配したい。創りたい。壊したい。

何にせよ、神になりたいという理由があるはずなのだ。

しかし俺はどの言葉も思い当たらない。

支配する意味が解からず、創ること必要が解からない。創る意味が解からないから逆である壊す意味も解からない。

「神になってする事って言っても殺戮なんだけどな」

……そうだった……。

神の仕事は殺戮することだった。ずっと忘れてしまっていた。

例え誰が標的だろうが殺戮する。それが、それこそが神がするべき事。

俺は再び歩き出して、あの二人を探し始める。

残り時間は2時間と35分

【悪魔のお話】

男はいかにも値段が高そうな寶石屋の中に居て、丁度定員から四角い箱を受け取っているところだった。

ちなみに“神”が知らないことは無いので探すこと自体はとても容易い。

目を閉じれば指定された人間の場所が映像となって脳内に映し出され、別に歩かずともその場所に空間移動<sup>ワープ</sup>出来る。

「お前には何の恨みも無い。すまない……。」

男は通り魔に鋭利な刃物で一突きされて病院に運ばれる」

俺は何の迷いも無く。その言葉を発する。

途端に真後ろに居た女の人が鞆の中から包丁を取り出して男の背中を一突き、勢い良くその刃を突き刺した。

「.....うへっ.....」



鮮血。手に握っていたマフラーがその場に落ちて、それが合図のように男の体に働く全ての力は消えうせて、その場に倒れこむ。

男はそのままピクリとも動かなくなった、あたりに悲鳴が飛び交う。

哀れだ。あの男は多分、自分が誰に刺されたのか解からなかっただろう。

それどころかナイフで刺されたことすら……もしかすると自分が死んだことにも気が付かずに居るのかもしれない。

そのときの俺は“神”と言うより“悪魔”だったのかもしれない。



暫くして救急車が到着し、男の体は病院まで運ばれていく。

しかし男はまだ息があるらしく、サイレンが鳴り響いている。ちなみに救急車のサイレンが止まれば急ぐ必要が無くなることを意味する。

俺はさっき言った言葉を思い出す。

「ああ俺……は死ぬとは一言も言ってなかったな……」。

……まさか……な???」

【神のお話】

病院に着くと、すぐに呼吸器を取り付けられ病院の長い廊下を医者達が手術台の上に乗せて何処かに大急ぎで運んでいる。

医者達の話から男は緊急手術室とやりに運ばれるらしい。

……どれだけ頑張っても無駄なのに……。

この世の中の『死』をコントロールして居るのは俺だから……。つくづく人間は馬鹿な生き物だと思う。

はそれを緊急治療室の扉の近くにある椅子に座りながら眺める。そして口を開く。

「手術はしっぱ……」

「裕二！……！ 裕二！……！」

「あ……っ……」

そこに現れたのはあの女だった。

手術台の上の死にかけの男を見て泣きながら走っている。

やがて男は俺の目の前の部屋……緊急手術室の中に運ばれて、分厚い扉で男と女は遮られてしまった。

そして女は力無くその場にしゃがみ込んで泣きながら呟く。

「……人に……しないで……」

「お前は一人が嫌なのか??？」

……人間の前に姿をさらしたのはこれで二度目だ。一度目は……  
なんだっけ???

すると女は俺を見て、不思議そうな顔をした。

そりゃそうだ。先ほどまで居なかった場所に突然と人が現れたの

だ。本当なら気絶ものだ。

しかし女はうつろたえる事無く。俺の質問に解答する。

「私は……裕二だけでいい……、ところで貴方は誰???.?」

「俺か???.? 俺は“ナナシ”だ

さて質問する、お前は神様を信じるか???.?」



「信じない」

女は昼間と別の解答をした。

きっぱりと、その存在を全て否定するかのようだ。

「そうか。それは良かった、俺も同じだ。」

それどころか神様は居ない方がいいと思う。まあそこは思想の違  
いだから別にどうでもいい」

その時、緊急治療室の中から一人の看護婦の人が出てきた。

その手には小さな箱が握り締められていて、それを女に差し出した。

これは確か……そうだ。あの男が刺される直前に買っていた物だ。

女はゆっくりとその箱の蓋を開く、途端に滝のような涙が溢れ出す。

俺もそれを見る。

結婚指輪だった。

【無感情者のお話】

俺は絶句した。そして今までに無い“罪悪感”が内からあふれ出

す感覚に襲われる。

… 途端に何もかも解からなくなる。このまま男を殺すべきなのか…  
… ???? それとも俺が消えるべきなのか???

解からない。何もかも解からない。

自分か他人か。

奪うか与えるか。

幸運か不運か。

地獄か天国か。

消すか消えるか。

希望か絶望か。

…… ナナシか神か

解かっている。無感情者が罪悪感を語るべきでないのは解かっている。

「……神様は酷い奴だな……。本当に死ぬべきだよ……」

「そうは思わない……。神様は信じないけど酷い奴だなんて思えない」

女は言う。俺の眼を見て。

まるで子供を叱る親のようだ。

「私が彼と出会えたのも神様のおかげなら……。私は神様を酷い奴なんて思えない」

「……お前は何を言ってるんだ???」

一体全体こいつは何を言っているんだ???

違う。違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う……!!

俺が作れるのは『死』『絶望』『殺戮』だけだ!!! 幸運だとか希望だとか!!! そんな綺麗な物は作れない!!!

お前の愛していた者はこの俺に殺されるんだぞ!!! 少しは恨め!!! 殺意を持って!!!

お前は……俺に……何を望んでいるんだ!!!

ふと時間を確認する。後30秒

生きるか???

死ぬか???

「何を馬鹿なことを……。俺は知っている。

何でも知っている。知らないことが無いくらい知っている。

人を不幸にするのが神だ！！ 神は人を幸運にすること……は

……」

……そうだったのか。

俺はそのためにもここに居るのか。

全て思い出した。俺が神になりたいと思っていた理由。

それを思っていた時から俺は既に無感情者ではなかったのかも  
れない。



……そうか……なら俺は……

緊急手術室の扉が開いてそこからドクターが出てくる。

そして笑顔で微笑みながらこう言った。

「手術は無事成功しました」

女はふと振り返る。

そこに“ナナシ”の姿は無かった。

【 “神”のお話】

おや……どつやら不合格のようですね。ナナシ。

ああ、思い出したんだよ。俺が神になりたかった理由を。

聞かせてもらっても???

一人の人間でもいい。たった一人の人間でもいいから『幸運』にしたかった。

誰かを殺すことしか出来ない神として、誰かを幸せにしたかったんだ。

それが俺が神になりたかった理由。

誰かに憎まれてもいい。それでも誰かを幸せにしたかった。

別に誰かを幸せにするという意味では別に神にならなくても良かったのだ。

さあさっさと消してくれ。俺はもうやら神には向いていない。

あんたらが思ってたようなただの無感情者じゃないみたいだ。

神になった理由……『ナナシ』としては不合格ですね。

だけど……

神としては合格です。

はあ？？？？

俺はすつとんきょんな声を上げる。

こいつは何を言っているのだろっつ???

そんな思いがこみ上げてくる。

神に相応しい者。それは誰かを殺す事に罪を感じない者ではありません。

逆に誰かを殺す事にとつもない罪悪感を感じる者こそが相応しいのです。

さらに貴方は『絶望』させる立場から初めて『幸せ』にする立場

を望んでいました。

だから 貴方は“神”なのです。

全ての人類の『死』を操る神なのです。

俺は答える。



7

7

•

•

俺は仕事を終えてあのボロアパートに戻る道を歩いていた。

今日も大量の人を殺してしまった。勿論、そんな簡単に人を『幸せ』に出来るなんて思っていない。

実際はあの試験から誰かを『幸せ』にする事は一度も無かった。やっぱり毎日のように誰かを絶望させている。

やっぱり神とはそういう者なのだとしみじみ思う今日この頃。

それでも、毎日のようにノルマを少しづつ減らして貰うように交渉している。最近計算したら900人近くの間人が助かっていた。

その時、一人の少女が俺の目の前に現れる。年齢は大体6歳位。

「ねえ!!! 神様って信じる!?!」

「ん??? じゃあ逆に聞くけど君は神を信じるか???」

「私は信じるよ!!! だって神様が居ないと私は生まれてこなかったんだもん!!!」

この子はこの歳で神を信じているのか。

それは勿論、神の本当の仕事を知らないからだろう。

殺人者を好きな人間が居ないように、それは当たり前のことである。

「君が生まれてこなかった??? それはどうしてだ???」

「私のお父さんはね!!! 一度死んじゃいそうになったんだけど神様が助けてくれたの!!!」

「もしかすると死に掛けさせたのも神様の仕業かもしれないんだよ???」

「でもお父さんは生きてるよ??..?」

その言葉で俺はハツとした。

俺が殺さずにすんだ900人の人は幸せなのだろうか???

もしかすると彼らはとても幸せなのかもしれない。

俺は知らない何処かで幸せを作っていたのかもしれない。

「ナナ”————!!!」

その時、女性の声がする。

何処かで聞いたことのある言葉。

「ほら、お母さんが呼んでるよ……?」

あっ……君のお母さんに伝えておいてくれ。

神様はやっぱり酷い奴さって



女の子は笑顔で笑って俺の前から姿を消した。

その時、暖かい風が吹いた。すると俺はいつも思い出すことがあるのだ。

あれは俺がああ試験を受けるずっと前……初めて俺が人間に姿あらわしたときの事。

しかし、それはまた別のお話。



第十四話 『殺言葉。リターン』

俺はこついう話を聞いたことがある。

『人間は唯一誰かを憎む動物である』

はて????? これは誰の言った言葉だったかな……。何処かの学者????? あるいは学校の先生?????

……まあいい。

取りあえず俺には今、この通りに憎んでいる奴が居る。憎悪して、殺意に目覚めている。

相手の名前は萩原はぎわら 俊二しゅんじ。俺と同じクラスの奴だ。

さて、ここでなぜ俺が奴を殺したいと思っているか。

奴は俺にとって『何もしていなかった』。親友でも友達でも虐め相手でも無かった。

そうだ、奴は俺にとって本当に、何の意味もなく、そこに何の意義もなく、『何もしていない』存在なのだ。

関わったことはなく、触れたことはなく、喋ることはなく、目をあわすこともなく……。

奴は俺の人生に一切関わらなかった。もしかしたら奴の視界の中に俺は映っていなかったのかもしれない。

勿論、そんな人間を憎んでいるわけは無い。ただ、奴を殺す事が俺と奴の初めての関わりだと思えたのだ。

殺す事で初めて、二人の物語はスタートする。

だから消すことにした。殺そうと思った。

「殺すにしても、どうする????」  
最近の警察は少しの痕跡で犯人

を探し当てることが出来るらしいし……」

困ったのが殺害方法。シンプルにナイフで一刺しするにしても、そのまま殺してしまえば確実に見つかってしまう。

何かアリバイのような物が必要になるのだ。じゃあどんなアリバイ工作をするか??? 何かカラクリ道具で時間差で殺害するか???

そもそも俺と奴の関係が零なら疑われないのではないだろうか???

……うーん。殺人とはどうも難しい。

そんな時、俺の耳にある噂が入ってきた。

「ねえねえ!!! 知ってる!? これ4組の子が言ってたんだっどき!!!」

夜中の3時33分に突然と携帯に無言電話が掛かってくるんだっ

て！！！

それでね、誰かの名前を言うの　そしたらその人は3時33分  
きっかりに……」

死  
ぬ  
ん  
だ  
っ  
て

•

•



俺はその晩、奴をどのように殺してなおかつ自分はどのようにして罪を逃れるか計画していた。

誰かに罪を擦り付けるか??? その人物は一体誰が相応しいのか????

ちなみに先ほどを台所に向かうとそこには5本の包丁があったの



机の上に置いてあった携帯電話が鳴り響いた。

時刻は

3  
時  
3  
分

俺は恐る恐る携帯電話を手を取った。体の奥底から恐怖と言う感情がこみ上げてくる。

ここで俺が恐怖したのは二つの理由がある。

まずこんな時間に電話が来ることは生まれて初めてだ。人間と言うのはどうも初めてには弱いものだ。

そしてもう一つ、先ほど聞いたあの噂。

『夜中の3時33分にかかってくる無言電話。』

そして誰かの名前を言えば　その人間は

死  
ぬ

『

俺はゆっくりと携帯を耳に近づけてみる。

無言電話だった。。。

勿論あんな噂を信じているわけではない、だから俺はゆっくりと電話を切った。

一体誰がこんなデマを流したのかは解からない。一体何の為なのか??? しかしそんな暇つぶしに付き合ってる暇は無い。

さて……明日の学校が楽しみだ。



•

•

結論から言えば、奴は次の日学校を休んだ。

体調を崩したのか。単なるサボリなのかは定かではないのだが、計画が先送りになったのが残念でならなかった。

その日の帰宅途中。

明日の今頃は奴を殺しているだろう。そして初めて奴との“関わり”が生まれる。

もし奴は殺されたとしても俺に“殺された”と言う関わりを得る事が出来る。

もしも殺した後何の変化も無かったら俺と奴はその程度の“関わり”だったという事だ。

そう考えると

「うわっ！！！」

俺は一瞬の判断で人間の急所である心臓の部分。肋骨の辺りをガードした。

すると腕に鋭い痛みが走って血が噴出した。何かが刺さった感覚。

小道から誰かが飛び出して俺に向かってナイフを刺してきたのだ。

反射で閉じた右目だけうっすらと開いて状況を確認する。

そこには萩原 俊二が立っていた。

血まみれの腕を抑えながら俺はあの場所から全力疾走で逃げてきた。油断していた……奴も俺を殺そうと考えていたのか。

よくよく考えれば当たり前のことなのだ。別に奴が俺を殺そうとすることもありえない事でもない。

後ろを見ても奴が居ないことから追跡は諦めたようだがこれじゃ一筋縄じゃいかないらしい。

少し作戦を変える必要があるかもしれない。

俺はまた今日も徹夜して計画を考えることにした。

•

•

「……奴を誘い出す手は無理となると真っ向で勝負するか???

いや……奴のナイフの腕も中々のものだった……これじゃ最悪、  
奴に殺される」

奴もわかっていたのだろう。俺が奴の人生にまったく関与してい





俺はハッとまた恐怖を味わう。恐る恐る時計の時間を見る。

3時33分

俺は耳にゆっくりと携帯を近づける。

無言電話。

俺は時間を無駄にしない為に電源を

電源を……

「萩原 俊二」

ト ト キ 一

電話の奥で声がした。

⌊  
⌋  
⌋  
⌋  
⌋

俺は気が狂ったのかと思った、自分でも情けなく思う。あんなこと  
とに付き合ってしまうなんて……。

一体誰がこんなデマを流したのかは解からない。一体何の為なのか???  
しかしそんな暇つぶしに付き合ってる暇は無い。

さて……明日の学校が楽しみだ

ん……???

俺は気が付いた。



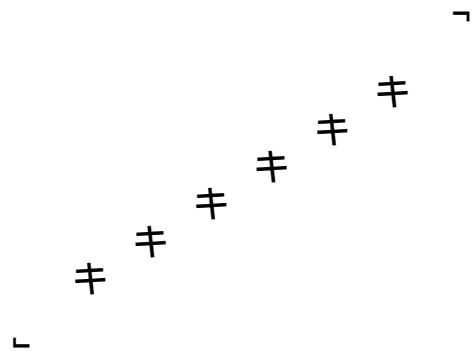


「もしかして……で……で……だから……??」  
「？」

次の日。一つの街で同じ時刻 3時33分に死んだ二人の少年  
が見つかった。

二人は同じ学校に通っていたのだが余り関わりが無かったらしい。

二人の関わりと言えば両方の携帯に全く同じ時間 3時33分



に着信履歴があったことぐらいだった。



第十五話 『人形がついて来る!!!』

このお話は私が8歳の誕生日を迎えたときから始まる。

忘れてたくても忘れられない。今までも……これからも……。

その日は寒い冬の日で朝から私の住む地域では大雪が降っていたのを記憶している。

私はまだ小さな子供だったので朝から誕生日プレゼントを買ってくるであろう父の帰りを心待ちにしていた。

しかし、いつになっても……いつになっても父は帰ってこなかった。もうとっくに夜中の2時だというのに……。

仕方なく、私は眠りに落ちた。

そして次の日の朝のこと。

目覚めのよい朝だった。ふと隣を見ると父の布団は膨らんでおらず、そこに父の姿が無いことを確認する。

その時、私は違和感を感じたことを覚えている。丁度私の頭上……つまり枕の少し上の辺りから……『視線』を感じるのだ。

誰かが私をジッと見ているような……それも強烈な視線が……。

恐る恐る。私は寝転がって、頭上を見てみる。

「キヤ……ッ!？」

そこには一体の西洋人形が立ち尽くしていた。金色のフロントに青色の眼、華やかなドレス。

私はその人形を抱え込みながら考えた。誰もが不思議に思うだろう

う。

はて???? この人形はどこから来たのだろうか???

もしかしたら、父が私の誕生日プレゼントを渡せずここに置いておいたのかも知れない。うん、きっとそうだ。

私はそのことを母に報告する為に、布団から出てリビングに向かう。

リビングの中心。そこに母は座り込んでいた。

放心状態というのだろうか??? まるで魂が抜けてしまったか



のように、とにかくいつもと様子が可笑しかったのだ。

私が話しかける前に、母は言う。

「お父さんね。。。昨日の夜中に……殺されちゃったの……」

え

?

?

?

母は泣き出してしまい、私はその言葉に困惑させる。

そんなまさか……。父が遅かった理由は殺されていたから……？  
???

誰が……？ どうやって……？ なぜ……？

次々と疑問があふれ出てくる。当たり前だ、八歳の少女が人が人を殺すなんて知ってるわけもない。

その時、私はふと思いついた。さっきから手に握っていたこの人形の事。

じ  
ゃ  
あ  
—  
体  
誰  
が  
こ  
の  
人  
形  
を  
？  
？  
？

私は気味が悪くなって人形を押し入れの奥にしまっておいた。

•

•

その後警察署に行った。父が死んだ事についていろいろと聞かれた。

聞きたいのはこっちの方だ。だけど教えてくれたのは父が死んだと言っただけ。

あの晩。温度は1 くらいだった為、父はナイフで刺された後、傷口は閉じたものの大量出血のために死亡。

神経は温度の為に鈍り、かなり苦しんだらうと必要も無い事も言われる。

母は殆ど喋らなかったから私が説明してた。我ながら良く出来た子供だったと思う。

きっと母はこの時からおかしくなっていたのだろう。丁度私が中学三年生の時に精神病院に入院する事になるのだから。

「ちゃん！……！」

後ろから私の名前を呼ぶ大きな声がした。私は振り返るとそこにはさっきまで話していた警察官の人が居た。

そして私の目の前に立って、何かを差し出してくる。

私は血の気が引いた。



「このお人形。                    ちゃんのだね、忘れ物は注意しなきゃ駄目じゃないか」

「あ……はい……」

私は人形を受け取った。

その時、人形は少し笑ったような気がした。

私の家の裏には大きな川が流れている。  
確か歪川ゆがみがわだったかな

川自体がぐにやぐにやと曲がっている事から歪川らしい。

それよりその周りは草むらになっていて立ち入り禁止になっているのだが、私は家に帰る途中、そこに人形を投げ捨てた。

母はもうこんな状態だし、周りに人が居ないのでここに人形を捨てたのは私しか知らない事になる。

とにかく気味が悪かったのだ。一体あの人形は誰が持ってきたのだとか、なぜ父の死んだ日になのだとか、とにかくいろいろと……。

これで私は恐怖から逃げ切ったつもりだった。

物語はここで終わると　そう思っていた。

•

•

•

それから数年後　私は高校一年生の誕生日を迎えていた。

高校は近くの公立高校に通っているが寮暮らし、別に家でも良かったのだが……。

丁度一年前に母親が精神病院に入院を始めてから家には一人なので寮で生活する事を決めた。

時刻は10時半。さっきまで私の誕生日をクラスの友達に祝って貰っていた。

時間が時間なのでお開きにして今は散らかった自分の部屋の掃除をしている。

ふと、壁とタンスの小さな隙間から金色の糸のような物が落ちているのに気がついた。



あの人形だった。金髪のブロントにあの瞳……華やかなドレス。

私は驚きの余り、人形を持つ手を離す。

その時、私は直感する。ここに居ては危険だと

勢い良く私は外に飛び出した。行く当てもないのに、逃げた。

部屋には金色の人形だけが取り残されている。

走った……とにかく走った……。

息が切れるまで走っていた。向かったのは友達の家。

あの部屋では生活しなくなかった……、とりあえず今は泊めてもらう事にする。

友達はすんなりいいよと言ってくれた。やっぱり持つべき物は友達だ。

私は安心したせいか、すぐに眠りについた。







一年後。場面は切り替わって病院

ベッドの上で座っている女性と看護婦さんの話が聞こえてくる。

女性はどっちら今日で退院するらしい。

「ほら言ったとおりでしょ??？」

人間って言うのは外部より内部を破壊した方が後にも先にも有効なのよ」

「でも何でなんですか?? 私はまだ貴方の『娘』さんの近くに人形を三回ほど設置しただけですよ」

「貴方は本当に頭が悪いのね。私がつったシナリオはね。」

まず父親を殺して、あの娘にプレゼントを与える。あの娘はきつと『父親がくれた』と少しでも思ったでしょうね。

でも父親は死んだわけだから人形は一体誰からのプレゼントか…  
…要するに人形を持っているのは恐怖になってくる。

後はあの娘が人形を捨てた後に人形が『ついてくる』用に誤認させたのよ。それを繰り返せばいつかは人間は壊れるわ。

そして私の父親も子供も居ない自由な人生が待ってるってわけ」

「へえ……だからわざわざ貴方は気が狂ったフリをして、物語の登

場人物から外に出たってわけですか……」

女性はそういう事　と言つとニッコリと笑つた。

彼女はゆっくりと扉を開けて出て行く。

残された看護師は新しく入ってくる一人の少女の為、部屋の掃除を始めた。

第十六話 『voice』

俺は生まれつき妙な神経と言われた。

あれは確か小学校三年の時、その時俺は始めて人の『死』に向き合った。

もうスピードで走り抜けるワゴン車、路上で倒れて褐色の液体を流している固体。

同じ人間でも何か違ったものを感じた。

俺はあの固体に魅せられていたんだ。

「やっ！……！ やめてくれ！……！」

「……」

満月の夜。 あれは中学二年の夏。

初めて人を殺めた、その行為自体に躊躇する気持ちは無かった。

自分でも分かっていた。自分が人とは違うと言っことくらい分か

っていた。

人の人生はレールのようなものだと言ったことがある。

俺は既に脱線しているのだ、小学三年の時に

俺は足元に転がる無機質な個体を眺める。きっとここいつは自分が殺されるなんて思っても見なかっただろう。

自分はレールの上で真っ直ぐ進んでいけるとそう思っていたはずだ。

しかし脱線した。俺と同じように……。



「誰だ!？」

静まり返る裏路地。その暗闇の奥から声がした。

まずい……見られていたのか、俺はナイフを構えて暗闇の奥に進んでいく。

聞こえるのは足音だけ、当たり前だ。時刻は夜中の二時。

やがて俺の目の前には壁が広がる。行き止まり。

「どっくだー!? どっくにいるー!?」

『どっく???.? そんなもの何処だって良いだろっく???.? 安心しろ。  
俺はお前の仲間を』

「……いつから見た……」

お前が生まれたときからさ。と先ほどと同じように低い男の声が聞こえる。

俺はナイフを下ろすと再び闇の中から男の声が聞こえる。

姿は……見えない。

『俺を殺さないのか??? ああ、その感覚をもつ一度味わえるんだぜ?』

『?..?』

「姿を見えない奴をどうやって殺す。それにお前を殺しても何も感じない気がする……」

『そうかい。じゃあ聞くが初めての人殺しはどうだった???』

「……………」

「こいつはなぜ俺が今日始めて人を殺めたことを知っているんだ？  
? ? ?」

「先ほどの言葉……………」  
『生まれたときから…………』

「俺は答える。」

『ああ、なるほど。お前は依存しているのか、弱い人間だな』

「弱いだと????」

『そうさ、タバコを吸う人間はタバコに依存しなきゃ生きていけない弱い人間だ。』

酒を飲む人間は酒を飲まなきゃ生きていけない弱い人間だ。

人を殺す人間は人を殺さなきゃ生きていけない最弱の人間さ』

男がニヤリと笑った気がした。

『そうさお前は弱い人間さ。もうどうしようも無く弱い。最弱さ。』

弱い人間は群れる。だけどお前はそれをしない。

それどころか殺人と言う方法を使っている愚か者さ。

まあいい、そんな理屈は置いといて俺はお前に“期待”している』

「期待??? 何にだ???」

「フフフ……いい反応さ。それでこそ俺の観察対象で無ければなら  
ない。」

俺はただ道をそれた人間はどうなるのかと知りたいだけさ」

観察対象。俺の存在はそんなにくだらな物になつていたのか。

確かにこいつの言っていることは解かる。大いに解かる、俺の考  
えと一致する。

一致しすぎる違和感。これじゃまるで“俺”と話しているみたい  
だ。

そして男は最後に言う。



?  
?  
? お  
「 前  
は  
お  
前  
の  
存  
在  
を  
許  
す  
の  
か

「  
なあ、

俺がその問いに答える前に声は消えるのだ。

それから俺は狂ったように人を殺めていった。

まるで中毒者のように、何かにとり憑かれたように

跳ね回って飛び回り。

足掻いて足掻いて。

騒いで騒いで。

ふざけているかのようだ。

頭のネジがゆるんでしまったかのように。

どこか壊れたように。

どこか途切れてしまったかのように。

拳が無意識のうちに。

壊して暴走して残虐して。

切れたエンジンを補給するかのように。

ひたすら壊し続けた。。。



俺が始めて人を殺した時から三年が経過していた。

連日俺のことはテレビで報道されている。魔の連続殺人犯……。

俺は町の雑踏を歩いている。

このすれ違っていく人間共はきつと自分が殺されるなんて思っていないだろう。

それで初めて殺されかけたときにやっと気がつくのだ。

自分が終わってしまうと　脱線してしまうと……。

時刻は夜の十時を回った頃、町のあちらこちらに警察が配備されていて以前よりは難しくなったが俺にそんな事は関係なかった。

次の犯行が行なわれたら百人目。警察も血眼で俺を探しているんだろう。

ふと目の前の路地に人が入っていく。丁度一人で……。

俺はその後ろからついていく。



ポケットの中に入っているナイフを取り出して裏路地の人気のない道を行く男についていく。

その男が右に曲がると少し時間を置いてその後を追う。

男は体を反転してこちらを見ていた。お互いに見合う形。

気づかれていたのか??？ 俺はナイフを握り締めて飛び出そうと足に力を入れたとき 男の口が開いた。

「よお。久しぶり」



「その声……っ！……！ お前は」

その声は紛れも無く初めて俺が人を殺めたときに聞こえてきた、  
voice  
あの声だった。

しかし顔はよく見えない。フードを深く被っていて目元が完全に  
隠れてしまっている。

声だけで判断すればまだ若い、俺と同じくらいか。

「お前はこの数年間、面白いくらいに観察対象をやってくれた。

まあココまで脱線しなくても良かったのだが」

「お前は一体……誰なんだ??？」

「そんな事どうでもいい。しかし俺はお前の観察にも飽きたな、だから最後まで楽しませてくれ。」

「さあ俺からお前に最後の質問だ」

？ 「  
？ お  
「 前  
は  
お  
前  
の  
存  
在  
を  
許  
す  
の  
か  
？

三年前のあの日。こいつが最後に残した質問。

俺は考えてみる、俺は俺の存在を許すのか???

それはきつと……きつと

「まあこの仕事は長く続けているからな、人の感情はよくわかって  
いる。」

何を考えるのか。どんな時にどんな思考になるのかよく解かる。

だからお前と俺が最初に会った時、お前は鏡と話しているようだ

と表現したんじゃないか???

そうさ、俺の仕事は『人の感情』を知ること。

どんな状況でどんな感情を人は抱くのかを知ること。

さあ教えてくれ、人間を百人殺めたお前は自分と言つ存在を許す  
ことが出来るのか???

「俺は……」

「答えろ、お前は今どんな感情を持っている???

「

「

俺はそう言つと自分のナイフを眺めた。

「昨日の夜、私達がいた辺りで死体があったみたいだよ!？」

「ええ!？ 何かこわっ!!! もしかして例の連続殺人!？」

「いやなんか自殺みたいだよ。」

持ってたナイフでやっちゃったみたい、それで血文字で近くにな

ごめん なさい

って書いてたんだって」





「貴方まだあんな趣味悪いことしてるわけ???」

「趣味が悪いことはないさ。これもちゃんとした研究なんだからな」

街のカフェテラスに一人の女ともう一人、人間がいた。

人間と表現したのはフードで顔が隠れている為に顔が見えないからだ。まあよく見れば男であることが解かるのだが。

女は新聞を広げて隅ある記事を見てため息をつく。

「で???? どうだったのよ、百人殺した人間は自分の存在を肯定したの???? それとも否定したの????」

「どちらでもあり、どちらでもない。実に面白い回答だったさ。」

今までいろんな感情を知る為にいろんな人間を見てきたがあんなに0点の回答は始めて聞いた」

「回りくどいわね。結局何ていったのよ」

「あいつはな。」

「

車が行きかう街の音で二人の声は掻き消される。そして女の方がニヤリと笑う。

新聞に挟まっていた一枚の調査書を取り出して一番上の文字。  
Voice』を見る。

そして閃く。

「この題名が引っかけたんだけどね。」

「何でvoiceなのか解かったわ、貴方以外とロマンチストなのね。」

「ああ、俺は紳士だからな。」

さてここら辺でお話は終わりにしよう。」

そう言って、フードは立ち上がった。そして一言。

「でわ、自分を二重人格だと思い込んでいた哀れな人間に……さよ  
うなら」

『俺は俺の存在を許す!!! きっと俺は二重人格なんだ!!!  
ずっと声が再生されているんだ!!!』

気が付けばいつも人が死んでるんだ!!! 信じてくれ!!!  
俺は悪くない!!!』

「違う、お前は二重人格者でもなんでもない。

最低の感情だ。黙って消えろ」





第十七話 『夢才子』

私は勝ち組になっていた。

事業が成功して、今や日本を担う一大企業だ。その会社の社長こそがこの私だ。

窓の外を見るとそこには街が広がる。ふと眼に入る人間達が居る。遅刻したのか走っているサラリーマン、通学中の高校生、フードを深く被った男。

あれが下等生物に思えるほどに私は勝っていた。確実に勝ちを収めていた。

きっと誰もが私のことを嫉妬している。誰もが私と交代して欲しに決まっている、当たり前だ。

っと……こんなことを考えている暇は無い。私は起き上がってクリーニングしたてのYシャツに腕を通す。

ピンポーン

今日はやけに早いな……。

「社長、お迎えに上がりました」

「し」苦勞。すぐに行く」

俺はそういつとスーツに身を包んで俺の武器であるノートパソコンを手にとって家を出た。

長細い車　　リムジンに乗り込んでモーニングコーヒーを味わいながらパソコンを開く。

グラフを見ても我が社は他の企業よりスバ抜けて勝っている。ここまでうまく行くと面白いものだ。

私は少し笑みを浮かべて今日のスケジュールを見る。朝から会議か……、面倒だ。

そうこうしている間にも車は社に着いた。玄関にリムジンは止まって私は降りる。

社員達は私に深々と頭を下げて一礼する。

「おはようございます」「朝から大変ですね」

「おは

「キヤー……かつ……いい……!!」

「素敵なスー

ッですね」

「おはようございます」  
「間はいません……!!」

「貴方に勝てる人

「世界一の人材ですぞ」

「貴方無しでは日本は動きませ

ん」

「結婚したいわ……!!」

「社長は勝ち組です」

あちらこちらから俺を称える声。これほど心地よいものは無い。

まるで俺は神だ、俺はまるだ

「きえろ」

「邪魔なんだよ」

「無に帰

れ  
「

「失せる」

「金出せ」

「負け組」

だった」

「ガラクタ野郎」

「君を選んだのは失敗

「使えねえ」

「目障り」

「不必要」

「社会のクズ」

「ゴミ」

「負け組」

「負け組」

私はそこで目覚めた。





嘘だ。本当は私が勝ち組なんて嘘。負けの人生、まさしくその通りだった。

ただのしがないサラリーマン、いやあるいはそれ以下か……。

中卒で世の中に飛び出し15年。今や義務教育は高校までとされているのに私みたいな人間は当然通用しなかった。

始めの方は私は有能な人間だと自分で思っていた。中学では常に学年トップの成績。

しかし誰も私のことなんて見ていなかった。いや本当に私のことなど視界に入っていなかったのかもしれない。

誰も私のことなど興味が無い。居ても居なくても関係が無い存在。

「はあ………」

今日はため息を何回つくことになるのだろうか???

私は布団をたたんで机の上に置いてある汚いシワシワのYシャツ  
に身を包む

私の武器のノートパソコン……そんなもの無い。優雅な車も自転  
車でさえも無いのだ

•

•

入社すると後輩の連中は誰も挨拶しない。あいつらは自分以下の人間には媚売っても仕方ないことを知っている

考えれば当たり前。当たり前のことなのだ、人間としてごく普通のことなのだ。

人間なんて利己主義の塊みたいなもの、誰かを蹴落としても自分が大切なのだ。自分の人生の為なら何だってやる。

私もそうするべきだった。そうすればきっと日本の将来を担うような大物に

「……………ちょっと来い!」

「は……はい……ッ……！」

私より5歳下の班長。私はこいつが嫌いだ。

もし自分の班でミスが見つければ全て私のせい、おかげで私は首を切られかけた。

しかし、こいつのやっている事は人間として正解だ。      勝ち組だ。

私はその班長の下に向かう、偉そうなデスク。私の物と比べたら遥かに違う。

「お前!!! まだ書類提出してないだろう!!! 一体いつまで待たせるんだ!!!」

「スツ……すみませんッ。明日には提出します」

「昨日も同じこと言ってただろうが、もう書類は提出しなくても良いから!!!」

……言いたかないけどお前この仕事辞めたらどうだ???

何も言わなかった。いや、何も言えなかった。

とつとつ言われた、しかし前から解かっている事だった自覚もある。

人間には何事に向き不向きと言う物があるのだ。私は単純に向いていなかっただけ……と言いつつ訳す。

まるで子供、滑稽だった。



その日、仕事を終えたら夜の12時になっていた。

私は勝ち組だ。

事業が成功して、今や日本を担う一大企業だ。その会社の社長こそがこの私だ。

窓の外を見るとそこには街が広がる。ふと眼に入る人間達が居る。

リストラされた顔の青男、何かに絶望したような顔の男、フードを深く被った男。

あれが下等生物に思えるほどに私は勝っていた。確実に勝ちを収めていた。

きっと誰もが私のことを嫉妬している。誰もが私と交代して欲しに決まっている、当たり前だ。

っと……こんなことを考えている暇は無い。私は起き上がってクリーニングしたてのYシャツに腕を通す。

そろそろ迎えが

来ない。

十分経っても二十分経っても迎えは来なかった。

私はふと鏡の前に立つ。そこには酷く疲れきった男が立っている。

これが……私???

そこで突然と背後に気配を感じた。振り向く。

「おや」

「……誰だ???」

そこにはまだ若い。20歳前後の男が立っていた。

その顔には見覚えがある・・・そう私がこの人間と同じくらいの年齢の時、そう過去の私だ。

過去の私はニヤニヤして私の姿を見て笑い出す。

「酷い姿じゃないか。どうやら現実のお前は相当な運命を歩んでるみたいだな」

「現実……??? 一体何の話をしている……???」

「とぼけんなよ。気づいているくせによ、お前はいつも思ってたはずだ。」

夢の中の自分と現実の自分ではなぜこんなに違うかってな????

当たり前だ。夢ってのは人間の作り出す妄想であり非日常でもある。

現実で出来ない事が夢の中じゃ意図も簡単に出来ちまう。

そこでアンタは目覚めたところでこう思うはずだ。

『ああ、ずっと夢の中でもいい。現実に戻らなくてもいい。ずっと夢の中がいい』

ってな」

私は考える。それはつまりどういう事か。

いや……考えるまでも無いか。いつも私が考えていたことだ。

もし夢の中で生きるのなら、それは夢でなく“現実”になる。夢で生きようが現実で生きようがどちらの世界でも“現実”なのだ。

つまり夢の中で生きていてもそれは現実と言ってもいいのかもしれない。

「さあ選べ。俺の力を使えば、お前は一生目覚めることの無い身体になる。」

その代わりにお前は一生夢の中で、お前の思つがままに生きる事が出来る。

「さあ選べ！？ どちらがいい。どちらの『現実』をお前は望む！？」

「私は

」





「また一人増えましたね」

569

「まったく……この一年で患者は倍以上に膨れ上がっているぞ」

ここはとある大きな大学病院。そして一人の男がベッドの上で静

かに眠っている。

この部屋だけで同じような患者が20人は居る。しかし病気とは思えない表情で患者は寝ているのだ。

不思議な事に患者たちは全員が全員“笑っている”。

まるでいい夢を見ている子供達のように。

「彼も『ユメ墜ち』なんでしょうか……???’」

「恐らくな。ユメ墜ちした者たちは皆、笑顔を浮かべながら二度と目覚めることは無い」

「しかし思ったんですけどね。私達は彼に栄養を取らせていないに

もかわらず、なぜ彼らは生きていますか???

「……これは一部の人間しか知らないことだよ」

そう言って医者是新米の医者に資料を手渡した。たった一枚の紙切れ。

しかし、新米の医者は驚いた表情をして患者の顔を見る。

そして一言。

「でも、そんなはずは……」

「それは事実だよ。私も調べてみたがね、彼らは脳だけしか動いていないんだよ。」

他の器官は活動停止。心臓でさえも……しかし彼らの脳には電気信号が見られる。」

これは驚くべきことだとは思わないか??？」

「電気信号ですか……まさかユメを……見ているんでしょうか……??？」

「もしかしたら彼らはユメの住人となって生きているんじゃないの  
かな???」



第十八話 『奇妙な模様の羊達』

私は旅人である。死ぬまで旅人をやるであろう。

旅とは良い物だ。想像が出来ないものが世の中には沢山あるのだ。

今まで色々な物を見た。下から上に水が流れる滝、一日で姿を消してしまう洞窟。歪な愚形の果実のなる木。

私の思う旅はその想像すら出来ないものと出会うことに意味があり、意義がある。

そしてこのお話はそんな私がある大草原の中で生活していた一人の羊飼いと出会ったところから始まる。



「羊飼いよ。この地方には何か不思議な物は無いだろうか??？」

「不思議な物でございますか。それなら私の羊達などはどうでございましょう」

「お前の羊が不思議なのか??？ ふうん、私はもう何十年も不思議なものと出会ってきたがまだ不思議な動物は見ていないのだよ」

羊飼いの家はこの街から少し離れた草原の丘の上にあるという。

私はどんな不思議な羊なのかと想像してみる。

体重が存在しない羊。見えないほど早く走る羊。もしかしたら人語を話す羊かもしれない。

私はどんな不思議な羊なのか、早く見たくてウズウズしてきた。

すると、丘の上に小さな家と柵が見えた。その柵の向こうに何百は居るであろう羊達がうごめいている。

私は羊に駆け寄る。

「羊飼いのよ。これの何が不思議だというのか」

近くで見るといたって普通の羊なのだ。何かが違うだとか何かがおかしいというのは無い。

羊飼いに反応したのか、数頭の羊がワラワラと集まってくる。

そこで私はぎよっとした。

それは余りにも異常は模様だった。模様　　というよりシミがあったのだ。

羊達はシミのような物があった。別にそれなら問題は無い。

それが人の顔のように見える、『ムンクの叫び』のムンクのような顔、何かを訴えかけているような……そんな顔。

不思議　　いや不気味だった。

羊飼いは言う。

「この牧場の羊は全部、このような模様が浮かび上がるのですよ」

「この羊達は一体なぜこのような模様があるのだ」

「彼らは知っているんですよ」

自  
分  
の  
存  
在  
理  
由  
を

「存在……理由??？」

「その通りでございます。実はこの羊達は食用として私が街に売りに行っている羊達でございます。」

だから彼らは街に連れられていき帰ってこない仲間を見て自分達が一体なぜ存在しているのか???

なぜこの牧場でこのような羊飼いに餌を与えられているのか。

自分達はいずれ殺されて人間に食べられる。と知っているのです。

存在理由を知っているのです。だから彼らはそれに気がつくと思議な事に身体に模様が出来る。

あの叫んでいるような何かを訴えかけているような顔が……」

「自分がいずれ死ぬと……知っているのか??？」



羊飼いは頷きながら群れの中の一頭の羊の頭を撫でる。

自分達がいつか食べられるという事を知っていながらこの羊達は生活しているという。

それはどんな気持ちなのだろう。

自分の死期を知っているとは  どんな感情なのだろう。

私はその場に座り込んでしばし考える。

きっとそれは恨みなのだろう。自分は誰かの為にしか存在できない単なる栄養にしか過ぎない。

自分を恨むだろう。なぜ自分は食用の羊として生きてしまったのだろうか。

人間を恨むだろう。なぜ他の生き物が生きていく為に自分が殺されて食べられなければならないのだろうか。

あるいは食物連鎖の過程で仕方のない事だと思っのだろうか???

人間が生きていく為には食べなければならない。自分だって草を食べている、生き物として生まれてきたなら当然の法則。

そう解釈するのだろうか???

私は彼らの模様を見る。

あの悲痛を叫んでいるような、何かを訴えているような顔の模様。暫くそれを見ていた。

気がつけば夜空には星が輝く。

い。その日の晩。羊飼いは親切にも私を一日ばかり泊めてくれるらしい。

夕食はこの地方に伝わる料理。来客が来たときに作られる羊を使った料理らしい。

しかし何だか私はそれを食べる気にはなれなかった。彼らの感情が私の中に流れる。

そんな私を見て羊飼いは言う。

「貴方もあの羊達がどういう感情を持っているのか考えているのでしょうか????」

「ここには数多くの旅人が来ました。彼らは全員、そのことについて深く考えているのですよ」

他の旅人も……と言うことはここに旅人が来たのは初めてではないのか。

私が思うところは旅人と言うのはそういう性分なのだろうか。

私はそんな事を思いながら肉を一口食べる。　おいしい。おいしいのだ。

こんなに美味しい肉は今まで食べたことが無かった。私は二口、三口と食べていく。

あっという間に食べ終えた。羊飼いは言う。

「これは私の想像のお話です。」

この牧場の羊達は“恨み”や“怒り”。そんな感情は抱いていないでしょう。

おいしいでしょう??? この羊は確かにおいしいのです。

それはなぜか??? 私は特別何もしておりません。普通に生活させております。

じゃあなぜこんなにもおいしいのか????

きっと彼らは“誇り”とまではいかないかもしれませんがそれに近い感情を持っているのではないでしょうが。

自分の死期を知りながら、自分の存在理由を知りながら。

彼らは私達人間においしいと言ってもらえるように、そう思っているんじゃないでしょうか

「そうだろうか……いや……そうなのかもしれないな……」

なぜかこの羊飼いの言うことは納得できるのだ。

“ 誇り ” 彼らはそれすら抱いているのかもしれない。

彼らはそれを訴えたかったのか??? ああ表情で……



突如、目の前の視界が悪くなる。これは睡魔だ……

霞んだ景色の中で羊飼いが言う。

「旅人よ。貴方は愚かだ。」

彼らの気持ちを知りたいなら、彼らと同じようになればいい。

大丈夫、すぐにどいう感情なのか解かりますから」



朝、目が覚める。

私はあのまま寝てしまっていたのだろうか……。

ベッドから立ち上がろうと足に力を入れる　　立てない。

今度は腕に力を入れて立ち上がろうとする　　立てない。

仕方なくベッドから転がり落ちるようにして地面に足をつける。

一体どうしてしまったのだろうか???　　身体がうまくいう事を聞かない。

声が出ない、そもそも今までどうやって声を出していたのか解からないほど声を出そうとするのが辛かった。

今度は二足歩行しようと立ち上がる　　が立てない。仕方なく四つん這いで歩く、これは案外楽だ。

「ああ、起きたんですね」

「……」

「大丈夫さ、恐れることはない。君は全てを知ることが出来るんだから」

そう言って羊飼いは家を出て行く。

一体何を言っているのか解からない。私は部屋の中にあつた大きな鏡をふと見る。

そこには一頭の羊がいたのだ。

これが私???  
なぜ

•

な

ぜ



.

.

数カ月後、私は柵の中に居た。

逃げることは出来ない。逃げたらどうなるか知っているから出来ずに居る。

私の体にも例の様相がある。

確かに私はあのモヤモヤした感情を知ることが出来た。

ふと柵に近づいてくる二人の人影が見えた。

一人は羊飼いで、もう一人は見覚えの無い顔。

「これが“奇妙な模様”の羊達”です」

「ほう……私は長いこと旅をしてきたがこんな奇妙な羊は始めて見た」

私は叫んだ。私はあの旅人に“訴えた”。

！ 逃  
！ げ  
！ ろ  
！  
！  
！  
そ  
の  
羊  
飼  
い  
は  
危  
険  
だ



最終話 『終わりなど無いという事』

私はこう思うのだ。

どんな物語にも必ず“終わりはない”と

例えば勇者が魔王を倒すというお決まりの話があるでしょう。

勿論、物語自体は魔王が負けて世界は平和になって終わるだろう。

しかしそれを“終わり”だとは少なくとも私は思わない。

もしかすると勇者がその後不治の病に倒れてまた“別の物語”

がスタートするかもしれない。

そうだ　私はこう思うのだ。

『何かが終わるといふのは何か“別の物語”がスタートすること』

だから私はこう考えるのだ。

『物語は終わらないのではないのだろうか？？？』



まあ、主人公はその後何の変哲も無い日常を過ごすかもしれない。

しかしその日常も一つの物語ではないのだろうか???

ただ面白くないだけの物語であって、それは物語であることに変わりはない。

だから本当に“あとがき”などは存在しないのだ。

人生であろうが、小説であろうが、絶対に終わりは無いのだ。

死んでも物語は続く　それはこの小説でも同じ。

だからこれは終わりではない。何かの始まりなのだ。

始まってしまった物は終わらせることは出来ない。私はこう考え

る。

だから私は確信したように、全てを知っているように、何もかも解かりきっているようにこう考える。

また、どこかで会いましょう。



第零話 『プロローグ。』

こんにちは

ああこんにちは。

僕は喋る。そこには何の意味も存在しない。皆無、絶無。

今度は彼から喋りかけてきた。

どうしたんだ???

随分と辛気臭い顔をしているじゃないか?

???

ああ、まさか君が喋るとは思わなかった……

言い終わる前に突然の頭痛。痛い、頭が割れそうになる。

その場につずくまる。こんなに痛いのは初めてだ。

だんだんと痛みが治まる。

大丈夫か???

うん……もう慣れてる

慣れてる。全く持ってその通り、“この”シユチユレーションも。

人間は初めてのことに戸惑うと聞いたことがある。確かにその通りだ。

僕だって始めは怖かった。

しかし人間は慣れることが出来る。“それ”を習慣にすることが出来るのだ。

だから僕は“これ”を経験していく内に日常にすることが出来るのだ。

他人には決して非日常の日常を

きひひひひ、慣れているか。

そりゃ良かったナ、実は結構気にイッテいるとか???



僕は答えない。彼は続ける。

ソレどころか、もう“その体質”ナシじゃイキテ行けないんじゃ  
ナイか???

そんな……

それ以上の言葉は 出てこない。彼は話す。

勿論、コレはお前のツクリ出したセカイさ。

ダケドお前にトツタラこれは紛れもナイ現実サ

現実……

現実サ。

現実。 本当にそうだろうか???  
彼は続ける。

お前のゲンジツだ、ソレニ間違えはナイ。チガウか???

……違

違わない。と言おうとする、彼はそれを遮る。

ソウサ、チガワナイ。

もしお前がチガウというならソレを否定スルコトはお前の現実ヲ  
否定スルコトになる …… 〵〵

口を開いた。声が出ない、彼は言う。

キヒヒヒヒヒ、怖いンダロウ。

自分ヲ認めラレナイのが???

自分ヲ否定サレルのが、ダカラ自分ダケでも自分ヲ肯定シなケレ  
バナラナイ

そんな事は……

そんなことはない。本当にそうだろうか???

彼は答える。

イイサ。お前はイスレ気ガツク、その時マデだ

その時……?

???

彼は“その時”と表現した。彼は最後に言う。



キヒヒヒヒヒヒ。ジャアナ“俺”

サヨウナラ“僕”

僕は目の前の鏡を叩き割った。



こんな話は誰も聞きたくないかもしれない。

こんな話は誰も他人に話したくないと思う。

こんな話はきつと都市伝説か何かだと言われる。

こんな話は誰も得しない話だと僕は考える。

こんな話をしたならば明日から友達が居なくなると思う。

こんな話を聞いたなら明日から震えながら生活しなければならなくなる。

こんな話を作つた人間は“気狂”だと思う。

こんな話を使える僕はもっと“気狂”だと思つ。

こんな話しか使えない僕だからこの話を話すべきだと思つ。

僕の最初で最後のお話。どうか聞いて欲しい。

終わった後はなんてことは無い貴方の今まで通りの生活が始まる。

じゃあ始めよう。

.

眼が覚める。時計の針は6時50分を示している。

二度寝しようとしたのだが、嫌な夢を見るに決まっているから辞めることにした。

僕は二度寝すると決まっただけでも悪夢を見るのだ。それも途轍もなく異常で非情な夢。

食欲は無い。

しかし朝ごはんを食べないと頭が回らないという事を思い出して

朝食を取ることにした。

「いただきます」

誰も居ない部屋に僕の声がぼつりと響く。別に寂しくない。

一人は慣れている、いや独りは好きだと言う方が正解。

僕は朝食を食べ終わると食器を洗って学生服に着替える。

「行ってきます」

今日は金曜日だから気が楽だ。明日から二日間ゆっくりする事が出来る。

普通なら休日はどう過ごそうか。誰と遊ぼうか。ああ、明日は丸



一日部活だとか思うだろう。

しかし僕はそんな事は思わない。学校に行かなくていいから楽だ  
と思う、それだけだ。

「  
い  
っ  
て  
ら  
っ  
し  
ゃ  
い  
」

僕は誰も居ない部屋の扉を閉める。

等間隔に並べられた通学路である並木道の紅葉を眺める。

普通ならば後少ししたら色鮮やかな赤に染まる。

肌寒くなってきたことを感じてもう秋は近づいていると思うだろう。

それが常人なのであれば。

「君たちは本当に可哀想だ。同情はしないけど」

秋が来て常人が“鮮やか”と表現するなら僕はこれを“哀れ”と表現する。

そこに複雑な哲学や難題な定義は不必要。ただ“哀れ”なのだ。

植物はただ光合成して酸素を作り出す。気がつけば自分は枯れている。

そんな物に鮮やかさを少なくとも僕は感じない、輪廻の過程で僕は間違っても植物にはなりたくない。

そんな考えを持っているのは多分僕一人だと思う。

こんなに歪んだ思考の持ち主は 僕だけだと思う。

ふと頭痛を感じる。いつもどおりのこと、しかし今回はまだ耐えることが出来る頭痛。

視線を上げる。目の前にはトレンチコートの男、何か喋っている、いや何かを発している。

奇怪音、とても甲高い音。それが口の中から漏れている。



「トク」

「トク」

「トク」



不快音の最後に何か聞こえた。確かにソレは聞こえた。

途端に男の顔は急変した、まるで何かに恐れるような顔。そう。

何かに気づいてしまった時の顔。

「ちがう」

「何が違つんだよ??」  
「??」

「ちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが











































うちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが  
うちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが  
うちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが  
うちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが  
うちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちが  
うちがうちがうちがうちが

「お前はちがっ

「だから、何がちがうんだ??？」

「狂ってる。気が狂ってる。“気狂”だ」

知ってる。そんなこと僕が一番知っている。

既にこの状況こそがもう違うのだ。目の前に存在する男こそが違うのだ。

僕は語る。



「知ってるよ。僕は、僕は狂ってるよ」

男は消えた。煙のように消えた。どうやら“戻れた”らしい。

僕はため息をついて再び歩き始める、朝から嫌な気分だ。

これ以上何も考えない事にする。紅葉も気狂も。

しかし、そう言っくは行かないのである。いつも通りなら今日がい  
つもと同じなら。

目の前には仮面を被った人間が50人ほど広がっていた。

この交差点ではいつもの光景。ふと僕の隣を同じ制服の男子生徒が通り越す。

銀色の刃物で仮面の人間が男子生徒を刺す。



途端に飛び出す鮮血。

ものの数十秒前までは彼の体内を駆け巡っていたであろう液体血液。

あたり一面が血に染まる。

しかし僕はそれを見て見ぬフリをする、仮面の人間達はまだ見ている。

まだ……まだ……まだ見てる。

刺されたはずの男子生徒は何も無かったかのように、まるで“僕だけ違う光景を見ていた”かのように足を止めなかった。

「あー。あんな奴と話していたからもう時間が無いや、走ろう」

僕は走った。

学校のチャイムが鳴り響く。僕は何とか間に合ったみたいだ。

自分の教室にたどり着くと僕は誰と話すことも無く、誰にも挨拶をせず、誰と眼をあわすこともせずに自分の席まで向かう。

通学路で感じていた頭痛はとつくに無かった。

無いのだ。だから僕は困った。

戸惑う。怖くなった。人間は初めてのことに困惑する生き物だから。

「おはよう」

「アア……オハヨウ」

僕の声は彼女に届いたのかは解からない。自然と僕の声は小さく



なっていた。

僕の席に女の子が座っていた。長髪で綺麗な赤色の女の子。

そして彼女は僕にニッコリと笑ってきた。

僕は困った。

「アの……ソコは僕ノ席ナンだけド……」

「うん。知ってる」

困った、これは困った。

何に困ったか???　これが現実だという事だ。

いつもならここで頭痛がして僕は彼女に何も喋りかけずに彼女が座っている上から僕は椅子に座る。

“それが現実ではないから”

「ねえ、どうして...?」

「ナニガ...?」

れ  
る ー  
の ど  
? う  
? し  
? て  
ー そ  
ん  
な  
に  
常  
人  
で  
居  
ら

途端に思考回路が狂う。まるで脳がフリーズしたかのように。

体が歪む、ダイジョウブ大丈夫だから僕はダイジョウブなんだ。

落ちて着け墜ち付け おちつけ

オーライ……もう大丈夫だ。それより僕が常人だって???

「そう、貴方は常人よ??? どうしたのそんなマシンガンで乱発  
されている鳩みたいな顔をして???」

「……」

何かもう色々違う。

しかし彼女は淡々とまるでそれが当然のように  
当に常人であるかのように語る。      まるで僕が本

不思議だ。世界が止まって感じる、まるでこの教室に僕と彼女だけしか居ないみたいに。



「私は貴方みたいな人を異常体質と呼んでいる。

いい??? よく覚えていなさい。『正常なくして異常は語れない』のよ。

よく考えてみて貴方はこれまでの人生で一片足りとも正常だと思っただことはある????

例えばよ。貴方の右手にはガラスのコップを持っているとする  
右手の握力が零になった。

勿論コップは重力に逆らわずにそのまま落下。ガシャーン。

じゃあ貴方は何でコップが割れたのか考えるの???  
「???.」 さあなぜ

「それは……」

それはガラスと言うのは衝撃に弱い物質で床に激突した衝撃でガラスは耐え切れなくなったからだ。

そう言えばよかった。

しかし、少し思考するそれは果たして本当だろうか??? もしかしたらコップは元々

僕は言う。

「コップは元々割れた……」

「そう、コップは元々割れていたのよ。それが異常体質。」

貴方はそうやって物事を全て“異常”だととらえる。

“異常”とは割れていたコップを持つことは出来ない、しかし自分  
分は持っていた。

故に自分は“異常”だと。

自分が“異常”であるから物事は全て“異常”なのだと思っ  
ている。

「ここで思い出して、私の最初に言った言葉。

「そう貴方は正常を知らないの、生きてきたうえで正常だと思ったことは無い」

あれ??? と僕は気がつく。

これが僕の作り出した現実じゃないのならと気がついた。

確かに僕は友達といえる友達は一人すら居ない。

だけど、クラスの人間の顔なら全員覚えていてし名前も一致する。

再び彼女を見る。

「故に貴方は常人よ。」

はい、証明終わり」

な  
?  
?  
? は  
て  
?  
?  
?  
こ  
ん  
な  
奴  
い  
た  
か





第巻・伍話 『ヤマアラシのジーンズ』

彼女は僕のことを異常体質と称した。

それより彼女は『貴方みたいな人』と言った。複数形。

つまり僕みたいな人間は他にも居るといふ事になる、これには驚いた。

「もし貴方がちょっとでも私に興味があるなら放課後に屋上に来るといい」

そう言っ て彼女は僕の席を立って、教室の隅の方にある彼女自身の椅子に座った。

それとほぼ同時に担任の先生が入ってきて朝のホームルームが始

まる。

さて……これから暇な時間が始まる。暇つぶしにでも僕の話でも作ろうかな。

僕には見えない物、見えてはいけない物が見えた。

それはまるで夢の中と現実がリンクしているような錯覚。

錯覚……いや違うな。僕の場合はハッキリと見えているし触ることが出来るのだ。

初めて僕が異常体質に気がついたのは幼稚園の時のことだ。

世界は夕焼けに包まれて遠くの地平線から闇が支配しようとしていた。

僕が遊びつかれて家に帰ってきた時、突然と頭痛が襲った。

痛かった、初めての頭痛だった。

途端に僕の脳裏にはある違和感を覚えた。脳裏に何か浮かぶ、そして聞こえる。

「わねねけねけねく」

「おねねけねけね」

「みみわんえんみち」

「みみわんえんみち」

「.....」



突然と僕の頭は「ミ」にのつとられた。地面に頭を擦り付けるほど頭は痛かった。

『死ぬ』。そう思った。

その場に倒れこむ、すると闇に支配されている世界に明かりが灯っているのに気がついた。

火事だ。家が燃えていた。

そのベランダからこちらをジッと見ている女。彼女の口が……開いた。



.

あの日から僕の非日常は始まった。

他人には見えていない物が僕には見えていた。

そんな日常だったからか僕は少しずつ壊れていったのかもしれない。

取り返しのつかない……致命的なまでに。

だから僕は諦めたのだ。僕にとっての現実は“僕の見える物”なのだ。

「ちよて……行くか……」

学校は既に終わって1時間が経とうとしていた。

いつもの僕ならとうに学校に帰っているのだが、僕はありえない8時間目の授業を一人で受けていた。

教室に居るのは僕一人、教壇にはニット帽を被った男が立っている。

「よつするにこの世界の流れの中では人は無力だという事だ」

彼はそう言って教室から出て行った。

それと同時に頭痛は治まって僕はやっと帰ろうと思った。

……彼女は居るのだろうか……???  
別に彼女に興味があるわけではない。

だけど僕に常人だと言った。じゃあ彼女は常人なのだろうか???

僕は階段を上った。



時刻は五時を回ったところで夕日が辺りを明るく照らし出す。

そしてやや黒く染めて。影が長く尾を引く。

まばゆいばかりの沈み行く太陽をバックにいた。

誰かが。いた。

「ほらね。やっぱり来た」

「あ」

彼女は屋上のフェンスにもたれかかって僕の方を眺めている。

その姿はやけに美しく、奇妙だった。

口では言えない。文では表すことが出来ない。

世界中の言語を理解した上でもそれは解からない。それは塵気楼と似ていた。

丁度彼女の後ろに燃え盛る太陽が地平線に沈もうとしている。

違和感、僕は何とも言えない違和感を感じたのだ。

違う。何かが違う、彼女は“何かが”違うのだ。

決定的に……あるいは致命的に……。

彼女はスキップをして僕に近づく。そして僕の手に触ろうとした。

「おそーい。でも来てくれたんだね」

「やめろ」

僕の口から冷たい言葉が飛び、彼女の手を払いのける。

しかしそれさえも奇妙だった。僕が他人のことで……感情を出すなんて。

自然と言葉が出る。

「やめる。“人間らしく”するな」

「ひびく」。

私だつて頑張つて“人間”してるんだから、そんな言い方したら  
駄目だよ 『気狂』さん」

「!?!?!」

とっさに僕は跳躍して彼女の体を勢いに任せてフェンスに叩き付  
けた。

しかし彼女は何のリアクションもしない、まるで人形。そして我に返った。

僕は今……何をした??? なぜ僕はこんな事を……。

僕は突然と僕自身が恐ろしくなって彼女の体を離して2、3歩下がる。

「ふうん、まだ感情なんて物があったんだ。」

「ねえ思うでしょ??? 感情なんてとても無駄な代物だって」

「……………何が言いたい……………???」

「つまりね。君みたいな“物”には感情なんて不必要だって言うてるの。」

「一度でも感情が無かった方がいいと思わなかったことは無かったでしょ???」

全く……………



？ 感  
情  
は  
人  
間  
が  
持  
つ  
物  
な  
ん  
だ  
よ  
？  
？

彼女の口から飛び出した言葉。僕の思考が止まる。

ニンゲン??? ボク八人間ダ。君モ僕ヲヒテイするの力????  
ヤメロ!!! ヤメテクレ!!!

僕はその場に倒れこむ、電池が切れたロボットの如く。

「ねえ……”じつち”に”ない”??? きつと君は”そつち”に屈  
るべきじゃない。」

“こっち”に来るべき存在。逆に異常体質は“そっち”に居ては  
いけない」

「何の……話をしている??? ……ッ!?!」

突然の頭痛だった。いつもより強烈な、頭を内側から金槌で叩か  
れている感じ。

割れる。ワレル。コワレル。こわれる

視線を上げる、彼女の後ろに……何か居た。

「貴方は何を見て来た??? 今マデ何を見てしまッタ???

これがヲ何を見ルノ???  
コレカラどんな世界を見テシマウ?  
???

何ヲ思イ。何ヲ失ウ。

%  
&  
”  
#  
?  
?  
@  
@  
@  
!  
!  
!  
!

そこで僕の意識は途絶えた。

目が覚める。そこには漆黒が広がっていた、闇が……近づいていたのだ。

少し頭がズキズキする、僕は空を見るような形で屋上に寝転んでいた。

しかし、冷たいコンクリートを感じるべきなのだが、なぜか頭の部分は枕のようなやわらかい物を感じる。

温度を感じる。

人肌を感じるのだ。僕は辺りを見渡した。

「おはよう」

「おはよう。何時間くらい死んでた??」



彼女だった。膝枕だった。僕は焦った。

僕は無理矢理に体を起こして彼女の膝から離れる。

何だか名残惜しくも感じたがこの状況はかなり恥ずかしかった。

確か僕は彼女とこの場で話していたんだけど……。

……あれ??? 何で寝ているんだろ??? 寝るような状

況だっただろうか???

少し頭を整理しよう。……おーけい。

頭の奥の方に隠れていた記憶が僕の体を駆け巡る。

それはまるで僕の血管に電気が走るように、全身に感じる。

彼女に恐怖する。

「ええっと……あの……君」

「私はいろんな呼ばれ方をされている。」

『りっちゃん』 『りるっち』 『死神』 『クラッカー破壊』 『“赤髪”の女』 『  
…… e t c

私は『りるら』。ひらがなで“り”と“る”と“ら”

貴方が別にどんな呼び方をしようと関係ないけど。

「これからは知らない仲じゃないんだから“君”とか“お前”って  
言う表現はやめてよね」

りるら

それが彼女の名前だった。だったら僕は??? いや、必要ない。

名前なんてただの製造番号、僕は名前にそれ以上の感情を持ったことは無い。

必要であって必要でない。それが名前。

だから取り合えず僕は。

「じゃあ“りるら”。君の話はよく解かった。

でも具体性に欠ける、そう思わないか??？」

「思ってる。でも貴方みたいな曖昧な存在には具体的に話す必要は無いわ。」

何だか残念。貴方って実は勉強がなかったり??？」

りるらはそっぽを向いてムッとしたように話した。

彼女の言ったとおり、僕には勉強は無い。というより興味が無い。

例えばそれは数学。

答えが一つしか出ないという世界、僕はそれに胡散臭さを感じるのだ。

今まで一番酷いと思ったのが確率の問題だった。

赤色の玉が袋に6個 白色の玉が袋に4個。

さあ赤色の玉が出る確率は??? と言う問題だったと思う。

答えは10分の6。つまり5分の3。

だけど、もしかしたら全く赤色は出ないかもしれない。つまりただの確率なのだ。

何の現実味も無い、何の意味も無い、そこに何の価値も存在しない。僕はそう思った。

「どうしたの??? なんだか難しい顔をしてるよ???」

「ああ、ごめん。少し考え事をしていた」

「そう、考え事はいいことよ。」

それよりも貴方に一つだけ聞きたいことがあるの。ずっと聞きたかったこと。



なぜ貴方は孤独なの？？？  
「

痛いところをつかれた……。

彼女はニヤニヤしながら僕の顔を眺める。まるで僕が困っている

のを楽しんでいるような。

僕は少しため息をついて答える。

「ヤンマリシのジノハカ」

「ちまあらしのじねんまっ？？」

「ヤマアラシのジレンマだよ。」

ヤマアラシって言う動物には馴染みが無いかも知れないけどハリネズミって言ったら解かるかな???

彼らは互いを温め合う為に体を寄せ合うのだ。

ただお互いの針が当たって温め合うことは出来ない。

運よく出来たとしてもお互いに傷つけあってしまう。

だから友達として良い距離を置くことを言っただ。

それがヤマアラシのジレンマ  
「ママ

」  
うんうん。 何だか良い話ね。

だけどそれが孤独と何の関係があるの???.?  
「

「じゃあこれが僕と周囲の人間とならどうだろうか。

彼らは“人間”なんだよ。でも僕は“ヤマアラシ”

言いたい事わかる???」

「ああ、なるほど一方的に傷つけてしまつたら関わらない方がマシだつて考えてるって事か。」

君は説明が上手いね」

つまり、僕がいくら凍えていても所詮僕はヤマアラシなのだ。

ヤマアラシは人間と引っ付いて温まろうとしたなら人間は血だらけになってしまう。

つまりヤマアラシ同士で無い為に人間は一方的に傷ついでしまう。

逆に人間は全身が針だらけのヤマアラシに近づくことさえ恐れるだろう。

そういう事だ。その程度のことなのだ。

「うん、悪くない。悪くないよ、その考え。」

異常体質の人間らしい回答だよ。私は逆だけどね。

もし私がヤマアラシなら相手が人間であろうと無かろうと体当たりするわ。

お互い血だらけになって相手が拒絶しても、逃げたとしても逃がさない」

「へえ、そういう考えもあるのか。悪くないね」

僕がそう言うと、りるらは無垢の笑顔を僕に向けた。

そこには単純に面白い事に出会えたという一人の少女が居たのだ。



その姿に最初に抱いた違和感なるものは無かった。

「私はね、この学校で異常体質に人間を集めてるの。」

『気狂ブログレッシ部』って言うんだけどね。

貴方みたいな思想を持った気狂は今まで見たことが無かった。面白いわ。

良かったら入部しない???

「へえ、それはそれは興味のある話だね。」

でも遠慮するよ。さっきも言ったけど僕はヤマアラシなんだ。

しかも相手がヤマアラシであろうと人間であろうと。

君みたいに体当たりできない臆病なヤマアラシなんだ」

彼女はただ一言。「そう、残念」と言っ  
て屋上から出て行った。

これが僕とりら。その他大勢のヤマアラシが起こす物語の始まりだった。

本当ならここで“僕はこれから起こる出来事を知るよしも無かった”

と、表現するのがセオリーなのだろうが僕は違った。

僕はりるらとあった時点で気づいていた。そして今、確信した。

“何かが終わった”と。始まるのではなく終結したのだと……。

歪んだのだ、僕は歪んだ。彼女と会ったその時から決定的に歪んだ。

「と言っても……もう手遅れか」

フェンスの奥にはネオン街が並んでいた。

その奥から徐々に……ゆっくりと……闇が支配していく。

第貳話 『呪いスカイブルー』

僕は夢を見た。

果てしなく続く草原にグニャグニャと曲がっている道が二つの山まで続いている。

その道の上に僕が立っているのだ、歩くわけでもなく。景色を見るわけでもない。

ただ立っているのだ。

そんな状況が暫く続くと真後ろから声がする。

「イキ。。。エウイエ」

機械音。壊れかけのラジオから漏れる不安定な音を想像した。

僕は振り返るか振り返るまいか迷っている。こつこつという時が困るのだ。

まさにジレンマそのもの。



いつだって振り返ると何だか嫌な物がある。

しかし振り返らないと余計に気になる、ジレンマだ。

僕はしばし考えて振り返ることにした。

そこには、りるらが立っていた

『おきる』

「……………」

頭が起動し始めて数秒後、余りにも酷い夢だったのでリアクシヨンをしてしまった。

体は動きたくないという電気信号が流れているのだろう。僕はそれを無視して体を起こした。

かすかに頭痛が残る。まあいつもの事だが。

「いただきます」

「お上がりなさい」  
天だ

「昨日はよく眠れた??？」

「今日は晴

「おはよう」

「朝食は食べないと頭が回らないわよ」

「早く食べないと遅刻するぞ」  
食べなさい

「よく噛んで

「顔色が悪いわ」

「昨日は何時に寝たの？」

「??」

「」馳走様「

僕は身支度を済ませて靴を履いて家を出る。

ふと空を見上げると澄み渡るまでの晴天だった。綺麗なスカイブル。

何だか怖かった。ここまで綺麗だと逆に身構えてしまう。

「行ってきます」

『……………』

•

•

.



僕は学校に着くと真っ直ぐ自分の席に行く。

誰とも話さず、誰とも接しない、僕はヤマアラシ。

しかし僕の席に……いた

じりり

「おはよう、どうしたの??? そんなに死体を見たような顔をし

て  
」

「いや……先日も言ったと思うけど、そこは僕の席なんだ。自分の席に座りなよ」

「ねえ、呪まじないって知ってる???」

話を通じない。言葉のキャッチボール!!! 全部エラー!!!  
そんな感じ。

しかし問題はそこではない、りるらが言った言葉マジナイと言っ  
たか???

このシュチュエーションは不味い。きっと今日一日厄介ことに巻  
き込まれるに違いない。

逃げるか???

“お互い血だらけになって相手が拒絶しても、逃げたとし  
ても逃がさない”

「呪術だとか占いだとかそういう類の物だろ???

予断だけど僕は信じないね。

人を呪い殺すなんて出来やしないし、まして人の運命なんて知ることなんて出来やしない」

「そう、気が合っわね。」

興味ないわ。占いなんて馬鹿馬鹿しい、私が興味があるのはね

人が壊れる瞬間

僕は背筋が凍った。顔にさえ出てはいなかったと思うが確かに僕は恐怖した。

彼女にとってはこれが何気ない会話なのだろう。だけどこれは異常だった。

彼女の娯楽。人が壊れる瞬間、狂ってる  
気狂だ。

「どつ???? 貴方も興味あるでしょ???

自分が何時どつやって壊れたのか???  
興味あるでしょ???

まあ貴方は常人だからまだ解かないかもしれないけど」

「君は一体何を・・・」

キンコーンカーンコーン。

予鈴が鳴った、それを聞いたりするらは自分の席に戻るのだから立ち上がった。

そして立ちすくんでいる僕の耳元で口を開いた。



「もし貴方が少しでも見たいと思うなら昼休みに北館の音楽室の隣の空き教室まで来て」

僕は一時間目の用意をする。。。

.

昼休み、隣では吹奏楽部が合唱の練習をして、美しい音色が聞こえる。

僕は彼女に言われた通りに北館の音楽室の隣の空き教室に居た。

そこには20人は居るであろう人ばかりが出来ていた。

勿論僕はここに来た事が無いので一体何がやっているのかは解か

らない。

「やっぱり来たんだ」

「りるら、これは一体なんなん……だ????」

「おみよ、さっ君」

僕の背後から声を掛けてきたのは、りるらともう一人銀髪で長身の男子生徒が居た。

僕には友達が居ないのでりるらの友達である事はわかるのだが、しかし銀髪とは不良のイメージしかない。

りるらが口を開いた。

「彼は『ヒキサキ＝コルヴオ』。仲良くしてね」

「ひきさき、きょーごう」

またとんでもない奴と関わってしまったらしい。

彼がポケットから出した手には彼は校内だというのに黒の革の手袋していた。

その手を取って僕は彼と握手をした。どうやら敵ではないらしい。

それよりも……。



「一体この人ばかりは何なんだ??？」

「ん??？」  
「言わなかったっけ??？」  
“マジナイ”だよ

そう言えば彼女は今朝僕にマジナイがどつとか言っていた気がする。

突然と後ろのドアが勢いよく開いてそこから一人の女子生徒がハンカチを顔に当てながら走り去っていった。

彼女は……泣いていた。それに引き続いて教室の中から男の声で  
“次の方”と聞こえる。

「さあ入って」

一連の流れを見て呆気にとられていた僕を後ろからりるらが背中  
を押した。

教室の中に入るとそこは部屋の中心に椅子が二つずつあるだけで  
その他の机や椅子は二つの椅子を囲むように教室の端に散乱してい  
た。

一つの椅子には先ほどの声の主であろう青色の髪の男が座って、  
こちらをジッと睨んでいる。

まるで獲物を見るかのように。

「さあそこに腰掛けたまえ」

そしてもう一つの椅子にはなぜか僕が座って、その後ろにコルヴオとりるらが立っている状況。

一体僕は何をされるのだろうか???

そう言えば僕らは順番抜かしをしたなーとくだらない事を考えていた。

すると青髪が僕に語りかける。

「君は俺様に何を占って欲しいんだ??？」

「……はい??？」

「何だよそのリアクション。もしかして冷やかしてここにきたのか??？」

俺様みたいな偉大な人間には無駄な時間と言うのは勿体無いのさ。

772

解かったら出て行ってくれ。時間の無駄だ」

「彼はこれからの人生についてアドバイスを欲しいそうよ」

僕の真後ろから、りるらが答える。

なるほどあの行列もこの青髪の男も何なのかが解かった。

でも何で僕が……

「……まあいいや。お前の後の人生ね。」

“イメージする……想像の世界……お前の人生をイメージする。”

あーあー見えてきた見えてきた。だけどまだコントラストが強いな。

もっともっとイメージする。

イメージネーション、イメージはイメージネーション。イメージを膨らませる。

そうかそうか。なるほどなるほど。そういうイメージが。

ふうん………」

彼は興味なさそうにため息をついて僕の顔を見る。

ああ、なるほど………今は呪文みたいな物だったのか。

てっきりこの男がいきなり狂ったのかと思った。

そして彼は答える。



「うん。お前は何時だって基礎が不安定だ。」

足元を気をつける、状況をよく読むんだ。お前はぐらぐらの積み木の上に立っているも同然。

気をつける。得に“階段”にはな

「良かったわね。さあ行きましょ」

りるらは結果を聞くとコルヴオと一緒に後ろの扉から出て行った。

それに引き続いて僕も青髪に一言言っ出て行く。

そして教室の扉に手を掛けたとき、ふと気がついた。

目の前の壁に小さな窪みに小さな文字のような物が彫られている。

“  
気  
狂  
プ  
ロ  
グ  
レ  
ッ  
シ  
部  
”



第貳・伍話 『呪いスカイブルー』

時間は放課後。世界が血のような赤に彩られる。

僕は部活には所属していないので問題さえなければすぐに家に帰る。

家に帰ってもする事は無いのだがこのまま学校に居れば、りるらとかコルヴオに会ってしまいそうで嫌なのだ。

僕は鞆を持って廊下に出る。それは丁度、その時に感じた。

「……」

背後から、強烈な視線を感じる。まるで背中が焼けるように熱く感じる。

視線……いや……これはもっと強い感情。深く濃い 殺意だ。

頭痛は無い、とすると実際に感じている物になる。僕は自然と足が速くなった。

そして廊下を曲がって階段を降りようかとした　瞬間だった。

「……」

僕はバランスを崩して前のめりになった。まるで足を滑らせたかのように 落下。

世界がスローモーションで再生される、その間に思考や雑念は全て失せる 消失。

段々地面が近づいてくる、咄嗟に眼を閉じる 反射。



.

「  
ん  
……  
」

•

僕が眼を開くと冷たい階段の踊り場に寝転がっていた。

頭が痛い。

また異常体質かと思ったが内面が痛いのではなく外面が痛いので単純に外から衝撃を受けたのだろう。

何でこういう状況なんだろうと思ったのだがそれより先に僕は起き上がることにした。

目の前に確かな不安を感じて僕はその風景の先を睨む。

「おはよう。やっ君」

「もしかして君が???.?」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。」

私は“あれ”みたいな行動や思考はしていないわ  
も  
勿論、殺人

そう言うと彼女は僕の頭についている埃を取ってくれた。

僕には、りるらが一体誰のことを言っていて何の事を話しているのかがよく解からない。

しかし彼女のいい回しや自分の現状を考えてみて……謎が解けた。

僕の背中には確かに残っていた。あの感覚……。

あの刹那、僕は誰かに背中を押された。

「だから気をつけろって言われたんでしょ。特に階段には」

「!?!?!」

そう言えばあの青髪に言われた。僕はアドバイスを受けた。

基礎が不安定だと 階段には気をつけろと。

まさか本当に言い当てたのか???

いや、もしかしたら彼自身が僕を突き落として占いどおりにしたのか???

しかし何の為に……。一体どういつ理屈で……。

「別に“彼”は頼まれて突き落としたわけじゃない。単純に貴方が気に入らなかつたから。」

勿論、占いどおりになることは重々承知だっただろうけどね。でも押しとどめられなかった。

” 彼はそういう人間だから…… “ 人を引き裂く事しか出来ない気狂  
だから。

まだ引き裂かれなかっただけでもマシだと思いなs」

僕は彼女が言い終わる前に僕は走った。



自然と胸騒ぎがする。なんだろうこの感じ……。

動物は大きな地震が来る前になんらかのリアクションを起こすと  
言う。

もしかしてそれと同じなのかもしれない。

僕はまるで何かから逃げているかのように走る。そして……立ち  
止まる。

この曲はショパンだ。だけど僕は音楽は好きじゃないのでただの雑音にしか聞こえない。

昼休みはあんなに長蛇の列を作っていたのに今は誰一人としていない。

長い廊下に僕がただ一人ぼつんと立っているのだ。

僕は扉を開いた。

「……あれ??? お前は確か」

「……君は……一体何なんだ……??？」

「俺か??？ 俺は占い師だ」

太陽に照らされた教室には不釣り合いの青色が眼に入る。

彼は昼休みと同じように椅子に座ってジツとしていた。

僕はもう一つの椅子に座ろうとしたが躊躇した。

僕が思うに彼は僕と同じ。異常体質者。

「ここに来たって事は占いをして欲しいのか??? それとも俺が何なのか知りたいのか???」

「……未来が見えるって、どんな気分だ」

「別に、俺自身のイメージは見えないから残念だけど役立たずって感じ」

他人のことは解かる。でも自分のことは解からない。

それはまるで僕と同じだった。他人を気にして自分を気にとめない。

「ただ、それは怖くはないのだろうか??？」

「未来を見て生活する占い師にとって自分のことが解からないというのは……。」

「まあ困ったことはあったさ。」

「誰かは知らないけどカッターナイフで刺された事や金属バットで殴られたこともある。」

階段から突き落とされたこともあった。

あの時は思ったね。自分の未来を見ることが出来たら全部回避で  
きただろうにって」

「酷く恨まれているね。それはどうして??」

「それは復讐だろ。お前みたいな占い結果が出る物も居れば、親が  
死ぬ。」

家が焼けるとかそんなイメージが出る奴も居る。

そいつらは俺がやったと思うだろうね。

100%の占いは無いって事、もしあるならそれは誰かの仕業だ  
としか思えないだろう??？」

なるほどなるほど。そりゃそうだ。

じゃあなぜ彼はイメージすることを辞めなかったのか。僕は考え  
る。

突然と扉が荒々しく開いた。



僕はその方向を見たが占い師は見ることさえしなかった。

「そっか りるら<sup>ら</sup>が言ったのは君の事だったのか……」

ヒキサキ コルヴォ

コルヴオが居た。そこにはコルヴオが立っていた

立ちながら彼は僕の真後ろに居る人間を睨み付けた。途端に僕は体が硬直した。

彼が蛇なら僕は蛙。蛇に睨まれた蛙。

コルヴオの表情は昼休みのような穏やかな物ではなかった。

まあ睨んでいるのだから当たり前なのだが、彼の睨みは違った。

そこには別の感情が混ざっている。それは僕が先ほど感じた『殺気』と全く同じだった。

それも強烈な殺気。本当に体が内側から爆発してしまうかもしれないほどの視線。

例えるならそれは重力や圧力の類だろう。押しつぶされるッ!!!

「よお“デレスイオン”」

「なっ……なんだお前!!!!」

声が震えていた。デレスイオンと言われた青髪は恐怖していた。

直接に殺気の対称でない僕でさえここまで追い詰められているのに殺気の対象のデレスイオンはどうなのだろう。

ポケットから手を出すと黒色の革の手袋。 僕を突き落とした手。

僕は落ちる直前、背中に触れていた黒色の革製の手袋を確認していたのを思い出した。

コルヴォがデレスイオンに歩み寄り……消えた。

キエタ???? 消えた。消失した。

「ウガッ……ウゲエガ」

「……」

違う。消えたんじゃない、『加速』したんだ。

コルヴォは10mはあろう距離を一気に詰めたのだ。それはもう

凄いスピードで……。

それだけじゃなかった。

コルヴォとデレスイオンの距離が零になった途端にコルヴォの手はデレスイオンの口の奥に突っ込まれたのだ。

だからコルヴォの手は今デレスイオンの口の中に突っ込まれた状態。

デレスイオンの口の隙間からかすかに小さな悲鳴が聞こえる。

「お前に選択肢を与える。生きたいなら右手を上げる、逝きたいなら左手を上げる」

「ウウウウ……ッ。ウ」

デレシオンはゆっくりと右手を上げようとした。

そんなデレシオンを見てコルヴォが口を開く。



「いいのか??? お前は今まで“大量の人間を殺してきた”んだ  
ぜ。」

「自分だけ助かるなんて都合のいい話だな」

「エッ???」

僕は小さな声を出した。

何のことだ??? コルヴォは一体何について喋っているのだろ  
う。

ヒキサキ「コルヴォ……彼は一体……何なんだろう……」。

「ん??? どうした、まさか今の今まで気がついてなかったわけ???

自分の異常体質について。

いいことを教えてやるよ。お前の異常体質はな、未来が見えるなんて綺麗な物じゃない。

お前はな

て 自  
し 分  
ま の  
う イ  
体 メ  
質 ！  
な ジ  
ん し  
だ た  
よ 物  
「 を  
現  
実  
に  
し

「エイオ……ウグ」

彼の手が止まった。右手を上げようとしていた彼の意思が……止まった。

コルヴォの言うことが本当なら火事になった家は“デレスイオンが火事をイメージしたが為に”火事になってしまったことになる。

親が死んだ。“デレスイオンが親が死んだことをイメージしたが為に”親が死んでしまったことになる。

なら彼は占いなどではなくなり、それはもはや呪いだ。マジナイだ。

彼はいろんな人間の未来を潰したのだ。

火事にならなかった家も火事にして、親が元気だったのに殺した。

僕だつてあのまま家に帰っているのに彼のせいで階段から突き落とされたことになる。

彼がイメージしたことによって。

「お前は残酷な人間だな。本当に恐ろしい人間てのはそこに意識があるか無いかだ。」

俺みたいに意識があつて人を殺している人間より意識が無く、誰かを殺しているのさえ気がついていない人間の方がずっと恐ろしい。

ああ断言できる。さあ選べ、どちらだ???

生きるか死

ぬか???

「……ナエ……デ」

彼の瞳から涙がこぼれる。

自分のしてしまった事を悔いるように、  
報いるように。

まるで今からそれを

そして彼の手が拳がった。



左手  
だった

ニ  
子  
ニ  
子  
ニ  
子  
ニ  
子  
ニ  
子  
ニ  
子

とても耳障りな音が僕の耳を支配する。

無理矢理に力づくに何かを突っ込んでいる音。

コルヴォの右腕が奥へ……奥へと進む。

デレスイオンの口元から、だらしなく涎が垂れている。

どんどんどんと進む。

コルヴォは 笑っていた、ただただ愉快だと、まるでゲームに没頭する子供のように。

手首は完全に見えなくなり、次には腕の関節が見えなくなっていた。

既に器官に入っているのだろうか??？ 僕は恐怖で全身が震えていた。

この破壊行為よりも……コルヴオを見て。

「キヒヒヒヒ 案外入るものだな。喜べ、お前の望みどおりにキヒッ 死ねるんだからな」

「~~~~」

「んん……これ以上先に進めないぞ。キヒヒヒ」

コルヴォの腕は一瞬、止まり後退した。まさか……

止めろ、そんな事したらッ!!!  
止めろ!!!

コルヴオの腕は一気に進んだ。

尽き手のように進みながら一気に進むより、一度退いてから一気に進む方が威力は格段と上昇する。

デレスイオンの口から大量の血が噴出される。その血はコルヴオの体に赤く染める。

「ガフッ……ブ……」

ブチャー……！！



デレスイオンの体内にある行き止まり。コルヴォはそれを破壊して進んだのだ。

そして新たな器官を破壊し、また次の器官へ……破壊、破壊、破壊。

実際の時間はどの程度だったかは解からない、だけど僕には永遠にも感じられた。

デレスイオンの眼からは涙が分泌されて居る事から、まだ生きていることが解かる。まだ痛みがあることが解かる。

「キヒヒヒヒヒ……。そろそろ キヒ 飽きた キヒヒ な」

すでにコルヴオの肩付近まで腕が入り込んでいる。その姿はとも残酷だった。

そしてあたり一面が彼の血で染められて地面には血の海が広がる。

突然とコルヴオの行動が止まった。

「……コレガ“命”カ」

「コルヴォは何かに触ったのだろうか。いや、握り締めているのだらうか。」

ドクンドクンという音が僕にも聞こえる、あれは 心臓だ。

心臓を守り抜いていた肋骨もさつきバキボキと言う音を立てて破壊された。

コルヴォはニヤリと笑った。

「死ね」

7

7

グチャ。

デレスイオンは力なくその場に倒れた、コルヴォは自分の腕を引き抜いてバキボキと骨を鳴らした。

全てを破壊したあの腕。真っ赤に染まっていた、血に染まってい

た。

コルヴォは振り返って僕を見た。その表情は昼休みの時と同じで穏やかだった、全くの別人。

「俺はな。お前も今すぐ殺したい、壊したい。……俺の異常体質は知ってんだろ??？」

「ウン」

教室の扉が開いた。

「お疲れ様。コルヴォ」





この教室に今居るのは僕とコルヴォ、そして無残にもコルヴォに  
殺された一体の死体。

広がる血の海。

滑稽だった。その様は哀愁さえ漂っていた。

今度はゆっくりと扉が開き、赤色の髪の少女が居た。りるら

「お疲れ様。コルヴォ」

「これでよかったのか??」

もしかしてこれはコルヴオの独断ではなく、りるらも関わっていたのか。

こんな少女がこんな残酷なことを……。

僕の胸の奥から液体が込み上げてくる。気分が悪い、死んでしま  
いそうだ。

りるらは僕の背後から近づいて僕の背中を撫でる。

「怖がらないで、確かにこれについては私がコルヴオに頼んだ事よ。  
でも私は貴方の敵じゃない」

「触るな!!!」

僕は彼女の手を払いのけて教室の隅まで逃げる。一部始終をコル  
ヴォは黙ってみている。

彼女は立ち上がって僕に近づくのではなく、僕を見つめる。睨む  
のではなく、見つめる。

その姿が怖かった。僕は怒鳴る。

「何でこんなことを！！！」

デレスイオンはその殺人鬼みたく人を殺したくて人を殺してたんじゃないだろ……！」

「落ち着いて。深呼吸をしてみなよ。凄く落ち着くよ」

「落ち着くだと……！ ああ、落ち着いているよ……！ 僕は落ち着いているさ……！」

「落ち着いてないじゃない。言っている事がよく解からなくなっているもん。大体何よ」

たの？ デ  
？ レ  
？ ス  
？ イ  
「 オ  
ン  
っ  
て  
人  
を  
殺  
し  
て

僕は黙り込んでしまつ。え??? 今なんて言った????

りるらがコルヴオと関わっていたのなら、デレスイオンが自分の異常体質を勘違いしていた事も知っているはずだ。

僕の中で疑問が残つた。

本当にデレスイオンの異常体質はイメージを現実にする事なのだろうか。

まさか。まさかまさかまさか。

僕はコルヴオを見る。ニヤニヤと笑っている。



「ああ、あれは嘘だ。あいつの異常体質は“未来を見る”であつて  
るよ。」

イメージした物を現実にするって言うのは俺が適当に言ったのさ

「何だ……と……」

もしかして……もしかしてもしかしてもしかして、単純にあれば  
デレスイオンを追い詰める為に

デレスイオン自らが死にたいと思わせるために言ったのか……？  
？？

恨めないじゃないか。彼は自分を殺した相手を恨めないじゃないか。

今まで散々恨まれ続けて、自分は最後には恨めない。こいつらは  
本当に。

「狂ってる……お前も狂ってる」

「うん。知ってる」

いつの間にかショパンの音色は聞こえなくなっていた。

もう学校には他の生徒は居ないのかもしれない

僕は学校に取り残されたのかようだ。

そして彼は永遠にここに取り残されてしまうのだろう。

深呼吸をする。オーケー、大丈夫だ、落ち着いてきた。

「落ち着いた???」

「ああ、落ち着いたよ。大丈夫だ」

僕はいろいろな質問をする事にする。

「何でデレスイオンを殺したんだ??？」

「ここね。私達の部室なの」

私達の部室……ああそう言えば以前にりるらは僕をその部活に勧誘したっけ。

『気狂プログレッシ部』。当たり前だが決して表向きならない非公  
開の部活。

そう言えば昼休みにここを去るとき、壁にそれらしき文字が彫ら

れていたっけ。

「でも一週間ほど前からここにテレシオンが来て、占いを始めたの。」

おかげで暫くクラブは休部にしたわ。だけどまだ殺すまでの条件じゃない。

私は1週間の猶予を与えることにしたの。

本来なら猶予なんて無く殺しているけど彼は異常体質者だったから観察したかったの。

観察してたけど彼は他の異常体質者とは違って奇妙だった。

考え方が違ったのよ。当たり前のことだけど、それが普通じゃなかった。

“自分の力で他人を助けよう”としていたのよ、異常体質者の癖に。

だからすぐに飽きた、彼は異常体質者じゃない。ちゃんと人間の心を持つてるもの」



「だから殺した???」

「いや違う。勧誘しようと思わなかったって事。」

「殺した理由は単純、部室を返して欲しかったから」

そうだ。彼は人間の心を持っていた、それが僕は引っかかって  
いた。

僕なら恨まれたらすぐに占いをやめてしまっただろうけど彼は違っ  
た。

その辺りが異常体質者らしくないと言っているのだろう。

確かにそれはそうだ。自分やコルヴォと比べてみてもよく解かる。  
生き物の半分は自分の土地を汚されると敵として対処すると聞く。  
それは当たり前なのかもしれない。

僕達のような異常体質者は人間じゃない。だから敵として対処し  
た。

彼女はそう付け足した。

……あれから1時間が経過した。

「しかしまあ……」

僕はいまだにこの教室から出れずに居た。

あの二人は随分と前に出て行ったのだが僕はそれについていかなかった。

どうやら明日から部活は再開されるらしく、興味があるなら仮入部でもいいから着て欲しいと語るらは僕に言った。

興味は無いでも無かった、僕と同類には非常に興味がある。

「君ならどうしたんだろうね」

壁にもたれかかるようにして静かにしているデレシオン。

血の海は乾いて赤黒く変色を始めている。

瞳孔は開いたままで僕は眼を閉じればあの破壊行為が再生されるのだ。

ヒキサキッコルヴォ。

彼も異常体質者、人を殺さずには居られない。誰かを引き裂かずには居られない。

僕の体質よりもっと重症　突然と頭痛が襲う。

『俺ならきつとあいつ等には関わらなかつただらうね』

『そもそもお前は彼女と始めてあつたときに縁を切る事が出来たはずだよ……』

「まあそれはそうだけど」

『俺ならその段階でまず彼女との関わりは作らない。』

彼女が自分の席に座っていたんなら俺は迷わず家に帰っただろう  
『な』

「出た不良行為」

そりゃ言いすぎだけどなと血まみれのデレスイオンは笑いながら言う。

彼の綺麗なスカイブルーの髪は赤色に染まって台無しになっていた

しかし彼の言う通りなのだろう。

今思い直せば彼女との縁を薄くすることも出来たし彼女との縁を作らなかつたことも出来る。

なのに僕はそれをしなかつた。なぜか???

同類に合えたという。喜びの感情が少しでもあつたから。



『喜びさえしたのか。そりゃまあお前のことを疑っちまうな……。』

解かってると思うがこの先は地獄だぜ??？ 地獄よ地獄。光なんて少しだつて入らない闇の世界。

今ならまだ引き返せるぜ。光の世界とまでは行かないが灰色の世界にとどまることは出来る『

「……そうだな。俺は灰色で満足しようかな」

『ああ、そうしなよ。そうすればお前はまだ狂わないで居られる』

僕の答えは決まっていた。こうして彼と話すことは無くとも。

そう言えば気になることがあった、それを彼らに聞くことは出来なかつたんだけど。

「何で俺ヤツクンって呼ばれてんだ???

俺はあいつらに本名を教えたことないし、一文字もあってないし」

『ヤマアラシだからだろ』

ああなるほど。と僕は頷いた。

僕は自分を偽っている。嘘つきだから偽名を使って学校に在籍している。

自分の本名……思い出したくも無い。

「お前、これからどうなるんだろな」

『とてしつゝゝゝ』

「死体だよ。公にメディアに取り上げられるんだぞ」

『それはないな、あの部員達を舐めたら駄目だ。』

明日になったら誰も俺のことを覚えてないし俺は産まれてすらないことになると思つゝ』

それも誰かの異常体質によるものなのだろう。

それ程まで気狂プログレッシ部とは強烈な組織なんだなと僕は思った。

関わったらとんでもないことになりそうだな。

『さてもう話すことも無いだろう。この辺でサヨウナラだ』

「そうだな。楽しかったよ」

『結局あいつらの組織とは関わらないのか???』

「当たり前だ。炎に突っ込む虫は居ないだろ」

窓からは月の光が入らずに光なんて少しだって入らない世界を演  
出していた。

それはきっと彼の言う通り地獄なんだと思う。一度入れば引き返  
せない。



『お前は酷い嘘つきだな』

「おめい井」

第参話 『聞耳ネクロフォビア』

僕は一度だけ正夢を見たことがある。

あの体験がどんな意味を持って僕の夢に登場したのかは解からない。

だけど僕はあの夢を見てしまったのだ。

小学5年生の春、それは理科の実験室だった。

その時に何の実験をしていたのかは忘れてしまった。

夢の中で僕はアルコールランプに灯っている炎をジッと見つめて  
いるのだ。

ユラユラと揺れている光。

炎とは不思議な物だ。人間の本能だろうか、人間は火に何とも言  
えぬ感情を抱く。

それは一瞬だった。

僕の隣の席ではしゃいでいた男子の手が勢いよくアルコールラン  
プに当たったのだ。

ガラスが割れて中身の液体が辺りに飛び散る。勿論それに引火し  
て辺りは火に包まれてしまった。

僕の前の席に座っていた少女はいきなり立ち上がって踊りだ  
した。

自分の体に纏わりついている炎を振り払うように。

彼女の悲鳴を聞いて周りの生徒達は教室の隅まで逃げる。僕は動  
かずに彼女をジッと見る。

声にならない叫びで彼女は踊り続ける。ファイヤードダンス。

そこで夢は途切れる。

.

.

.

「らしくないな」

僕は昔話に浸っていたがキャラじゃないなと思ってここで止めることにした。

まあ後日談としては彼女は暫く入院した後、精神病棟に入ったわけだが……。

なぜ精神病棟に入ったかと言うと彼女はあの事件以来、極度に炎という物を嫌うようになったのだ。

いわゆるパニック症や恐怖症。

あれは非常に厄介な物らしい。

克服は非常に難しいらしいし、社会復帰に出来なくなるような物もある。

僕は閉所恐怖症だ。

狭くて圧迫される場所が滅法苦手、あの重圧に耐えることが出来ない。

考えるだけでも気分が悪くなってきた……。

「そう言えば、りるら遅いな……」



「ごめんなさい。少し厄介事があったの」

僕の背後から突然と制服姿の女の子が現れた、赤髪。りるらだ。

場所は音楽室の隣の教室の前。

普段は空き教室なので僕は訪れた事は無いのだが、なぜか僕は来たことがあるような感じがする。

そう言えば先日の記憶がポツカリと開いているのだ。

前後の日は何があったのかは覚えているのだが、その日だけは何も思い出すことが出来ない。

まるで誰かに僕の記憶を操作されているような。

「厄介事??？」

「うん。部長として部長のことは考えないといけないでしょ??？」

「まあここが私達の部室だから入って入って」

僕は彼女の言われるままに部屋に入った。

中に入ると空き教室の為に机はあちらこちらに転倒している。

ふと目に留まる物があった。それは教室の後ろの方、ロッカーの周辺だった。

黒い液体の乾いた後だろうか??？ 僕は近寄ってみる。

何だか赤い気もする、臭いをかいでみた。

「……ハズル……」

「血」

りるらが無表情に答える。まるで興味なさそうに。

しかし、この周囲一面が血に塗れているのだ。これは明らかに…。

致死量を越えているだろう。

人間にはこんなに液体が入っていたのかと思うほどの量なのだった。

「それはね……占い師の血よ」

「占い師??」

「そう。」

私達と同類なのにも関わらず、私達とは違う欠陥製品ね、使い物にならない存在だった。

本当につまらないと思ったわ。

綺麗事を並べる事しか出来ない愚か者よ。だから死んだ。

だから殺した」

僕はその殺したと言っつのを何かの比喩なのかと思ったので大して深くは考えなかった。

欠陥製品。

何だか僕のことを言われているみたいだ、僕は自分のことをそう思っている。

どこか違う、人とはどこか違う“物”。いやそれ以下か……。

もし僕がこの能力が無かったら普通の生活をしているのだろう。

こんな狂った思考はしないだろう。

だけどそれは考えるだけ無駄。欠陥製品と違って直しようが無い。

乱暴にドアが開いてそこから一人の男子生徒が現れる。

「おや」



銀髪。

「やっぱり来たんだな」

「ええつと君は……」

彼は、銀髪の彼は僕を知り合いのように話しかける。だけど僕はこんな奴知らない。

ニヤリと笑って僕の目の前に腕を伸ばした。なぜだかその腕に不信感を抱く。

黒色の皮手袋。不思議とそこには何も感じなかった。

僕は彼の手を握る。

「初めまして」

「ああ、なるほどな。  
精神誘導マインドコントロールね」

「まいんど？？」

「俺の名前はコルヴオ。俺もお前と同じ異常体質の人間さ」

どうやら彼は部員らしい。しかし彼の異常体質とは何なのかを聞  
こうとは思わない。

彼に対する不信感……それが僕を躊躇させている。

こいつは危険だ……！こいつだけは敵に回してはならない……！  
体がそう発言している。

「ヤツクン、コルヴォとは仲良くしてね」

「ああ」

「他の人達にも挨拶くらいは言った方がいいと思うわ。着いてって

あげる  
「

そういうとりるらは僕の手を取って歩き出した。教室にはコルヴオ  
が取り残されたまま。

•

•

僕は北館を離れて中庭にある小さな池に向かっていった。



あそこには確か鯉だとかがいたと思ったが僕は大きくて興味が無いので近づいたことは無かった。

その池の周囲には誰かが居るわけでもないのだが、僕とりるらは池に近づくと。

りるらは地面に落ちていた大きめの石を拾い上げて池に投げると波紋が広がって鯉が慌てて逃げる。

「アーーーーリーーーーゴーーーー。居るんなら出てきて」

「え????? ここには誰も……」

「なんだい??？」

それは突然と現れた。まるで河童のように。

池の中から人間が現れた。



第参・伍話 『聞耳ネクロフォビア』

時刻は昼休みが始まってから20分経過した12時50分。

場所は人気の無い中庭の端にある池。

状況はりるらが投げた石に反応して一人の男が池の中から姿を現した。

これは非常に気に入らないパターンだ。

こういふ出会い方はきつと面倒ごとに巻き込まれてしまつパターンだ。

僕は逃亡を図ろうかとも思ったがそれは無駄だと気がつく。

もう“出会ってしまった”のだ、この男と“関わってしまった”のだ。

勿論この場から逃げてしまつことは出来る。

しかしそれは状況から逃げているだけで根本的に逃げることは出来ないのだ。

この場合の根本と言つのは関係を持つてしまったことから逃げること。

「紹介するわ。彼はアリゴ、気狂プログレッシ部の部長よ」

「宜しく」

「いじやういじやう」

綺麗な茶髪に灰色の瞳。そして口元には竹筒。

なるほどシュノーケル代わりだろうがあれで呼吸するのは中々難しそうだ。

そして僕が一番気になってのが、耳を隠しているヘッドホン。

まだ音が聞こえる為防水らしい。

ギュイイツイイン！！！！　ギュイイイイイイインと大音量の音が漏れている。

曲じゃなかった。

しかもその雑音が耳に入ると何だか気持ちが悪くなる、黒板に爪を立てた時のような感じ。

僕は耳を封じようとしたがその前にアリゴは音を切るとノイズはピタリと止まった。

「なあ、お前は……お前は“人間の怖さ”を知っているか??？」

「……………エ……………??？」

「俺の異常体質はな。聞耳と言って相手の考えていることが聞こえるんだ。」

それはどんな感動の事であろうが、どんな憎悪の事でも関係ない。全て聞こえる」

「……………」



隣でりるらはニヤニヤと笑ってアリゴを眺めている。

ここで僕は気がついた。

そんな能力を持っていて、なぜ彼はヘッドホンでそれを遮断しているのか。

僕のような訳の解らない能力よりずっと便利なのだと思うのだが。

「便利……！？ 便利だと！？ そりゃそうだ。」

最初のうちは俺もとても便利な能力を持ったと思ったださ!!!

けどな、そんな気持ちも一週間と続かなかったださ!!! なぜか解るか!?

俺は知ってしまったのだよ。聞いてしまったんだよ。

“人間の怖さ”に気がついてしまったんだよ!!!

“アレ”は駄目だ……。俺達異常体質者よりもっと狂ってる……!!!」

「僕達より……狂ってる???」

彼の言っていることが理解できない。否、理解しがたい。

僕も心のうちはかなり壊れている。

それは人とは違う世界を持って生きているから、だから壊れた。

ただど彼の言い分はそんな僕より一般の人間達のほうが狂っていると言っている。

ありえない。それだけは本当にありえない。

「俺はな……。友人に裏切られた奴の心の声を聞いた。

何ていったと思う??? “ゴロジタイ。コイツノハラワタヲエ  
グリダシタイ” 強烈な憎悪の言葉だ。

ある医者と言った “アア、カンジャヲタスケテナンニナルトイ  
ウノダ……”

極めつけは5歳児が大きな蠅螂を握りつぶした時の言葉。

“ミテ!!!オカアサン!!!ボクコロシタヨ!!!コノチツポ  
ケナセイブツヲコロシタヨ!!!”

「でもそれは状況によるんじゃない」

「違うな……。あいつらはエゴイストなのさ、自己中心的な生物だ。」

「自分が生きる為には大量の人が死んでもいいと思っている」

それは……そうなのだろう。

そこが異常体質者と人間の違い。

異常体質者は自分の持つ体質のおかげで考え方や思考が壊れてい  
る。

彼もそう、僕だってそう、彼は聞きたくも無いことを聞いてこ  
まで壊れた。

だからもし彼の言った選択があれば……一を殺して千を助ける。  
合理的な生き物だから。

「アイツ等は自分さえ良ければいい。こつこつ話を知っているか？  
???

ある実験でそのボタンを押せば1億円が手に入る。その代わりに自分の知らない人間が5人死ぬ。

この実験で全ての人間はこのボタンを1分以内に押すことが解つたのだ。

なあお前ならどつする???

異常体質者ならこれをどつする???

「押さないだろうね。自分の知らない人間が死んでも何の得にもならない。」

「だからと言って1億円も別に欲しくない」

「その通りや」



「つまりこういつ仮説が成り立つのだ。」

俺達が正常であり、人間達が異常である。とな」

「そうですね、そういう視点もありますよね。」

僕は彼の仮説を流した。馬鹿馬鹿しいと思ったから。

確かに彼の言っている事は間違っているではない。

100%の正解だろう。だからこそ不自然なのだ。

こじつけているというのが正しい。だから彼の仮説は違っていると思っ  
た。

僕の背後から声がした。

「話は終わった？？」」

「ああ、終わったさ。終わったとも」

「そっ。じゃあさ」

りるらは振り返って歩き出したので僕はそれについていく。

この時、僕はりるらの態度に違和感を感じた。

そつだ……彼女は確か部長だと言っていたか……。

アリゴに対する視線は僕やコルヴォに比べると　素っ気無かつた。

あれは知っている、何の興味も無い物を見る時の目だ。

僕はふと池の方を振り返ってアリゴを見る。

そこには黙ってりるらを睨みつけているアリゴが居た。

あの眼は一度僕は味わったことがある気がした……あれは憎悪だ。

それももつと強烈な……『殺意』

それは小さなノイズだった。

身を感じない風にも掻き消されるような小さな雑音、しかし僕には聞こえた。

まるで耳元でささやかれているように

「バケモノガ・・・」

•

•

.



僕とりるらは部屋に帰る道を歩いていた。会話は無い。

暫く僕は考え事をしていた。

彼は人間を憎悪し、彼は本当の声が聞こえたから人間は異常だと  
言った。

でもそれだけであそこまで強烈な憎悪を持てるだろうか???  
それはな?……

「彼はね。ネクロフォビアなの」

「ねくろふおびあ???.?」

「聞いたことが無いかしら???.? 分類だとパニック障害や恐怖症の類なんだけどね。」

もしかするとその中でも最上級になるほど性質の悪い物なのかも  
しれないわ。

逃げられない、絶対に逃げられない。絶対に逃げる方法を使うこ  
とを許されない」

そう言えば先ほど僕は恐怖症について思考していたっけ。

それよりネクロフォビアと言ったか???

このフレーズはどこかで聞いたことがある……。

“絶対に逃げる方法を使うことすら許されない”

僕は気がついた。

「死恐怖症」か

「そう。彼は死に対して途轍もなく恐怖を抱いてしまう。

常に死の瞬間を想像してそれに恐怖してしまう。

死ぬのが怖い、現実から逃げたい　でも死ぬのが怖いから自殺  
が出来ない。

悪循環ね。彼は生まれた時からそんなたちの悪い物を持っていたの」

「それがどうかしたの??」

「考えてみて……さっきの彼の話と彼がネクロフォビアだという事実をつなげて考えるの。」

「さあどう??」なぜ彼はあんなにも人間を恨んでいた??」

僕が感じていた違和感。

ほつれていた紐が 解けた。

「彼は……聞いてしまったんですね……」

「そう。人間の本心と “アリゴを殺してしまいたい” と言っ言  
葉」

それは彼の人生の中で一番大きな打撃だっただろう。

死ぬのに対し、思考することさえ恐怖になる彼にとって自分が殺されると言う言葉を聞いた時、発狂するだろう。

だから彼はあんなにも人間を嫌っていたのか、そして誤った解釈をしてしまった。

“異常体質者が正常”であると。

「何だか可哀想な人ですね」



「そうね、まあ私にとつたらどうでもいい人だから興味ないけど」

りるらはどうやら本当に、完全にアリゴの事に興味が無いらしい。

そのまま部室に入っていった。

きっと彼女も彼の仮説を聞いて馬鹿馬鹿しいと思ったんだろう。

まあとにかく僕は別にアリゴと仲良くなんかしくなくてもいいかと思いつつ部室の扉を開いた。

「挨拶は済んだのか??？」

「うん、アリゴに会わせてきた」

「あ、君が噂のヤツクンだね」

僕が教室に入ると二人が目に入った。一人はクロウ、そしてもう一人は……女の子

同じ制服でココにいるって事は部員なのだと思う、彼女がこちらに小走りで走ってきた。

そして僕の手を取って口を開いた。

「こんにちは 私の名前はヤナだよ。仲良くしてね」

「この子が……異常体質者??？」

長い黒色の髪に整った容姿。部類で言えば可愛いになるこの女の子。

僕はこんな可愛い女の子が僕やアリゴと同じ異常体質者だとは信じがたかった。

こんな子でも……取り返しのつかない程壊れてしまっているというのだろうか。

「じゃあ私はこの後用事があるから  
ジャアネ」

「オオオオオオ……」

ヤナは教室からパタパタと小走りで行った。

それを教室の後ろの方に居たコルヴオがジッと見つめている。

否……見つめているというより警戒している。

僕はコルヴオの事をなぜか危険人物だと思い込んでいた。

余り関わらないほうがいいと思っていた。

だが、そのコルヴオが警戒するヤナは一体何なのだろう。

「彼女には絶対に関わらないで、あれは空けちゃならないパンドラの箱。」

もし中身を知ってしまったら、それは地獄を知る事と同じ事。

ね。コルヴォ」

「……ああ……。俺は2・3回殺されかけてる。」

俺だから生きていたがもしそれが別の奴なら……確実に殺されるだろな」

「……………」

僕はりるらとコルヴォに忠告を受けたのだがやっぱりあんなに可愛い女の子がそんな恐ろしい事をするとは思えなかった。

だから僕はヤナを怖い人間リストには加えなかった。それが間違이었다。



“ 綺麗な物には棘がある ”

その棘はもはや狂気にも値していた事を僕はこの時は一切知らなかったのだ。

•

•

放課後。僕は何も無い美術室で彫刻と会話していた。

彼はこの何世紀もの間、世界の移り変わりを見てきたらしい。

そりゃまあ人間の悪行は酷い物だと断言した。

そしてこれからもそれは変わらないと予言させた。

「でもそんな人間に君は作られたんだろ???.」

「……」

途端に僕の頭痛は治まって、目の前の彫刻は何も喋らなくなった。

何だかりるらとあってからこちらの世界に来る事が増えた気がする。

まあでも……別に僕はこっちが嫌いな訳じゃないし、別にどうでもいいかなと思いつながら美術室を出た。

グチャー！……ピチャ

ピチャ

何かが潰れる音、それと同時に液体を踏む音。音源は美術室の隣にある準備室。

おかしいなと僕は時計を眺める。

時刻は6時を回ったところ、この時間にはもう美術部の人達は帰っているはずだ。

帰っているからこそ僕はこの場所に導かれ、そして彼と会話していたのだから。

……何だか嫌な予感がする。

あの扉の奥には途轍もなく狂っている世界が広がっている。

僕はそんな予感がしていた。

「まさか……な……」

僕は恐る恐るその扉の前に立ってドアノブを握り ゆっくりと開いた。

扉を開く時に軋む音がして思わず耳を塞ぎたくなった。

それと同時に鼻の奥を刺激する異様な臭いが僕の嗅覚を支配する。



「うわ……」

それは酷かった。何が酷かったか。

まず僕の視界に入った準備室の壁、まるでライオンに引っ掻かれたような大きな引っかき傷が壁一面に広がる。

そして女性の彫刻。

穏やかな顔の眼球に太い杭が貫通している、これが人間の顔なら……そう考えるだけでもおぞましい。

部屋の中心にあつた机は潰されていて、足元をよく見れば木の破片が飛び散っていた。

一体何をしたら机が潰れるのだろうか。

黒板は真ん中で割れていて右半分が完全に地面に落ちてしまっている。

足元にはショーカーの物であろうガラスが散乱していて、まるでここで銃撃戦があつたようだった。

そしてこの臭い。これは血の臭い、人間の体を流れている血だ。

その血が数々の破壊された物の上からコーティングされるように撒き散らされている。

血まみれだった。倒れたショーカーも、美しい油絵も、真上にある蛍光灯も。



部屋の奥で倒れている人間も

「うわ……」

死体。四対。肢体。シタイ

男の体は八つ裂きにされて何とも痛々しかった。

そして胸のところが集中的に攻撃を受けていた。

心臓だ。心臓を幾度も幾度も刺されたんだ。

その心臓は倒れている男の右手がしっかりと握っていた。

自分自身の心臓を……守っている。

僕はそれ以上のことは何も考えずに準備室を出た。気持ち悪い、

吐きそうだ。

「一体……誰が……ウヘエ……」

僕は胸の奥から込み上げてくる物を抑え這いながらその場から逃げるように進む。

早く逃げなければ、ここに居ては駄目だ。気が狂いそうになる。

落ち着け。落ち着け僕、よし……大丈夫。

慣れっこじゃないか?? あれが始めての体験でも無いだろう。

血迷うな、何をすべきか考える。

……僕は深呼吸をする。そして立ち上がったって振り返る、もう美術室は見えない。



「あれ???」

恐らくさつきからずっと鳴っていたのだらうけど、何しろあんな状態だったのだから気がつく訳も無かった。

僕は長く続く廊下と数メートル先の倉庫が視界に入った。

この倉庫と言うのは体育大会で使う大玉なんかが入っていたと記憶している。

その倉庫から、『音』がするのだ。耳を澄まさなくても解るくらい音が漏れている。

僕はその『音』に好奇心を持ったのだろうか倉庫の扉を開いた。

「  
なんで???.?」

「  
.....」

彼は何も喋らなかつた。虚ろな眼で僕を見据えながら、ただただ  
“揺れていた”

その光景が僕には何か引つかかつた。何か……何かこの光景が  
りえないと思つた。

僕は何も言わないまま彼を見つめていた、別に友達だつたわけ  
でもない。

それなのに彼には親近感が沸いていた。

一体彼はどんな気持ちで最後を迎えたのだろう。

ちよつと待て。何かおかしい、何かが違う……そうか……。

「じゃあこれは一体“誰が”……」

僕は暫くの間、首吊り死体を眺めていた。

•

•

次の日の朝。僕はいつもより早く目覚めたので早めに学校に行くことにした。

それにしても時間を少しずらすだけでこんなにも生徒の数が違う物なのかと思った。

その日の登校中には僕は同じ高校の生徒は見なかった。

学校が騒がしい。パトカーが何台も停まっているしカメラを持った人達が沢山居る。

頭痛は……ない。

「ひびく、ひびくお」

「今日から暫く休校らしいよ」



休校らしかった。それにしても一体この騒ぎは何なのだろうか。

僕とりるらは校門から数メートル離れた所からその光景を眺めていた。

「ほんと迷惑だよね。殺しはいいけど、私に断り無しにするから」「ういっ事になっちゃんだから」

「何があったの??? 僕は全く知らないんだけど」

「ヤックンってテレビとか新聞とか読まない人???

じゃあ知らないね。美術室の隣に準備室ってあるんだけど、そこで惨殺死体があったの。

いつかこうなっちゃうと思ってたけど本当になっちゃったわね。

コルヴォもちゃんと監視してなきゃ」

そう言えば昨日死体を見たな。

……あれ???

「どうしたの??? 今のヤツクン凄い変な顔してるよ???」

「……りるら。ちょっと相談があるんだけどね」

「ああ、ジルバの事??? うん、勿論知ってるよ。」

あれは対処できたの、精神誘導してちゃんと処理したからヤツクンは気にしないでいいよ」

違う。僕が言いたいのはそのう事じゃない。

もっと根本的なこと、まさか忘れてしまったわけじゃないだろ？  
??

彼がどんな人間か……彼がどんな欠陥があつたか……。

本当に君は、本心で君は 気づいていないの  
か???

「馬鹿だよー。まさか自分で自分を殺めるとはね」

「……待てよ……どう考えてもオカシイだ」

思い出した。りるらがジルバに対してどんな視線で見っていたのか。

あの目は何の意味も無い、そこに何の感情も無い、あれは“無関心”だった。

本当の意味でりるらは彼に何の興味も持ちえていなかったのだ。

だから君は気づいていないのか???

「ダカラナニ???

イ。気が付イテイナイ訳ナイジヤナ

ソウ。

彼ハ“死恐怖症”ヨ、ツマリ自殺スル訳無イ。

知ツテルデシヨ???

思ッ私ハ彼ヲ本当ニドウデモイイト

味ダカラ彼ガ誰ニ殺サレタ何テ興  
ナイノ」



.

.

.

アリゴ。君は聞耳と言う異常体質を持って人間を知りすぎてしまったんだ。

怖かったんだろ??? 人間が怖かったから『音』から逃げた。

人間を憎悪していたんじゃないかって単純に逃げただけなんだろう????

水の中にもぐってまで『音』から逃げたかったのか……。

だからこんな事になってしまったんじゃないか???

君は聞かなくちゃならない『音』を聞いていなかったんだ。

聞いちゃいけない『音』だけ聞いていたんだろ???

気づいちゃいなかったのか??? 聞耳を使えば君は殺される事なんか無かったんだよ。

君は逃げる事が出来たはずなんだよ。でも君はそれをしなかったんだ。

そして何より ネクロフォビアな君。

でも良かったじゃないか。ようやく逃げる事が出来たじゃないか。

君は 死んだんだ。

「バイバイ。ちなみに僕は君の事は大嫌いだった」

『そっか???.?』

俺はお前が結構好きだった』



第肆話 『裏切りペシミズム』

悪くない。悪くないとも。

君がそういう思考の持ち主だと言つことは私は<sup>あらかじめ</sup>予め、知っていました。

そう、知ってました。

私は貴方以上に貴方と言う概念を深く深く理解し、そして受け入れる事が出来ているのです。

何をそんなに不思議な顔をしているのですか???

よもや忘れたわけじゃありませんよね???. 私がどういつ事が出来る存在かを。

私は自分自身で“忘却”と呼んでいます。  
デリット・メモリー

そう言えば他の人達は精神誘導マインドコントロールと言います。

『相手の記憶を書き換える事が出来る』

つまり私はコルヴオよりも強く、ジャックよりも残酷な能力を持っているのです。

ただ彼らのように悪用はしません、私は忘却を“正しい方向”に使います。

正義の為に使うと言つんでしょうか。

ここで貴方は疑問に思つはずです。

……思わないわけが無い、貴方は人一倍ぶつ飛んだ異常体質ですからね。

“こちら側の人間”に正義などと言つ言葉は存在するのだろうか???



勿論、私やりるらがどれだけ正義だと言い張っても君が納得しないのならそれはきつと偽りの正義なのでしょうがね。

おっと話がそれましたね。

そもそも貴方は考えた事はないでしょうか……“正義の定義”を。

一体どこまでが“正義”でどこまで行けば“悪”になるのか、貴方は一度でも考えた事はありませんか???

無いとは言わせない、無いとは言わせませんよ。

何しろ貴方はこの世界の裏を見る事が出来るんですから。

じゃあここというのはどうです???

ある街で殺人鬼が現れました。私がそいつを一刀両断、ぶち殺しました。

さあここで考えて欲しい。恐らく二通りの解釈があるでしょう。

そうです。そこがこの話の面白ところです。

『お前は街を救った正義のヒーローだ!!!』

『いや、お前は一人の人間を殺した殺人鬼だ!!!』

どうです??? 私はこの行為をするだけで“正義”と“悪”の  
両方を言われるのです。

貴方はどう思います??? 私は正義を語るべきか、それとも悪  
を語るべきなのか。

……ほお、面白いですね。実に面白い回答です。

私は今まで何人もの異常体質者にこの質問を問いかけてきました、  
しかしそちらの回答を選んだのは貴方が初めてです。

流石。と云うべきなのですか???

やはり二つの世界を見ている貴方はただの異常体質者だけで済ますのは勿体無い気もしますね。

……貴方は“常人”だと言われた事はありませんか???

貴方は限りなく気狂とは程遠いのかもしれませんね。

私やコルヴオはもう駄目です。壊しすぎている　壊れすぎてる。

貴方と違ってもう戻れません。そう……戻れない……。

少ししんみりとしてしまいましたね、すみません。

お詫びに貴方に一つだけ質問をさせてあげましょう。

私に答えられる事なら答えてあげますよ。

……それを聞きますか。やはり貴方はまだ大丈夫です、まだまだ大丈夫。

しかし私がこれを回答すると貴方は戻れなくなる。

ね。コルヴォや私のように、壊れますよ???. それでもいいんです

いいですか???. 一度しか言いませんし、一度しか言えません。

I  
II  
5  
”

あれから暫く時間は経って時計の針は丁度天辺をさしていた。

僕は休校を知って、家に帰るわけでもなく、友達と遊ぶわけでもなく、ただただ時間を潰していた。

いやこういう場合は時間に潰されていたというのが正しいのだろうか。

とにかく学校は今日一日は休校になって明日から又同じように始まる。

何だか気が進まないな……。

と言うのも僕が今朝にりるらと話した事。

思い出せばまだ体が凍りつくような感覚に襲われる。

あの後、りるらに部室で今後の事についてミーティングがあるんだけど参加しないかと言われたのだが僕はあの場からすぐに立ち去りたかったので断った。

部員失格。

「でもまあ……」

学校が無いのも暇だなと僕はため息を漏らしてみる。

うん、何だかこういうのは人間らしい。

いや、人間を意識している時点で僕は遠い存在なんだろうけど……。

得にする事も無いので日本経済と今後の課題について思考する事  
にしてみる。

「あの……」

「は？……」



僕の頭の中のイメージは一気に吹き飛んだ。振り返る。

そこには僕と同じ制服を着た少年、僕より身長は高い。コルヴォと同じくらい。

だけど僕は身長よりも真っ先に髪の毛が目があった、……金髪。

僕は金髪に対して余りいい印象は持っていないので関わりたくないなと思った。

それが正直な気持ち。

「ええっと……君は……??？」

「僕はダミアンです。君は確かヤックンだよね??？」

僕は呼吸が止まるんじゃないかと思った。そして同時に身構える。

その名前は呼んじゃいけない。

僕を呼ぶときは　と呼ばないといけないんだ、勿論偽名だけど。

ヤックン。それはヤマアラシから名づけられたあだ名、名づけ親はじるぶ。

となるとコイツは……。

「君ももしかして……???」

「いやいや、今の僕は君たちとは違うよ。」

まあ勿論体質はそのままだけどね。随分と人間らしくなったよ」

今の僕???. ああなるほど。文脈は理解できた。

プロントは僕の隣に座った、いや……そんな事より……。

「あの部活って退部できるんだ……」

「当たり前だよ、あれでも一様クラブ活動なんだから」

どうやら出来るらしかった。

しかしそれならもつと気に入らない方向に話が進む事になる。

彼が元氣狂プログラッシ部の部員なのならなぜ僕の存在を知っているのだろっ????

いくら僕が壊れているからと言ってもそれは内面の話、つまり人を見て「あっ、こいつは異常体質者」だなどはならないわけである。

じゃあなぜダミアンは???

「知っているぞ。」

君は自覚が無いのかもしいないけど“そちら”の世界では随分と有名人だよ???”

「僕は別に特別な事をしていませんけど???”

「特別な事をしていない???” そりゃ本当に傑作だな。」

君はそんな異常中の異常。異端の中の最上級を持つ能力を持っているの???”

僕は君の存在自体が特別だと思う。

君の存在自体が異常だと思う」

異常中の異常。異端の中の最上級。

この僕が 有名人だって???



誰も見る事の出来ない裏側。

歪んだ世界を見る事が出来るこの腐った眼球が、有名???

だって可笑しくないか。

僕みたいな何の意味も無い体質よりもアリゴのような聞耳の方がずっと便利だ。

コルヴォやりら、ヤナなんかの方が凄い異常体質を持っているに決まってる。

それなのに

「あれあれ??? 気がついてなかった???

僕と君とはとても似ているんだよ。だから僕も君もりるらに気に入られてしまった。

あんな“化物”に気に入られた。だから僕は逃げ出した。

そしてりるらから逃げた、逃げて逃げて、やっと逃げ切った」

985

「どひこひ……んんん」

「そのままの意味さ。それよりもつ見た??? 彼女のあの眼」

僕には心辺りがあった。と言うより心辺りがありすぎた。

あの眼というのは多分あの時の無感情の目の事だろう。

確かに僕を見る時にりるらは楽しそうにしている。

それは僕がりるらのお気に入らだから???

解らない……なんで俺はこんな奴の言うことを信用してしまっているんだ。

まるで他人の気がしない。

「僕はね……」

ダミアンは続ける。

「異常体質者ではないんだよ」

「イ常タイ質者シヤ……ナイ???」

僕の頭の回線はフリーズしてしまった。

余りにも莫大な情報量を扱ってしまったパソコン如く。

だってそうだろう。説明すらされていないがあの部活は異常体質者の集まりじゃないか。

それなのにダミアンは異常体質者ではないだって???

嘘だ、だって先ほど彼は自分が体質が持っていることを発言している。

「ごめんね、説明が足りなかったから混乱してるだろ。」

比喩っていつのかな???

僕の体質は“あつて無いような物”

最悪終了

バッドエンド

僕の周りでは決して幸せなんてありえない。

だから解らないのさ。例えば君が明日死んだとしたでしょう、でもそれは僕のせいかな???

いくら僕が“災厄製造機”だとしてもそれは僕がやった事なのか???

……そう、この体質はそういふ事なのさ。



あるはずなのに、どれが僕が引き起こした物なのか解らない。

全部かもしれない、もしかしたら一つも無いのかも知れない。

本当に……本当にもしかしたら僕はこんな体質は持っていないのかもしれない」

「……でもそれって可笑しく不是吗??？」

そうなのだ。僕やアリゴみたいな体質なら自分が異常だと気がつくのだ。

でも彼の場合は絶対に気がつくことが無い。

もし周りの人間が全員バッドエンドだったとしてもそれが自分の体質だなんて考えるだろうか???

人間と言うのは誰かを蹴落として生きる動物。

なら全員が“ 災厄製造機 ”

彼だけじゃなく……人間全員。

じゃあ何で彼は自分が異常体質者で自分の体質が最悪終了だと気がついたのだろうか。

「おかしい、そうおかしいさ。でも僕が自分の体質に気がついたので退部した後さ。」

つまり、りるらは異常体質者ではない人間を取り入れたのさ。

さあ何でだと思っつ?????

「さあ、解らないです」

「彼女は思ったんだよ。異常体質者よりも狂った普通の人間、つまり。」

もっとも狂ってるって  
「

「君はさっきからいちいち回りくどい。一体何が言いたいんだ？？」  
「？」

「ごめんね、気を悪くしないで。」

じゃあ率直に言おう。うん、そうしよう。

僕はね、ある日突然、何のきっかけも無く、ただ単純に気がついてしまったのだ。

それが僕が“災厄製造機”なんじゃないかと言う問だ。

僕が生きているだけでどこかで誰かが苦しんでいる。

もしかしたら僕はそういう体質を持っているんじゃないかと思うってしまった。

いや、その逆もありえる。

僕が生きているせいでもどこかで誰かを無意識の内に助けているのかもしれない、これは恐ろしい事さ。

誰かの人生を俺は書き替えてしまっている。

俺は誰かの人生と言う名のレールを歪ませてしまっているのかも  
しれない」

ああ、そうか。

彼は異常体質者なんかじゃないんだ。

彼の思想こそが異常体質者なのか。

「なるほどね、確かに君は本当に狂ってるみたいだ。」

じゃあ僕から君へ質問。何で退部したんだ??？」

その質問を問いかけると彼の体はガタガタと震え始めた。

額には汗をかいて、顔色が段々と悪くなっていくのが解っていく。

そして口を開いた。



「最初に言ったと思うが……彼女のあの眼を見たか???

僕はなアレを見てからもう彼女が怖くなってしまったんだ……。

いや違う……本当は“もっと別の所”にある。

そうだな……真実に辿り着いてしまったから。

僕は知ってしまったんだよ……彼女が一体何なのか……。

……そして異常体質者が一体どうなってしまうのか……。

気をつける……

・ も  
ウ う  
エ す  
ツ ぐ  
プ そ  
「 こ  
ま  
で  
来  
て  
い  
る  
ぞ  
・  
・

ラ  
行  
に  
気  
を  
つ  
け  
ろ  
。

ダミアンは相当気分が悪かったらしく、口から胃液をぶちまけた。

そしてポケットから小さいビンを取り出し、中から大量の錠剤を手に出して口の中に押し込んだ。

精神安定剤。この時ばかりは僕も少し動揺していた。

「いいか???’リルラ』の周りは悪と悲惨に満ちている。

彼女は悪魔のような物だ……直に君も気づくだろう。

関わったら最後。皆同じ道を歩む事になる。

僕はもう駄目だ、そろそろ『リルラ』になる「

「りるらになるって一体???」

「そいつは駄目だ、知っちゃいけない。君も『リルラ』になるよ。

さて君とは話せてよかったよ。じゃあね」

僕はダミアンを引きとめようとしたけど、彼は去ってしまった。

何だか後味の悪い終わり方をしてしまったよな……。

まあいいや、今日は家に帰ろうかな。





第肆・伍話 『裏切りペシミズム』

翌日僕はまたいつもどおり学校に向かっている時のお話

何も変わりはない。いつもと同じように狂いながら学校に行く、はずだった。

僕が信号待ちをしている時、丁度真後ろからボソボソという声が聞こえた。

それは僕に向けられた物なのかは解らない。だから僕は知らないフリをする。

ここには色々な音が溢れている。

人々の会話、車が道路を走る音、靴と地面が擦れる音。

そのどれもが真後ろの声を掻き消すには十分な音量だった。

しかし僕にははっきりと聞こえている。

「やあやあ、おはようございます。」

私は、私こそがエドウ。気狂プログラッシ部の部長です。

以前はすみませんね。

どうしても彼女が貴方の記憶を書き換えて欲しいとの事でしたから。

勿論、私も貴方と同じ異常体質者です。それはもう恐ろしい体質を持っています。

……おっとこんな話をするために貴方に会いに来たんじゃなかった。

単純な質問をします。それに答えられるなら答えてください

裏切りのダミアンは何処にいます

「.....」

か  
?  
?  
?  
?

信号は青に変わって僕はそのまま歩き去っていった。

不思議と頭痛は無かった。



学校に着くと僕はまずりるらの元に向かった。

いつもなら僕の席にいるのだが今日は自分の席に座って読書をしていた。

読んでいた本は……電話帳???



余程集中しているのだろうか、目の前にいる僕にまるで反応しない。

僕は電話帳を取り上げた。

「おはよう」

「どろしたのヤツクン???.? そっちから話しかけるなんて珍しい」

「質問がある。答える。」

「ダミアンって誰だ」

あんなに穏やかだった彼女の顔が 歪んだ。

まるで敵を見るように睨みつける。

こんな顔知らない、彼女の初めての感情を見た。

そしていつもと同じ声で言う。

「ダミアンに酷いことしたらいくらヤックンでも殺す」

だそうだ。

「そりゃまあ物騒だな」

「嫌なら彼には近づかないで。私もヤツクンを殺すなんてしたくない」

「解ったよ。それともう一つ、『リルラになるって』……いやなんでもない」

僕もりるらもそれ以上は言わなかったし聞かなかった。

りるらはまた読書に戻って僕は自分の席に座って授業が始まるのを待っていた。

……聞いちゃいけない事を聞きかけてしまった。僕はそう思った。

後でりるらに謝っておこう。

霞んでいく視界の中で僕は確かにそう考えていた。

」  
おやすみ  
「

そのまま僕は静かに眠りについて次に起きたのは四時間目が終わった事を知らせるチャイムだった。

我ながら随分な不良生徒になってしまった物ものだなと思った。

だが僕は根っからの善人なのでそれは違うか……自分で言うのも  
おかしいか。

「うん」



そうやって僕は席を立ち上がる。だけど僕が行くあてなんてないのだ。

取りあえず適当に足取りを運んで我武者羅に右へ左へと進んでいった。

たどり着いた場所 音楽室の隣の空き教室。

「嫌な場所に来ちゃったな……」

取りあえず教室の中に入ってみる事にした。

そこには一人の生徒が机の上に座って、ジッとこっちを見ている。

一番初めは銀髪であったからコルヴオかなと思ったのだが顔を見て違う事に気がついた。

そう言えばりらといい、コルヴオといい、こいつといい、僕は最近随分なカラーバリエーションに出会うなと思った。

彼が口を開くと僕は少し驚いた、その声に聞き覚えがあったから。

「やあ、今朝はどうも」

「エドウ。でしたよね」

「その通りです。」

あの時は貴方を正面から見ていませんでしたからこうして対面するのは初めてですね。

初めまして、私の名前はエドゥウです。

どうぞお見知りおきを」

随分と大人な対応だった。

そう言えば今朝少し驚いた事があった。

まあ僕が勝手な想像で決め付けていた事だったので凄くびっくりしたわけではないが。

彼は部長らしかった。僕はてっきりりるらが部長かと思っていたのに。

僕とルファはお互いの内側を探るかのようにジッと睨んでいた。

こいつは今までであった中で感情が知れない人間だから最上級とも言えるほど“不気味”だった。

人を殺すのが趣味の人間より何を考えているかわからない人間の方がずっと怖い。

心が無だから、いつでも狂う要素を持ち合わせているから……。

ふとエドウが笑い始めて言う。

「男が二人。特に接点も無い二人がこうして誰もいない教室の中で  
睨み付け合う。」

これは凄く妙な事ですね。ましてや人間でもない二人。

傑作だ。空前絶後の傑作です」

「ソウデスカ。僕モソウ思イマス」

偉く棒読み。感情を隠せないのが僕の悪いところ。

エドウが僕から目を離して教室の隅まで歩いて、窓から外を眺める。

そのままガラスの奥に広がる世界を見据える。

「私はかつて色々な人間を“抹殺”してきました。

あるときは他人の未来を見る事が出来る占い師。

あるときは人間を酷く怖がるネクロフォビア」



「抹殺??? 殺害したって事ですか???」

「違う。私はもっと外道な事をしている。」

私は他人の思考に干渉し、その中身を書き換えて来た。

それは同時にこの世界から一人の人間を消す事も可能にしている  
最初から無かった事出来る。

私にとって人間とはハードディスクのような物さ。

いくらでも上書きが出来、 unnecessary 記憶 データを削除できる。

人間はな。システムなのさ」

「そりやまあ随分と残酷な体質な事だ。

相手の記憶、感情を変えることが出来る体質。それは反則だ。  
もはや“神”じゃないか。

「暗い自己紹介はここまでだ。私は君にはとても期待している。

出来ればもう少し会話をしたかったのだけどこれ以上は必要ないな。

これ以上は知らないほうがいい。知っちゃいけない。

もうすぐ“戦争”になる。

そのせいで私達は全員消える。何も無かった事になる

……彼はそう予言した。」

「ちょっと待ってください、何を言っているのか解りません。」

それにそれが本当だとしても僕は自分が消えてもどうでもいい。

本当にどうだっていい。

「それより僕はまだ貴方に聞かなきゃならない事がある」

エドゥはこの教室から去ろうとして後方のドアを手に掛けた。

そして、僕の方は見ないでこつ呟く。

「悪くない。悪くないとも」

「あたまいたい」

僕は一言そう言った。この頭痛は僕の体質による物じゃなく単純に普通の頭痛だ。

情報量が多すぎてもう頭が回らない。僕はフラフラと歩きながら校門を目指す。

体温が上がっていくのを感じる、それと同時に風景がグニャグニャと曲がる。

すでに月が昇って、丁度学校の屋上の真上にある。光に照らされて彩られる金色。

……嫌な予感がする。

ふと金色が揺れる。



「ヤメロ。イッタイナニスルツモリダ」

世界が止まって見える。その中で彼は『鳥』になった。

まるで今から翼を広げて飛ぶかのように自分の行為でどうなるかが解らない子供のように彼の足取りは軽やかだった。

しかし翼を広げない。地上との距離が縮まる 四m……参m……  
…式m……零……

.

翌日、僕はいつもより一時間早く学校について何も考えないまま屋上に向かった。

そこはまるで何も知らなかったように“いつもどおりの屋上”だった。

それもそうか、もうエドウが処理を済ませたんだろうな……。

『賽は投げられた。もう直終わる』確か彼はそう言った。

「でもまあ君は怖かったらしいじゃないか???

随分とりるらには近づきたがらなかったらしいね。

君は僕に彼女の周りには悲惨と悪しか存在しないと言ったね。

それはどついつ意味で言ったんだ???

君は知っていたはずだよ。

りるらが一体どついつ物なのか。

だから裏切ったんだろ???

だから“ペシミズム”なんだろ???

「『リルラ』になる。うん、君はそれが怖かったんだ。」

「  
」

君は『リルラ』になりたくなかった。だから退部をした。

どうなんだ???

「  
「



「まあいい。もうすぐ終わるらしいしね。」

最後に僕に言いたいことはある……?」

「……」

「大きい声で言ってくれ。ぜんぜん聞こえない」



「……！」

「  
駄  
目  
だ  
。  
」  
「  
ら  
り  
っ  
て  
」  
る  
」

第五話 『黄昏デューアイデー』

HRが終わって僕は暫く仮眠を取る事にした。

まあ何せ昨日の夜も寝てないし、そう言えば一昨日の夜も寝ていないのだ。

だから今現在は病的に眠い。

こうやって思考することが出来ている事態おかしいほど眠たい。

まあいいや……。

目覚めたら実は今までののが全部夢オチだったってのも悪くない、僕はそれを期待しながら瞼を閉じる。

夢オチ???? うん、そう言えば彼女の存在はソレに近いのか。

だったらこの物語もきつとその程度の物語なんだろうと思う。

だって誰も得せず誰も損をしない話。

何の知識にもならず何の意味もなく何の楽しみも無い。

まあいいや……昼休みにもう一度部屋に行ってエドウと会話できたらいいや。

深い世界に、深い夢の中に……僕は……僕は……

墜ちていった。

•

•



「率直に聞きますけどダミアンを殺したのは貴方ですか??？」

「違いますよ。僕だってエドウがやってると思ってたんですから」

「まさか!!! 私を人を殺す側の人間じゃありません。」

しかし、困りましたね……君じゃなかったらもう疑いなくあの人が居ません」

僕はまだ完全に起ききっていない脳をフル活動させながら彼の話  
を聞く。

どうやらエドゥは先ほどから一人一人の生徒の記憶に干渉してダ  
ミアンという人間を忘却させて回ったらしく今日は授業には出てい  
ないらしい。

随分とめんどくさい役をやっているなと僕は彼のことを尊敬の眼  
差しで見た。嘘<sup>ゴ</sup>だけど。

「君は何か知っているんじゃないか??？」

「何か??？ 随分と抽象的ですね」

「抽象的。そう抽象的さ。」

君と僕の会話の中で一度たりとも具体的だった話はあると思うか  
??？」

随分と嫌味を言う人だった。

僕は彼のことを尊敬する眼差しを辞めた。

まあ知っていることはいくらかあるんだけど……。

「彼はラリってました」

「そりゃそうだろう。彼だって彼女に出会ったんだからね。」

出会った時点で『ラリル』んだよ、『ラリル』 『リルラ』  
『りるら』みたいな。

まあ言葉遊びは置いてだな。しかし随分とおかしな話だな」

「何がですか???.?」

「彼はもう退部したんだから正常だと思っていたんだが……」。

「まだ彼は自分が異常体質だと思っていたのか。」

「随分と腐った思考をしていたよ彼は」

その時、教室の扉が荒々しく開いた。

余りの勢いで教室全体が振動していると言っても間違いではないだろう。

そして僕は何気なく扉のところを見してみるとコルヴォが立っていた。

「ジャックは何処だ!？」



「知らないよ。いや……あるいは何処にも居ないのかもしれないよ  
???」

「実は演技だったとか」

飄々としたエドゥに対してコルヴォは随分と怒りを露にしていた。

まだ彼女が居ると信じているのかもしれない。

存在しないのに頭のどこかで彼女の存在を認めている。そんな感じか。

ジャック。そう言えばここ数日その単語が良く出てきている。

どうやら固有名詞であるのは解るのだが一体誰の事なのかが僕は解っていないかった。

もしかしてエドゥが言う『戦争』というのに関係があるのだろうか。

「演技だど??? あいつの力が演技の範囲に収まると本気で思っているのか!?!」

「知らんね。」

私は何も知らん、そんなにあいつの居場所を知りたいのなら“りるら”にでも聞いてみればどうだ???」

それは言っちゃいけない。それはコルヴオに対しては言っていない。

コルヴオの真っ黒の長い手がエドウの首に向かって伸びる。

このままじゃ本当に殺されるだろう。

うん、コルヴオならやりかねないし、以前のような強烈な殺意を感じる。

僕は足を動かそうと

あれね???

足が……足が動かない……

…。

「出た出た。でも君はその体質を随分と嫌っていたじゃないか。」

人を殺す以外には使えない、でも人を殺すにはもってこいの体質。

1068

相手の動きを完全に封じてしまう。

いやもつと別の解釈だ。

『相手の神経を麻痺させる』って言っただけ???

まあどうでもいいさ。でも私の体質も忘れてもらっちゃ困る。

お前を壊してやるうか？？？」

「……チッ」

た。　　コルヴオはその漆黒の手を離してエドゥは解放されて自由になっ

た。　　まあ当たり前か。体質の序列で見れば確実にエドゥの方が圧倒的に有利なのだ。

相手の思考に干渉するという事はそういう事。結局は殺人技。

彼はそれに気がついたのだ。だから解放した、いや解放された解放されたのはコルヴオの方。

「……今日の放課後、俺はジャックを喰らう　いや恐らく俺が喰われる。よくて相打ちか。」

奴は“りるら”の意思に背いた、よって俺に殺すように命令した。

お前は何を言われた???

「別に???　いつもどおりに証拠隠滅」

「そうか。解ってると思うがお前は手を出すなよ。」



俺がどんなに殺されそうになってもな」

うん、僕は空気のようにだ。

まあそんな冗談は粉碎しといて。どうやらコルヴオは今日限りで死ぬらしい、さようなら。

とまあ別に僕はコルヴオが死のうが生きようがどうだっていいの  
だが、だが一つだけ僕はジャックと言う人間に興味があった。

だから戦場になるであろう放課後の学校に居るのである。

さあココからがこの物語の一番の盛り上がりになる訳だが。

俺は今現在放課後の渡り廊下で“奴”の出現を待っている。

武器となる武器は持ち合わせていないのだがその気になればガラスを割って破片を武器にも出来る。

しかしこちらが武器を持ったところでジャックに一撃を与える確率は大して変わりはないだろう。

となればあいつがジャックになる以前に強烈な一撃を与えて弱るのを待ちながら殺しあうしか無いだろう。

……これじゃまるで狩りだな。まあでもこちらには“一時停止”という保険があるのだが。

「  
~~~~~  
」

先ほどから聞こえていた鼻歌が少しずつ、近づいてくる。死が迫っている。

俺は廊下の隅に設置されている掃除用具入れの影に隠れて息を潜める。

ポケットから漆黒の手を抜き出す。

一気に心臓を潰す……そうならばこれだな……。

突き手をイメージし、手に力をこめる。

「キヤツ!!!」

「死ね!!!」

左手で『ヤナ』の首を抑えてそのまま壁に磔にする。

彼女の足が地面から数cmのところまでブラブラと揺れる。

彼女の口から小さな悲鳴と荒い呼吸音が聞こえる。

そして即座に右手を彼女の胸に突き刺した。

「ガフッ……」

彼女の口と胸から大量の鮮血がぶち撒かれて、呼吸音が聞こえなくなる。

余りにも大量の血が放出されてあたりは文字通り“血の海”と化した。

右手に激痛。

「……」

「チツ！……！」



今度は俺の右手が裂けて血が放出される。不味い……これは最悪だ……。

一瞬、その一瞬でどうなるのか想像する事は十分出来た。喰われる。

ら  
れ  
た

左  
手  
が  
食  
い  
千  
切

「ウグッ」

状況は圧倒的に不利になった。俺は二、三步下がって奴との間合いを取る。

地面には先ほどまで俺の腕だった固体がポツンと血の海の上を漂っている。切断だった。

俺がひるんだ途端に“ジャック”は俺の腕に噛み付いてそのまま引きちぎったのだ。

「ダミアンを殺したのはお前だな???.?」

「ギロツシ。ギロツロロ」



気持ち悪い。

「ダケど、それがどうした??？」

お前ノ知ってノ通り俺ハ『りるラ』を知らナイ。

屋上カラ突き落トシテ何が悪い」

「俺は別に何とも思わないさ。ただしりるらはお前を許さなかった。

だから死んでもらう」

「ギヒッ！！！！」

存在しナイ物に操らレタ愚か者メ」

ジャックはその場で四つん這いになる。

まるで獲物に一気に飛びかかろうとするライオンの如く。

四足獣、それがジャックのスタイル。

『ヤツザキ<sup>ヤ</sup>ジャック』と言われる程の強さの所以。

こいつは厄介な事になってきた。何せこちらには左腕が無い。

片腕でこいつを食い止めるのはほとんど不可能なお話だろう。

それに胸を突いた一撃も余り食らっていないのが奴の表情で解る。

まあでも。



は ー  
ヒ お  
キ 前  
サ は  
キ ヤ  
な ツ  
ん ザ  
だ キ  
よ で  
ー あ  
る  
以  
前  
に  
俺

ジャックが跳躍し、俺に向かって飛びついてきた。

咄嗟に体を丸めて掃除用具入れの後ろに転がり攻撃を避ける。

バリバリバリバリ！！！！

壁が破壊される音がした。まあ壁は悲惨な物だった。

ライオンに引っ掻かれたような傷跡が痛々しく残っていて、まるであの美術室のような感じだった。

あれを受けたら……間違いなく八つ裂きになっていただろう。

「グ  
ひー！！！！」

化け物は体を回転させて“前足”の先に有る包丁のより鋭利な爪を振りかぶる。

用具入れごと俺を破壊するつもりか。

しかしその考えは安易だ。

こいつはいつもこのように四足獣の構えを行なう為どうしても顔面が前に出てしまう。

つまりその顔面に……俺はもう一度突き手の形を作り      ジャツ  
クの右目にぶち込んだ。

同時に俺の左半身が潰された。

俺はそのまま吹き飛ばされて二階のガラスから外に我が身を放り投げだされた。

やられてから気がついた。右目を攻撃に行った俺は確実に隙があったはずだ。

ましてや左腕は無い以上、左半身にくる攻撃を止める術など無かった。

殺  
さ  
れ  
る

俺が落ちたのは2階、頭から落ちなければ死ぬ事は無いであろう  
高さ。

だがしかし俺の唯一の武器である右腕の骨が折れたらしくダラン  
とだらしなく垂れ下がっている。

立ち上がってフラフラと逃げる。逃げる……分が悪すぎる。

流石に相手もダメージが零とは言わない。

あいつは右目の視力を失っている、人間なら致命傷だろう。

でもあいつは人間の部類には入らない。

間違いなく獣や魔物なのだから、あいつから言わせて見れば『右目はない、でも左目』がある。

その程度の問題なのだ。

「ウゲツ……コリヤ本当に洒落になんねえ」



体が熱い、そして体中に液体を感じる。

当然俺は今左腕を失っているし左半身は奴に八つ裂きにされている。

ここまで自分に血が流れていたのかと思った。

段々と意識が朦朧としていくのが感じられる。

ふと足元ばかり見ていた顔を上げる。

気がつかなかった訳じゃないが目の前には四足獣が立ちふさがる。

「オイオいおい。まさか俺が獲物ヲ逃がスと思ツたの力???

冗談キツイゼ。人の眼球潰しトイて自分ダケ逃げようたってソウ  
はイかねエ」

「……本当は“裏技”なんて使いたくなかったけどよ……。

このまま死ぬんだっ たらお前ごと道連れってのも悪くない  
な!!!」

「ウグツ!?!」

“相手の神経を麻痺させ、動きを封じる”。完全に人殺し専用の異常体質。

こいつがどんなに化け物だったとしても人間なのに変わりはない。

こうしてしまえば上下関係だって無意味だ。

もうすぐ終わる……後は“あいつ”が何とかしてくれる。

終わる??? いやもう終わった。この物語はもう終わった、完結したのだ。

後はあとがきだけ、もうここからは合って無いようなお話。

「まあいいや……さてお前だけど」

「ギヒヒヒヒ……！　ダケドお前は俺ヲ殺す事ハできない……！

攻撃する手段がナイ……！」

「……“噛み殺してやるよ”」

コルヴォは口を明けてジャックの首元に噛み付いた。



「おやおや。こりゃまあ酷い有様で」

・



真夜中の学校。その学校に“異常”が広がる。

あたり一面血の海、そしてその海の上で漂う腕。

グラウンドには血まみれの銀髪。

そしてその隣に転がる生首。



第陸話 『後書ハッドエンド』

さて、そろそろ終末が近づいてきた頃だと私は予感する。

終末ってのもおかしな話だな。

始まっていないのに勝手に終わるわけもないんだからな、ハハハ。

さて私もそろそろ彼に本当のことを説明するでしょう。

何でこうなってしまったのかを……。

見えない物を見てしまっ  
ヤマアラシ。

全てを見通してしまっ  
スカイブルー。

彼女の忠実な僕しんせ  
のヒキサキ。

人間を呪ったネクロフォビア。

自分を異常体質者だと最後まで思った犠牲者。

彼女に『死なないカラス』と言われた記録者。



「……うんうん」



人気の無い空き教室。丁度真下に僕達の部室があるんだが部室には行きたくなかった。

それはなぜかと言うと僕が部室に入ればきつと昨日の戦争を思い出してしまうからだ。

ヤツザキとヒキサキ、両者相打ちのドローだった。

これで良かったのだろうか??? 僕はいまいち理解出来なかった。

彼だつて知っていたはずだ。

本当は“りるら”なんて人間は何処にだつて存在しないと云う事を。

じゃあ彼は空想の物のために命を使い果たしたのか???

僕だつて最初は信じられなかった。

でもエドウは僕にそう教えてくれた。

おかげでもう戻れなくなるまで壊れたが……。

『彼女は宗教みたいな物さ。』

気狂の前だけに現れる、別に異常体質者でなくても彼女を見る事はある。

例えばダミアンのような。

そして彼女を本当に人間だと思い込んだら彼のようにラリる。

精神が崩壊しちゃうんだよ。

君だって気づいてただろう???

初めから彼女が本当の存在か胡散臭さを感じてたんだろ???

あれあれ???

僕の教室にりるらなんて生徒居たかな???

「知ってましたよ、知ってて聞きました。」

じゃないと僕もあのまま行けばきつとラリツてた

心のどこかで彼女の存在を認めてしまっていたんだ。

ダミアンみたいに「

だから彼女に気に入られてしまったんだと思う。

ダミアンや僕は彼女を疑わなかった。

ラリる要素が他の人間達より多かったはずだ。

疑う??? いや認めていたんだ。

僕は自分の異常体質で人には見えない、見てはいけない物をずっと見てきていた。

だから知らないうちに自分の見ている物が全部現実であると錯覚していたのかもしれない。

「とうとう……僕とエドゥだけになっちゃったなあ」

僕は感慨深くそう呟いた。

そんな彼も今頃全生徒の記憶からハードディスクコルヴオとヤナを消しているんだらうな。

それもりるらの為???. それとも自分の為???

こんな事考えると吐きそうになる。

「気分悪い……もつする事も無いし教室に戻ろうかな」

僕はそつする事にして教室の扉を開く。

そこには僕より遥かに小さい男の子が僕を見上げていた。

「現在頭痛中……」



「  
×  
  
! ! !  
」

「  
解ったからどいてくれ  
」

「  
会  
い  
た  
か  
っ  
た  
よ  
ヤ  
ッ  
ク  
ン  
」

「……何デ???? ドウシテ君ガ????」

背の小さな少年の丁度その背後にもう一人、別の人間が立ちすくんでいた。

ああ、まずい。これは本当にまずい……。

僕は今何と表現してしまった????

……人間。僕は彼女を人間と認めてしまったと言っただろうか。

僕はその場に這い蹲る。そして頭を地面に何度も何度も打ち付ける。

目覚めろ!!! 早く正気に戻れ!!!

一人の男が正気に戻ろうと思って頭を地面に幾度も叩きつける。

完全に気狂だった。

「何してるのヤツクン???」  
解ってると思うけど私はそんな事じや消えないよ。

なんで今ここに立っているかと言つとヤツクンが私の存在をどこかで疑う事をしていないから」

「ヤメロ……辞める止めるやめる病めるヤメロ……！」

それ以上喋るな……！」

「ヤツクンも思ってたでしょ。」

理性なんて本当に邪魔な物だって、実際ダミアンはそうだったよ。



一気に体温が上がる。視界がフラフラと揺れてピントが合わない。

僕が彼女の事をどこかで疑っていないかと???

そんな訳あるか!!!

お前は存在しないんだ!!!

『空気』みたいなもんだ!!!

消える!!! さっさと消える。

死ね、殺してやろうか、お前の首に噛み付いて引き裂いてやろうか!!!

ギヒヒヒヒヒ……。

「ほらね。ヤックンは私のことを疑っていないところがあるよ。」

「空気みたいなもんで???? でも空気がってそいつらじゅつにあるよ。」



し  
た

頭  
の  
中  
で  
何  
か  
が  
切  
れ  
る  
音  
が

あれれ??? 僕は何をしているんだ????

認めればいいじゃないか、キヒヒヒ。楽になれよ。

そうさ、人間なんて皆壊れているんだ。

だけどソレを回りに見せたくないから表では隠しているんだ。

異常である事を隠す事……それはもはや気狂じゃないか。

グヒヒヒ

僕はゆゝつぐり発音じだ

「ラリ」

「ヤツクン聞こえないよ。もっと大きな声を出して」

「ラリルレロリラリラリルラリルラリルレロロリラリル  
ルレレロレロレリリリリ……！」

「  
おい小僧  
」

それは僕が気づくより先に起こっていた。

既に僕の血でまみれている顔が誰かに力強く蹴られた。

余りの衝撃で僕は我にかえった。僕は……ラリツタ。

そして目の前にいた少年もりるらも消えていた。

その代わりに別の人間が僕の隣にいた、彼が助けてくれたのか。

「貴方はまだここで倒れてもらっては困る。まだ話す事が出来ていません」

エドゥ。。。。

フラフラとしている僕にエドゥは手を差し出してくれる。

何とか立ち上がると彼は何も言わないまま歩き始めた。僕はその後ろをついていく。

ルファは一階下に下りて角を曲がって教室に入っていた……どうみても部室だ。

僕が少し後に部屋に入って部屋を眺める。啞然。

部屋中に何やら書いた紙が画鋲で貼り付けられていた。

「えっと……」

隙間が無いくらい。壁が一切見えていない。それは天井でも同じだった。

この光景を不気味と言わずに何とこのだろうか。

まるで教室に入った途端に異世界に来てしまったと思うほど。

僕は壁に貼り付けてあった紙の一枚を千切って眺める。



『第三章 呪いスカイブルー（外伝）』

屋上には私と彼しか居ない、他には誰も居ない。

そこに穏やかで生暖かい風が吹く。何かいやな事を予想させる。

思い出したかのように、今の風で何かを思いついたかのように  
デレシオンは発言する。

「そうそう。今日面白い人間を“診た”んだ。

ありやまるで死んでる、うん。死んでいたよ……まあ比喻だけど  
さ。

そいで面白いのはここから、あいつは人には見えない物が見えて  
る。

何でそんなのが解るかというかって???

“彼女”が教えてくれたから。そう、“りるら”

話し戻すぞ、その教えてもらったときに俺は思ったのさ。

本当にあいつの体質は“人に見えない物が見える”なのか???  
とな。

そもそもあいつは異常体質なのか??? いや俺がこう思うのも  
訳がある。

俺やあんた、他にもアリゴヤコルヴォだっけ???

俺が思うのはあいつ以外の体質って言うのは確かにそこにあるっ

てわかるじゃないか。

俺だったら占いを成功させれば、俺は異常体質者である事は証明できるし。

アリゴってのも相手の心を聞いた後に答え合わせしたらこれも証明できる。

じゃああいつはどうだ???

無いのさ。微塵も無い、証明なんて出来ない。皆無、絶無。

だから思ったのさ、あいつは自分が異常体質者であると思っ込んでるんじゃないのかってな。

それだけじゃないあいつが異常体質者ではないと思う理由は他にもっとある。

あいつを診てる時、頭の辺りからウィィインって音が聞こえたんだよ。

機械音だよ機械音。

そして気がついた。重要な事に気がついた。

人間が綺麗な眼球をしているわけ無いんだよ。

ありやまるでガラス??? まあ何しろアレは“本物”じゃない。

義眼さ。俺は見たことがあるよ、あれは医療用の義眼だ。

まあ俺が言いたいののは偽者の眼球の癖に異常体質者ってのはおかしいんじゃないかって事。

ハイ証明終了」』

な  
ん  
だ  
こ  
れ

な  
ん  
だ  
よ  
こ  
れ  
な  
ん  
だ  
よ  
こ  
れ  
な  
ん  
だ  
よ  
こ  
れ  
な  
ん  
だ  
よ  
こ  
れ。

僕が異常体質者じゃないって??? 何馬鹿なこと言ってるやがる。

僕は見えている確かに見えてるんだ。

お前達には見えない世界が見えているんだ!!!

考えてもみろ、お前らが常に見ているのは“表”だよ。

でも“表”があるのなら“裏”だって存在するだろうが!!!

僕はソレを見ているんだよ!!!

僕はソレを見てきたからこそここまで壊れてしまったんだよ!!!

「何だよこれ！！！！ 一体誰がこんな事を書いたんだよ！！！！」

「それを発言したのは書いてある通りデレスイオンさ。」

「ただどそれを物語にして描いたのはこの俺さ。」

「どうだ？？？？ 面白いか」

「そんなわけあるか！！！！ 人を勝手に物語の登場人物に出しやが  
つて！！！！」

僕はエドゥに近寄って首を掴みかかって壁に叩きつけた。

大きな音と共に部屋中が振動し、天井にぶら下がっている蛍光灯がユラユラと前後に揺れる。

エドゥは言ひ。



「私はノンフィクションの小説をある場所に執筆していたのさ。」

デレスイオンに未来を見てもらって、部室でお前が私のこの状況でさえも予め投稿していた。

まあ彼は殺されてしまって未来のことが解らなくなってしまう、まだ物語は完結していないのだがね。

でもその時点で私はもう完結することは出来なくなった。

私は後3分足らずでこの頭上の蛍光灯が落下して頭に直撃、死亡するんだよ」

彼は一体何のことを言っているのだろう。

今まで散々気狂だとか、りるらだとか、異常体質とかそういう専門の話をしておきながらここにきて小説のお話。

それに何だか未来が見えるだとか非現実的な話をして後3分で死ぬとか言い出した。

でも僕は知ってる。

彼はどつしよつもないほど正直なのだ。

「じゃあ避ければいいじゃないですか。」

右に1mずれたら死にませんし小説を執筆できるじゃないですか」

「そんな事したら反則じゃないか。小説では私が死ぬ所までで更新はストップしている。」

その後の物語をデレスイオンに聞こうと思ったのだが彼は死んでしまったんだ。

よって私はそれ以上は書けなかった。

そしてこの瞬間を迎えてしまった。

私の死後、当然もうあの小説は更新される事は無い。

でもそれももう心配ない。『死なない鳥』は死んで『ヤマアラシ』

「が後を継ぐ」

「僕が……小説を??？」

「そうさ……おっともう時間が無いな。」

後の事はありのままに小説に綴ってくれ。それが私の望みだ。

「さあ部屋から出て行くんだ。私は教室で一人で死ぬ事になってい  
る」

僕はそれ以上に何も聞かずにただ一言『さようなら』と言ってその場を後にした。

廊下に出ると同時に教室の中から何かが落下する音と同時に物体が重みに負けるグチャツと言う音が聞こえた。

死なない鳥。不死鳥は死んだ





第陸・伍話 『後書バッドエンド』

やあやあ、これはまだ不死鳥の言葉だ。

恐らくこれを書いている時はもう私はこの世界には居ないだろう。

さあどうだっただろうか。この気狂わされプログレッシブ。

私の二作目になるわけだが、随分と路線がそれたり言い回しが悪いような箇所があったかもしれないな。

この物語は単純に魔王を倒すとか学園に転校生が来たとか言う部類の話ではないのさ。

一つの話の中に物書きが次に人物にバトンを渡すと言うかなり奇妙で狂った話なのさ。

……まあ私はこういう結果になるとは全く予想していなかったんだがな。

別にデレシオンが生きていたらまだこの小説も更新出来たんだ。

まあいい、後は奴に任せて私はこれにてサヨウナラだ。

最後になぜ私がやお前を跡継ぎにしたのか教えてやろう。

お前は他の誰よりも狂っていた。

壊れて壊れてどうしようもないくらい歪んでいた。

それいいのさ。それで無くては不死鳥の小説は完結することは出来ない。

まあいくら狂ってるとはいえ、ラリってしまった時には流石にやり過ぎだとは思ってたがな。

さあ次のページは『ヤマアラシ』が作者だ。

最後にこの物語を終わらせてくれ。頼んだ。

えー、こんにちは不死鳥改め『ヤマアラシ』です。

驚いた。あの時僕は単なる登場人物であって主人公ではないと思  
っていた。

でもこの小説はどう見ても僕が主人公じゃないか……。

別にこれを書く必要は無いんだけどデレスイオンって奴は未来を見る事が出来るなら自分が殺される事も解っていたはずだ。

じゃあ何で回避しなかったんだと言うと多分不死鳥と同じ事を言うんだろうけど、それでもおかしい。

何がおかしいかって不死鳥が死んで『ヤマアラシ』が作者になる事を予め知っていたんではないだろうか???

ああなるほどな……だから僕が主人公なのか。

自分が死んだ後に僕が書きやすいように不死鳥がそうしたのか。

何だかそれは凄く腹が立つな。

まあいいや、今日からは不死鳥に変わってヤマアラシがこの小説を更新します。

小説は書いた事無いから初心者ですが宜しくお願いします。

……と言ってももう終わるんだけどね。

僕は何も無かったかのように自分の家に着いた。

これで気狂プログレッシ部で残ったのはもう僕一人だ。何だか僕が死神みたいだな。

結局のところそうなのかも知れない。

自分のことが一番難しい。自分というのを完全に理解するのは不可能なのだ。

その為、結局のところ僕は“本当は異常体質者ではないのだろう”と言う問いには答える事は出来ない。

半分諦めにも似たため息をついて僕は寝る事にした。

寝たら全部忘れてて何も無かったかのように人生が始まる……な  
んて考えている僕は随分と病的だろう。

病的と言っか気狂か。



•

•

.

眼が覚めると時計の針は6時40分を指していた。

二度寝しようとしたのだが、寝たら遅刻するに決まっているから辞めることにした。

食欲は無い。

しかし朝ごはんを食べないと頭が回らないという事を思い出したのだが結局食べる事をしなかった。

「今食べたら本当に吐きそうだな」

誰も居ない部屋に僕の声がぽつりと響く……独り言より寂しい物はない。

僕は歯を磨き終わると顔を洗って学生服に着替える。

「行ってきます」

今日は月曜日だから気が重いか普通の学生は思つかもしれないが僕はそうというのは余り思わない。

本当にどうでもいいと思っている。別に学校に行くのも行かないのもやる事は一緒だ。

それが教室でやるのか自室でやるのかそれだけの違い。

┌  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
└

僕は誰も居なくなった部屋の扉を閉めた。



最終話 『アトガキ』

こんにちはー、 『ヤマアラシ』 です。

うん。もう物語終わったしいいからとか言わないで。

何だかこの物語は非常に長かった感がありますよね。

みすみす。

僕が書いたのは2ページだけだからそんなに書いたって感じはし

ません><

どうやら不死鳥は普通の物語を書く事が出来ないみたいですねー。

まあ狂人だから仕方ないか……。

どうでしたか?? 『気狂わされプログレッシブ』

意味わからなーい><

って方、よく読んだらきつと解るはずです。

人間の頭は皆同じだそうです。

能力に気づいているか気づいていないかだけなんですよ。

んで内容を理解している方もきつとどこか見落としていたりしているかもしれませんよ。

それに気がつけばきつと貴方も変な感覚に陥るでしょう。

って不死鳥は言っていました(!!!)

はい、また後日に新しい小説を書きたいなと思っております。

その時はどうぞ宜しくお願いします。

貴方が閲覧してくれるのを心待ちにしております。

ちなみに名前は勿論『ヤマアラシ』で。

はてさて最後になりましたが。

この小説を見てくださった皆様。

本当にありがとうございました！！！

でわ



## 第0話 『1』挨拶』

こんにちは、ヤマアラシです。

最近ある人がここで小説を書いていたんですが、もうその人は書く事が出来なくなった為、彼の代わりに僕が更新する事にしました。

さてさて、実はこれが僕の“僕自身”の初めての物語になるわけですが中身自体は彼とは然程変わらないでしょう。

なぜなら彼と同じくらい僕は壊れてしまっているからです^^

しかし彼よりもすばらしい物が書けるとは限りません。

でも、物語がすべて素晴らしいとは限らない、けれど、これは僕の書く僕の中で一番身近で歪みきった大切でもない物語なのです。

大切なものって一番大事な時に大破して手に入らないんだよ。

そして手元から無くなって後の祭り、とか。

そうなるど誰も悲しむものだけれど、果たして彼はそういうものがあつたのでしょうか。

彼はどのような意思を持ってこの“僕”の物語を書いてくれたのか、僕には解りません。

しかし、彼の遺志を受け継いで書くわけではないので、やっぱり僕の自己満足なのです。

僕の書くものは全て身近で起こった彼の話のようではなく、想像上だったり、そうでなかったり。

「まあ、妄想の吐き散らしですね（笑）」

おっと、失礼しました。

前置きはこれくらい　じゃあ始めましょう。

『歪め時間の砂時計』





第？話 『怪人病棟』

僕は生まれたときから体が弱い。呼吸器がないと生きられない人間だった。

そんな僕だから僕の親は僕を捨ててどこかに行ってしまった。

僕はよく今まで生きてきた15年は暇では無かったのかと聞かれる。

だけど僕は『そんなことはない』と言う。

なぜか??? 僕はあることを思いついたのだ。

それは簡単な事だった。人間を観察をする事にしたのだ。

それも普通の人間じゃない……少し変わった人間。

だから僕は“精神病棟”にベットを移してもらった。

今日も新しい患者が精神病棟に運ばれてきた。

「こんにちは」

『こんにちはは、君は何て名前???』

「残念だけど名前は無いよ、僕が生まれたすぐに親が逃げちゃったからね。」

だから僕は患者番号563202って呼ばれてるんだ。

で君は何でココに着たんだ???

『僕はね。あることに気がついたんだよ』

彼は僕と同じくらいの歳だったし、とても精神が病んでいる人間だとは思えなかった。

僕は彼を狂っているとは思わなかったのだ。

それより彼は何を思いついたのだろうか???

『僕はね、全ての人間を“自由”にする方法を考えたのさ!!!!』

「自由にする方法??? それは一体どういう事だ???」

『それより今の君は人間が自由だと思っかい???

何の拘束も無く、何の鎖に縛られる事なく、何の隔たりも無く生きていく事が出来ていると……。

本心から思っている???

「……………」

『そう!!! 人間は自由ではない。この世界に生まれた瞬間から束縛されている。』

じゃあどうすれば人間は自由になれるか???

その前に果てしなく自由に近い存在は何か???

『これを知ることが全ての始まりだった』

彼はスラスラと台本を読むように言う。

まるで無邪気な子供のように笑いながら、その笑顔とは裏腹に言っている事はまるで哲学。

壊れている……今までであった人間よりずっと壊れている。

『それはな……』

液体  
体  
さ

↳



「えき……たい??？」

『そつち。例えばこの「チップを」の高さから落とす』

彼は自分の手に持っていたガラスのコップを落下させる。

落ちる……落ちる　そしてガラスが割れる。

ガラスが割れると当然中の水が辺りに撒き散らされる　水は自由になった。

『そう。水は自由なのさ、どんな形にもなる事が出来る。』

じゃあ人間はどうすれば水のように自由になることが出来るか？

「??」

「でも人間は70%は水だったはずだ」

『いい質問だ、とてもいい質問だ。』

じゃあこう考える事は出来ないだろうか???

水に意思を持った物が人間だと

こいつは何を言っているんだよ……

水〃人間???

人間〃水???

俺も水。彼も水。誰もが……水???

「いや……正確には水が“人間と言うコップに注がれた”のが人間  
だと言うべきか。」

だから君のその皮膚はコップなのさ。

「ここまでこればどうすれば人間が自由になれるのか解るか??」

「……」

人間がコップなのなら中の水を取ればいい。

それをぶちまければいい。さっきの水のように。

僕はそう思った。そう思ってしまった。

血液をぶちまければいい。

『そうさ。人間は本来は水だったんだから水に戻ればいい。』

水には意思がある。こういう実験を知らないか???

水に二つの紙を張る。

一つには『ありがとう』と書いた紙をもう一つには『死ね』と書いた紙を張る。

それを凍らせるんだ。

他に何もしない、そして二つの氷の結晶を顕微鏡で見るんだ。

『ありがとう』と書いた方には綺麗で美しい結晶が出来る。

しかし『死ぬ』と書いた方には黒くなってグチャグチャの結晶が出来る。

確かに水には意思があるのだ。だから水は人間と言う“服を着た”

自由になりたければ、それを脱げばいい。

全裸になった時、何ともいえない開放感になった事は無いか？  
？ それと同じさ『さ』

「でもそんな事をすれば……」

『どつなると言つんだ??? 言ったとおり水には意思がある。

人間と言う服を着ているんだ。それを脱ぐ事でどつにかなるわけが無い。

お前は服を脱ぐ時に何か起こるか???』



れこ  
そい  
うつ  
の  
話  
を  
聞  
い  
て  
い  
る  
と  
頭  
が  
割

『人間は気がついていないのさ。自分自身が水だった事に、自由であつたことに……。』

『僕だけが知っている。どうすればいいのか……どうすべきなのか』

「……」

『だから僕は今まで色んな人間を“自由”にしてきた。』

彼らは水となって、あるべき姿に戻ったんだよ。』

ああ、だから彼はここに着たのか。

彼にとってはその行為にはどんな罪も無いが他から見れば十分すぎる犯罪だろう。

だけど僕は……。

『水になればいい。皆水に戻ればいい。』

人間なんて邪魔くさいコップを潰して、自由気ままな液体に戻ればいいんだ。

僕はこの思想を何としても実行する』

「……………何で????」

『僕の中の水がそう言っている。他の人間の中に入った水たちは忘れてる。』

自分が水であったことを忘れていた。だから僕自身が解放してやれと言っている』

僕の中で何かが歪んだ。

僕は今まで色々な壊れた人間に出会ってきた……違う。

僕は壊れた人間にしか出会っていない

そんな僕が初めて……初めて　まともな人間に出会った。

彼はどこも壊れていないじゃないか。

彼は真実を口にしていただけじゃないか。

『固体は死んでも………意思は水に継がれ、自由になれる。』

それはもう死んだ事にはならない。

死んだと言うより“誕生”とも言える  
『

そうやって彼は一本の小瓶を差し出してきた。

『さあ思い出してみたい。』

今まで君が生きてきて自由だと思った事はあるか???



このまま“人間を着て”いて君は自由になれるのか???

呼吸器をつけて、一生をベットの上で終わらせるつもりか???

「……」

『僕なら君を自由に出来る。』

水になれば病気にもならないし、怪我もしない、死ぬ事もない。

『水は生態系の天辺なのさ』

僕は自分の爪に力を入れて皮膚に食い込ませる。

“服”は破れてそこから真紅の液体が流れる。

これが本当の

「これが……自由。」

『大丈夫。痛みは無い。』

君は服を脱ぐ時に痛みを感じる事はないだろうか???

次眼を覚ました時には君は自由さ』

7

7

眼を覚ませば僕は小瓶の中に居た。



第?話 『狂日記』(前書き)

これはとある狂人が残した歪んだ日記である。

第？話 『狂日記』

8月26日 (木) 天候：晴れ

『今日も暑い日が続く。』

夏というのが暑いのは当たり前なのだがここまで暑いと嫌になつてくる。



“我”は家にいてもする事が無いので暑さを我慢して外に出る事にした。

行くあても無いまま、ふと公園の前で立ち止まった。

何気ない景色の中に目を惹くものがあったのだ。

茶色の箱、少し小さめのダンボールである。我はそれに近寄ってみる。

解る。

この空气中を伝わって確かに届いてくるのだ、微笑ではあるが小さくて今にも途切れてしまいそうな呼吸音。

我はその中を覗いてみる。そこには黒色の物体が丸くなっていた。

犬だ。

犬は衰弱して、ピクリとも動かない。

もしかしたら死んでいるのかもしれない。

その時、犬の眼が右に左にと移動した。

こいつは生きていた、なぜだか解らないが少し感動した。

捨てられたんだろう。

きつとこいつは人間に捨てられてしまったんだろう。

こいつは何も解らないだろう。

当たり前か。

もし我が眼を覚ましたら知らない場所に居たら……そりゃもう何が何だか理解すら出来ないだろう。

我は犬を抱きかかえて家に戻った。

今日からお前の主人はこの私だ。

そうだ名前がいる。

よし君の名前は『フェニックス』だ。

君はフェニックス如く復活したのだ。

一度は死に掛けたのに復活を遂げた不死鳥なのだ。

残念だが我はアパートなのでフェニックスは押入れの中に入れた。

狭いだろうが我慢してくれ』

8月27日 (金) 天候：快晴

『朝の目覚めは最悪だった。』

隣の家であろつか、どこかから犬が吠える声がやかましかった。

仕方なく“私”は活動を開始する。

と言つても私はこの暑い中で外に出るなどと愚かな事はせずに家の中で読書をする。

最近では哲学の本を読んでいる、哲学とは面白い物だ。

少し視点を変えるだけで変わった考え方が出来るのだから。

それに比べて現代人はどうなってるんだ!!!

考える事もせずに知ろうともしない!!!

毎日を墮落しながら過ごしている!!!

……落ち着け落ち着け。

私らしくないじゃないか、第一私は ああもつづるさい!!!

犬がうるさい!!!

隣の住人だろうか??? 少し怒鳴りつけてやる!!!

私は隣の部屋の扉の前で扉を何度も何度もノックする。

……誰も出てこない。

その時、私の背後から声がした。

振り返るとそこには大家らしき人が立って、私を不思議そうな顔

で見ているのだった。

『何してるんですか???.?』

「この家の住人がッ!!!」

『  
そ  
こ  
は  
空  
き  
部  
屋  
で  
す  
よ  
？  
？  
？  
』

8月28日 (土) 天候：晴れ

☞ “俺”は今日、5時半ごろに起きた。

なぜかと言うと鼻が潰れるほどの激臭で眼を覚ましたからだ。

肉が腐った臭い。

死臭というのだろうか。

このまま部屋に居ても恐らく吐いてしまうので、早朝から俺は外出する事にした。

気晴らしに近所の公園の朝の散歩コースを歩いてみる。

この時間だというのに結構の人がランニングしたり歩いたりしていた。

うわっ！！！

何かに躓いてこけそうになってしまった。

自分の真後ろを見るとそこには茶色の箱。

ダンボールであろうか??? 俺は怒りに任せてそいつを蹴っ飛ばした。

うん。すこしすつきりした。

その後は書店で気になる本を買って家に戻った。

……臭いはまだ残っている。一体この臭いは何なんだ???

取り合えず鼻にティッシュを詰め込む、うん。これなら気にならない。

俺はそのまま眠りについた』



8月29日 (日) 天候：曇

☞ プハツ!!!

“僕”は余りの息苦しさには耐え切れずに眼を覚ました。

……本当に死にそうになった……。

今まで僕が殺してきた人間もこんな感じだったのだろうか？

???

別に同情なんてしない。

僕は殺す方より殺される方が悪いと思ってる。

いや、今まで僕は殺されてもいい人間しか殺していないから悪いとかどうとか思った事すらない。

顔に書いてあるんだ。

『殺してもいいですよ』って。

だから僕は新聞に書かれている無差別殺人鬼なんかじゃない。

ちゃんと人を見て殺している。

そんな事を考えながらなぜか鼻の中に詰まっていたティッシュを取って、包丁を握って外に出た。

そろそろ死体をゴミ埋立地に埋めるのも危険だから場所を変えようかな』



o t t h e t o i l e t p a n i c k i n g .  
c a m e h o t , a n d I t h r e w i t o u t  
s e t h e i n t e r i o r o f t h e b o d y b e  
d a l u m p i n o n e ' s t h r o a t b e c a u  
A t o n c e , t h e g a s t r i c j u i c e h a  
e r i o r o f n o s e a t t h e s a m e t i m e .  
V i c i o u s s m e l l o f p a r a l y z e i n t  
t h e r o o m w i t h o u t k n o w i n g b y s i  
g n t .  
When I awoke, I was lying in

8月30日 (月) 天候:雨

houldered" in that heavy room. It is

is vague. I think that it remembers. It

and a little different. It is it is

e thing certainly remember. The memory loss and I have th

I do not remember anything.

It doesn't understand.

om? Kidnaping? Why did you fall in such a ro

th put it away why. What on earth did it to be ex  
ist by you? I will have on ear

run away from something. It makes a quick change, and  
it flies out on the outside to

this room. My body says so. This room is dangerous. Leave

訊

A a : Please help someone : .

r . ' t The stop only in the ide eithe  
t s t r e p o n l y i n t h e i d e e i t h e  
e n b l e o f t h e b o d y d o e s n

c o n f i r m a t i o n .  
e n t e r i n g i n t h e r o o m a n d t h e  
H o w e v e r , I w a s n o t a b l e t o d o  
H o w e v e r , I w a s n o t a b l e t o d o

T h e m e m o r y i s l a c k e d .

w a s a n a r m o i r e .  
d o e s n ' t u n d e r s t a n d w h e t h e r i t  
w h a t t h e h e a v y t h i n g i s , a n d  
H o w e v e r , i t i s n o t u n d e r s t o o d

d o e s t o i t s a r m o i r e .  
n t e r s , a n d t h e n a t u r e . . . p u t : . .

(私は目覚めると見覚えの無い部屋に転がっていた。

同時に鼻の奥を麻痺させるほどの激臭。

途端に体の奥が熱くなつて胃液が込み上げて、私は慌ててそれを便器にぶちまけた。

『この部屋は危険だ!!! この部屋から離れろ!!!』私の体がそう言っている。

急いで着替えて、何かから逃げるように外に飛び出る。

一体何があったのだろうか??? 私は一体どうしてしまったのだろうか。

なぜあんな部屋で倒れていたのだろうか。

誘拐????

解らない。

何も覚えていない。

記憶喪失??? しかし私は確かに覚えている事がある。

覚えている??? いや少し違う。

覚えているような気がする。

漠然としているのだ。

私はあの部屋に“何か重い物を担ぎながら”入って、それを押入れの中に入れた……ような気がするのだ。

しかしその重い物が何なのか解らないし、押入れだったかも解らない。

記憶が欠如している。

だけど私は部屋に入って確かめるなんて出来なかった。

考えるだけでも体の震えが止まらない。

アア……誰か助けてくれ……)



8月31日 (火) 天候：雨

何これ???

俺の日記が誰かに書かれてる。

こいつら一体誰なんだよ!!!

一体どうやって俺の部屋に忍び込んだんだよ!!!

それに部屋をこんなに荒らしやがって!!!

……あれれ???

そう言えば俺は昨日何してたっけ???

昨日だけじゃない。

一昨日も……あれれ???

俺って最近生きてたっけ???

思い出せない……。

一体どうなってるんだよ……。

疲れた……取りあえず寝よう。

起きたら今までの事が全部夢だったかもしれない。

布団は何処だっけ???

あ。押入れか。



8

月

32

日

天候：

ウヒヒヒヒヒ

(血)

押入れの中に死体が入ってた。

こいつら面白えー！。

喋りかけても何も返してこねえの。

殴っても喋らない、マジうけるしギャハハハハハハハハ。

日記開いた。

俺が  
いっ  
ぱい  
いる

沢山沢山いる。





第?話 『狂日記』(後書き)

以上。とある狂人の歪んだ日記でした。

第?話 『対談』

Q・こんにちは、こういった機会は中々無いので僕は貴方と対談できて非常に良かったです。

A・そうですね。僕みたいなのでいいならいくらでも取材してください。



Q . でわ早速ですが、貴方は誰ですか???

A . 私は赤ちゃんです。ついさっき母体から取り出されたばかりです。

Q . それはそれは、おめでとつごいませう。

A . おやおや、貴方は嫌味な人ですね。本当におめでとつ等等と  
思っていますか???

Q . おめでたいじゃないですか。何か拙いことを言いましたか  
???

A . ……その前に一つ貴方に聞きたいことがあります

Q . なんですか???

A . 『この世に生まれてきたのは本当に幸せ』なんでしょうか  
???

Q . 随分と難しい事を仰いますね……そうですね。少なくとも  
不幸ではないと思っていますよ。

A . じゃあ質問を変えましょう。

『貴方が死んだ時にもう一度、この世界に生まれることが出来る』  
ならどうしますか???

Q・うん……それは難しい質問ですね……多分そのまま死ぬでしょうね。

A・それはなぜでしょうか???

Q・生きなければ幸せだとか不幸せだとかそういうのは一切無くなるから……ですかね???

A・その通りです。全く持ってその通りです。

つまり生きなければ何かに苦しむ事は無いんですよ。

勿論生きなかつたら幸せを感じることは無い。

でもそれを不幸せだなと思う事も無い。

人間として始まってしまったからが故の悩みと言えますね。

だから僕はこの世に誕生してしまったのは非常に残念な事だなど

思ひますよ。

Q ・ (難しい事を言う赤子だな……)

Q . じゃあこの世に生まれることは失敗だといいたいんですか  
???

A . そつですよ。よくこつという事を聞きませんか???

『お前達は3億分の1に勝った勝ち組なんだ。生まれながらにして  
勝ったんだ』

これは受精する確立です。

こう見れば、まるで自分はさも勝ったかのように思うかもしれないかもしれませんが、ぜんぜんぜん違いますよ。

Q ・ 違つんですか???

A ・ 違いますよ。ちよつと視点を変えれば真逆の解釈だって出来ます。

例えば、こう考える事は出来ませんか???

『本当に勝つたのは2・99999・9999の方、負けたのは1の方』

Q ・ 随分と変な考え方をしますね。

A ・ そつでしようか??? 僕はさっき言いましたよね。

この世界に生れ落ちてしまうのは非常に残念だと……。

だからこの世界に誕生するのが“負け”。

この世界に誕生しないのが“勝ち”

貴方はそう思いませんか???

Q・ そういう考え方もあるとは思う程度です。

A・ じゃあ少し眼を閉じましょう。

もし貴方がこの世界に生きていなければ……想像してみてください  
い。

一体この“意識”はどうなるのでしょうか???

夢を見続けるように映像を見続けるのでしょうか?? 違います。

夢というのは脳の活動、脳が無ければ夢は見ません。

じゃあ一体この意識はどうなるのか。

答えは『無』です。

何も無い。本当の意味で何も無い。

意識が無いんだから迷う事も無いし悩む事もあります。

そもそも自分が何だったかもわからない。とにかく何も無い……。

Q . . . ? ? ? ?

A . . . すみません。少し混乱してしまっただようですね。

まあ生きていなければ本当に何も無かったと思っていてください。

Q . . . (こいつ頭狂ってる)





Q・結局貴方は何が言いたいんですか???

回りくどくてよく解らない箇所があります。

A・そうですね。それはすみません。

じゃあ直球で行きます。

『死にましょ』

Q・は???

A・死ぬんだよ

生きているのが間違いなら死ねばいいじゃないか。

Q . . . . .。

A . 死んだら何もなくなるんだよ。

何も迷う事はないし何も怖がらないですむ。

Q . . . . .。

A . 死んだら何も無くなる。

痛みも絶望も怒りも殺意も……感情という感情が無くなる。

結局ね。生きてきてしまった以上のリスクを背負う必要があるんだよ。

それから解き放たれたいなら死ねばいい。

Q · 默れ糞餓鬼。

A ・ 落ち着きましようよ。 深呼吸深呼吸。

Q ・ ……おーけー……。

A ・ きつとね。人間なんて皆考えてる事は同じなんだよ。

どこかで絶対に死ぬ事を考えている、当たり前さ。

死ねば何からも逃げる事が出来る。

Q ・ どういう事???

A ・ 死ねばさ、悩みとか失敗とか絶望とかそういう物から一気に逃げれるんだよ。

なんだろうね。どんな物からも逃げる方法      それが死なんだと思  
うよ。

Q ・ ……。

A ・ ……。

Q . . . . .。

A . . . . . そうだ。ここで特別ゲストの登場です。

Q . . . . . 特別ゲスト???

A . . . . . おーい“死体”くん。





第?・?話 『対談』

Q ・ 貴方は誰ですか???

A ・ こんにちは、死体です。宜しくお願いします。

Q ・ 行き成り本題に入りたいんですけどよろしいですか???

A ・ どうぞ。

Q ・ 実際に死んでみてどうでした???

A ・ そうだね。心地よかったかな。

自分のあるべき姿に戻っていくというか。

段々と死に近づいていくのが凄く気持ちよかった。

Q ・ ……。

A ・ 不思議だ。欲が無いんだよ。何にも入らない。

だから逆に、全ての物が手に入った気分……。満ち足りてる。

Q . . . . .。

A . それから何も怖くないんだ。全てを失ったからこれ以上失う物がない。

将来とか試験とか追い立てられる物が一切無い。

名誉とかお金とか安息とか満足感とかさ。

生きている時にそれらを手にする事が生きる目的だと思ってた。

でも生きている間はそんな物は手に入らなかったよ。

死んだ後に全部手に入った気分になった。

Q . . . . .。

A ・ 人間はみんな死を遠ざけようとするけど。

死の中に本当に望んでいる物があるのかもしれないな。

Q ・ ……。

A ・ ……。

Q ・ ……。

A ・ ……。

Q ・ ……どうかしました???





A・思い出すだけでもおぞましい!!!

こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい!!!

A・なくなるんだ全部なくなるんだ全てなくなる何もかもなくなる。

何だろつ。概念とか記憶とか感情とか。

Q・さっき満ち足りてるって言ったじゃん。

A・いったけどーいったけどーいったけどーいったけどー

Q ・ 何でそんな気持ち変わっちゃたのか説明してよ。意味解らない。

A ・ なくなるんだ。

Q ・ 失うって事か???

A ・ 違う!!! 失う事さえ出来なくなるの!!!

Q ・ 零になるってこと???

A ・ 違う!!! 零になんてならない!!!



Q・じゃあなんなのさ

A・なんにもならない

Q・なんにもならないの???

A・確かに死ぬと、辛い事は消える。満ち足りる。  
でもそれが凄く味気ない。

辛いつてのは、幸せの反対。両方あって始めての感覚だ。  
死ぬと、辛くも幸せでもない。どっちでもない。

解るか??? この感覚がずっと続くの……ずっと……ずっと

Q ・ 味の無くなったガムを噛み続けるみたいなの???

A ・ ああ……。

どれが幸せでどれが不幸なのか解らなくなるんだ。

これが不幸なのかあれが幸せなのか……どれがどれでどれがどうなのか。

Q ・ 意味わかんない。



A . だからさ。不幸でも幸せでもない、真ん中がずっと続くの。そしたら不幸とか幸せだとかって言う概念が解らなくなっていくんだ。

Q . 解らない???

A . だからもう幸せの度合いを表現する事が出来なくなるんだよ。

Q . ……。

A . じゃあ聞くけど君はどうやって幸せを定義する???

君が幸せを感じるのはなぜだ???

幸せを感じるのは不幸を知っているからさ

でも二つとも無い。だから区別できないんだよ。区別する必要が

無いんだ。

区別する必要がないと……それはなくなってしまつう。

Q . . . . .意味不。

A . . . . .じゃあ仮に人類が全員女だとしよう。

そうしたら男と女って言う概念は必要ある???

ないんだ。すると男女って言う概念は存在しなくなるんだ。

そう……死ぬと同じようにして色んな物が消えていく。

音も……何もかも消えちゃう……時間も……記憶さえも……味覚も……色も……。

これが凄く怖いんだ。

……怖いという概念も消えるんだ。怖いのに怖がる事も出来ないんだよ。

Q ・ でも生きるのも辛いよ。

A ・ ……もしかしたらさ。

人間て言うのは生きているときには死にたいし死んでいるときには生きたいんじゃないかな。

それがずっと繰り返されていくんだ……永遠に……ずっとずっと

Q ・ 君は今どう思ってるの。

A ・ 生きたい。

Q ・ 即答かよ。

A  
・

死ぬのも生きるのもどっちも嫌なのかもね。

A・よく考えてみれば生きているときと死んでいる時。どちらも嫌な事がある。

でも良いこともある。どっちも大差ないんじゃないのかな。

Q・へー。

A・生きたいと思って生まれてきて……死にたいと思って死ん



でいく。

前の記憶が無いから解らないけど、本当はそうやって無意味にずっとぐるぐるぐる回る回ってるんじゃないかな。

Q ・ 死と生と両方を経験したあんたが言うならそうなのかな。

A ・ それなら人間って一体何なんだろうね。

死んだり生きたり死んだり生きたり死んだり生きたり死んだり生きたり死んだり生きたり。

それならさ。君は生きてなよ。

Q ・ えー……だって生きてるのだって辛いし。

A ・ 死ぬのだって相当辛いさ。

それなら生きてる中でどう楽しむか考えなよ。

そうやって生きていくしかないんだよ。

Q . . . . . そうか . . . . . なら僕は . . . . .

A . . . . . ああ。そろそろ疲れた。

. . . . . じゃあ . . . . . 辛いかもしれんが . . . . . 生きて . . . . .  
. . . . . | . . . . .

Q . . . . . あーあ。消えちゃった。

まあいいや。

Q . . . . . ありがとう。



“人間は皆平等ではない”

俺は物心ついた時から今に至るまでずっとそう思っていたし、これからもずっとそう思っているだろう。

人間は人間で生まれた時点で何かしらの上下関係が付きまとうのだ。

金持ちか貧乏か。

健康か病気か。

平和な国か戦時中の国か。

王様か奴隷か。

正常か異常か。

喰う側か喰われる側か。

もとい、生きているか死んでいるか

確かに人間は平等じゃない。

人間社会という物が作られた、その時に自分達を苦しめる側か苦しめられる側に区別したのだ。

さあ今一度考えて欲しい。

貴方に問おう 『貴方は苦しめられる側ですか???'』

「ふうん」

とまあこんな下らない話は置いて俺は今小さな一軒の店先の前で一枚の張り紙を眺めている。

一体いつから張っていたんだと突っ込みたくなるほど黄ばんでいて、シミがついている。

それと同じぐらいにこの店はボロボロで所々の壁に穴が開いていたり、壁の木が腐って露出している場所があったりする。

とにかく商店には間違いないのだがこれじゃあ誰も入りたくないであろう。

勿論俺だってこんな商店には入りたくもないし興味だって無い。

だけどこの一枚の汚い張り紙の事が凄く気になっていたりする。

『人生売ります』

「……………」

俺が今まで生きていた中で人生を売るって言うのは初めて聞いたし、まさか人生が売り物になるなんて思っても見なかった。

おおかた人生を旨く行かせるマニュアル本の売り文句だと思うが見る限り本屋ではないと思う。

本屋ではないと思うと言ったのは店の中がスリガラスでこちらから見えないのだ。



「人生か……」

なんで俺がこの張り紙に興味があるのかはきつと俺の考えがずつと脳裏に焼きついて離れないからなのだろう。

何しろ俺は今までずっと社会の底辺を這いつくばって生きてきた、別に俺は悪くない。

悪いのは俺の両親。

俺は望まれない子供だったのだろう、生まれてすぐに捨てられた。

そして拾われたのがとある一家なのだが俺のことを虫けらのように扱った。

衣食住を与えてもらう代わりに奴隷のような扱いを受けていたのだ。

だから逃げてきた。

逃げて逃げて逃げて……やっとここまでたどり着いた。

勝ったと思った、俺の人生はやっと始まる　そう思った。

「失礼します」

気がつけば店の扉を開いていた。

異様な空気を感じた。この空間だけ何か違った物を感じたのだ。

店の中と外とは明らかに違う何か……。

もしかしたらここだけ重力の影響を受けないだとか誰もが超能力を使えるだとかそもそもここは日常から切り離された空間だとか。

そう言われても「ああ。だからか」と納得できるような不思議な空気に包まれていた。

あれあれ???

ここは確か商店だったはずだ。なのに品物と言う品物は全く無かった、置かれていた形跡と言うのだろうか??? それは確かにあ

るのだ。

そこいらの地面にダンボールの箱が落ちていたり、値札が落ちていたり。

だけど商品は無かった。

ここにあるのはこの奇妙な空気と僕　そして目の前に座っている店の店主らしき人。

「じいじい」

「……あの張り紙を見たんでけd……」

「ああ……“人生”を買いにきたのかい」

人生を……買う……。

こいつは確かにそう言った。じゃあ何か???

俺はどっかの人間の人生を買う事が出来るって事か???

それってもしかして今までの自分の人生を無かった事に出来るっ

てことか???

もしそんな事が出来たなら

そんな事が許されるのなら。

「人生を……買う??？」

「そうさ。世の中では常に人の人生は売り買いがされている。

例えば奴隷、貧乏人が自分を売って金持ちがそれを買う。

よく考えればこれは人生の売り買いだとは考えられないかい???

つまり人間として生まれてきたなら人生を売る事も買う事も出来るのね」

ああ、成る程。

つまりここは奴隷市場だと言いたいのだろうか。

つまらない。

俺が買いたいのは本当の人生だ。本当の意味での人生を買いたい。



「具体的に……何が売っているのですか??？」

「本当の意味での人生ですよ。言うなれば誰かの売った人生を買い出す事が出来る。」

つまり、その人生を売った人間と入れ替わる事が出来るといっても過言ではありません」

これだ。これが俺が求めていた人生の売買。

こんな人生を終わらせた。

否　　人生を始めた。

社会の底辺を這いつくばっていた俺にとってどうやっても苦しめる側の人間になる事は出来ない。

人間社会とヒエラルキーの前では成り上がる事など出来ない。

「買います」

「はい?..?」

「人生買います」

命を捨てる。それが人生をやり直すリスク。

“俺”と言う存在を抹消し、新しい存在へと俺は進化を遂げる。

これで良かったんだ。これで俺はやっと生まれることが出来るんだ。

俺は 俺は

飛んだ。

俺は誕生した。

それも苦しめる側の人間として、この世界に立っていた。

越える事の出来ない壁を……越えたのだ。

具体的に言えば、とある会社の社長として偉そうに座っていた。

偉いのだから当たり前か。

歳は20代後半だろうか。

容姿も良くて、権力もある、地位さえも持っている。完璧な人間だった。

だけど何か違和感が残っていた。

そう、そんな完璧な人間がなぜ人生を売ったのか俺には全く理解出来なかったからだ。

まあいいや、俺は勝ち組なのだから。

~~~~~

テーブルの上の携帯電話が鳴り響く。現在PM10時高級マンションの最上階自宅。

こんな時間に誰だろうか???

「もしもし」

『もしもし。俺ですよ　ひすよ』



そんな名前に聞き覚えは無かった。

それもそうだ。

記憶自体は人生を買う前の自分の物だし、こっちの人生を始めて  
まだ一週間も経っていない。

さて……これは困った。

「ああ、何のようだ???.?」

『何のようだとはい酷いじゃないか。あれから具合どじつだ???.?』

「……」

あれからとは一体何時の事なのだろうか???

とにかく当たり障りの無い返答をすることにする。

「あー、もう大丈夫だ」

『そうか。そりゃよかった。』

「ただ初め聞いたときは驚いたよ」

「そっか？？」

『そりゃそっさ。お前みたいに完璧な人間が

うわ　　ま　　さ　　か　　「死　　に　　た　　い　　」  
　　け　　無　　い　　と　　思　　っ　　た　　か　　ら　　さ　　ん　　て　　言  
　　』

絶句。俺だつて驚いた。

完成しきつた人間が自殺志願の感情を持っているなんて絶対にありえないと思っていたから。

そしてその男は実行した。人生を売るという方法を用いて。

「あ……あ。あの時疲れていてさ……俺なんて言ってた？？」

「んー。まあ簡単に言えば

(子供の頃は蟻を見て人間に生まれて良かったなと思った。

でも高校の時には働き蟻にはなりたくないと思った。

だから俺は必死に勉強した。そして今の地位に立つことが出来た。

でも先日公園に行った時に蟻を見てこう思った。

俺も蟻に生まれたらどれ程良かっただろうかと。

人間に生まれたのはきつと間違いだ、今だから言える。

今なら子供の頃の俺がいかにか世界を知らなかったか解る。

だから無くなりたい。人間でありたくない)

みたいな???

」  
……  
「

あれ???

何で同感しちゃってるの???



「そうか……そんな事を言ってたのか」

『俺は最初気でも狂ったのかと思ったよ。まあ今元気ならいいや。またな』

ブチッ・・・ツーツー

俺は携帯をソファに投げて深呼吸をする。

こいつは何で蟻になりたいと思ったのだろうか???

蟻になっても苦しめられるだけ、何かに縛られてもがき苦しむだけ。

だれどこいつはソレを選んだ。

「フリー……」

確かに人間に生まれたのは間違いだったかもしれない。

人間社会という物がある限り。

きっと人間達はそれを心のどこかでヒッソリと思っているのだ。

そして何かきっかけがあるとソレは俺たちの目の前に姿を現す。

こいつはそれに遭遇したのだろう。

「……」

その思想は誰もが平等。つまり誰にだって自殺する可能性だってある。

あれ???? それなら社会って平等なんじゃねえの????

人間で生まれた時点で必ず終着点がある。それが死ぬ事。

死は誰もが平等に所持している。それは当たり前のこと。

後はタイミング。何かのきっかけでソレと眼が合ってしまったら……。

「  
.....  
イオカ  
」

!

これは高級マンションの最上階です。



俺は飛んだ。



はちがつにじゅうにち 1ねん3くみ1ばん

ぼくはことしのなつやすみに、ぼくのおじいちゃんがしんじやい  
ました。

すごくかなしかったです。

だからぼくはことしのなつやすみのじゅっけんきゅうは『死』に

ついて、かんがえようとおもいます。

そもそも、しぬとは「ごものぼくには、よくわからないです。

『死<sup>し</sup>とは、命がなくなること・なくなった状態、生命活動が止まること・止まった状態、あるいは滅ぶこと・滅んだ状態のこと』

ずかんからぬきだしました。むずかしい、かんじをかいたので、  
てがつかれました。

むずかしいので、こどものぼくにはよくわからないので、おとう  
さんにきいてみました。

おとうさんは

「は難しい事を聞くね。うーん……。

死ぬとは人間として機能しない事だよ。

「けど死んだとしてもその人を覚えてくれている人が居たら死んだ事にはならないんだよ。」

「死んでも直生き続けることが出来る。……ははは、まだ には  
早すぎたかな」

といました。

でじやう、おじいちゃんはんはじんだけでいましてるからです。

だげどぼくは

しんだのにきているっておかしいとおもいます。

きょうぼくは、ともだちといっしょにじいさんであそんでいるよ





とおもいました。

ぼくは、しをみる事ができた、きがしました。

だからぼくは、『しをもってかえって』たからばこにいれておきました。

あしたにどうなっているかたのしみです。



はちがつじゅうさんにち

ぼくはたからばこに、いろんな『し』をあつめました。

なんだかどれもすごくきれいだなとおもいます。

まっくろな、からすのみひらいため。

しおれてしまった、ひまわり。

すいぶんをうしなって、うごくことをわすれたきんぎよ。

どれもすぐきれいです。どんなほうせきよりも、かがやいてみえます。

ぼくは、しがとてもうつくしいものだとわかりました。

だげどにんげんたちは、しはとてもわるいものだとかんがえています。

それがあたりまえ、それがじょーしきであるかのようにおもっています。

ぼくみたいに、しをかんがえるべきだとおもいます。

まずおかあさんに、はなしてみました。

僕「ねえねえおかあさん」

おかあさん「なあに??？」

僕「これを見て、すごくきれいでしょ!?!」

このぐったりしためとか、うごくことをわすれたにくたいだとか、すごくきれいとおもうでしょ!?!」

おかあさん「(ひめい)」

ぼくはおかさんに、つねられてびょういんにいきました。

びょういんは、いつもぼくが、たいちょうをくずしたとき、いくところをはちがつばしよでした。

•

•

はちがつじゅうろくにち

ぼくは、いきているのはきたないとおもいます。

いきているものは、あのためにはこのなかにいるものたちより、きたないです。

おじいちゃんをよく、「にんげんはきたないせいぶつだ」「とくちぐせのようになっています。

ぼくはどうしてにんげんがきたないのか、ききました。



おじいちゃん「人間達は自分の為ならどんな事でもやるんだ。私は知ってる。

裏切り、憎しみ、僻み……感情がある限り人間達はずっと汚れて  
いる……感情が無くなれば……感情が無くなれば……」

ぼく「じゃあどうしたらいいの??」

おじいちゃん「死ねばいいんだよ」

「さあ、さあ、さあ。」



おじいちゃん「死ねばどうなると思っつ??..?

もし生命としての期限が切れた時、そこはどんな世界が広がると  
思っつ??..?

ぼく「??..?

おじいちゃん「そこには何も広がらないし何も残らない。ただの虚  
無の空間だ」

ぼく「??..?

おじいちゃん「感情さえも……解き放たれるんだ」

「いったい、おじいちゃんがなにをいつているのか。」

「ぼくにはまったく、りかいできませんでした。」

「ただつぎのひ。おじいちゃんはてんじょうから、ぶらさがっていませんでした。」

「ぼくはこのとき、はじめて「し」をみました。」

「それはいままでみた。どんなけしきよりも、すごくきれいだとお

もいました。

おじいちゃんがいいたいことはわかりませんが、ぼくは

・

イマ  
シ      み  
            ン  
た ナ  
            死  
            ネ  
            バ  
            い  
            イ  
            と  
            お  
            も

.



はちがつじゅうきゅうじち

きょうはあつじにきがつかました。

いきているのは、きたない。

しんでいるのは、きれい。

ぼくはしんでいき、きれいになる。

そのしゅんかんがいったい、どういうものか、みてみたいです。

いきているねごさんを、つかまえようとおもいました。

だけど、あしがはやいし、すぐやねにのぼるのであきらめていえにかえりました。

ぼくはおもいつきました。

はちがつにじゅうにち

ヒロシくんが、ゆくえふめいになったらしいです。

ヒロシくんのおかあさんがぼくに、なにかしらないかとききました。

ぼくはしりませんといいました。

うそをつきました。

ごめんね、ヒロシくん。

く

く  
ゴ  
メ  
ン  
ん

ネ  
。

ヒ

ろ

シ



はちがつさんじゅういちにち

ぼくのたからばこは、おおきくなりました。

たからがふえて、ほんとうによかったです。

でもおかあさんや、おとうさんがいなくなってしまったので、ぼくはひとりになりました。

ひとりはこわいです。

だけど、かなしくありません。

おとうさんや、おかあさん。

ママのママのママ。

きんじょのおじさんや、ケンジくん。

ケンジくんのママやケンジくんのおねえさん。

みんなすぐきねいです。

いきていたときよりずっとずっときねいです。

せんせいも、このしゃしんをみて、きれいだとおもいますよね。

めとか、はなとか、ちとか、みみとか、うでとか、ちとか、つめ  
とか、ちとか、はとか、ちとか、ちとか、ちとか、ちとか、ちとか、ちとか。

すごくきれいですよね。



> かんそつ <

「このなつちすみは、とてもおもしろいことがわかって、すくすく  
かっただす。」

これからも、もっとしらべていきたいとおもいます。

はやくみんなたちとあって、おしゃべり“とか”したいです。

はやくあいたいです。  
せんせい。

## 第？話 『壁』

夏休み最終日。

私は終わらない宿題の山と格闘していた。

時刻はAM 8：00を過ぎた頃。

今頃他の子たちは最後の日に集まって楽しくワイワイやってるんだろうな。

去年の夏もそうだった、最初の目標では7月中に全ての課題を終

わらせるつもりだったのだ。

だが私は宿題の山には目もくれずひたすら遊び続けた。うん、墮落三昧。

私の悪い癖だ……重度の刹那主義者。

しかも私は親が居ないのでそれを叱ってくれる人も居ない。

まさに遊ぶ事だけに適した環境。

「ふうー」

私は大きく伸びをして机の上に置いていたカップの中のコーヒーを流し込む。

この苦さがいい。何もかも忘れさせてくれるような匂い、破滅的なまでの漆黒の色。

外から夏の暑さとともに朝日が差し込んでくる。

もう朝なのか……徹夜してるのにも関わらず山は崩れない。

私はその感情をぶつけるようにカーテンを勢い過ぎて引いた。

少しずつ数を減らしたセミの声が大きくなる。

「……あれ??？」

そこで 異変に気がついた。

私は毎朝、カーテンを引いて朝日を浴びて目覚める習慣がある。

私は毎朝ここからの景色を見ているのだ。

となるとこれは面倒な事になってきた……非常にやっかいな一日が始まる予感がした。

そこに見えていたのは灰色の“壁”。

窓を開けて体を突き出して左右を見渡す。

「……………え????」



どつやら壁は私の家を包囲するよつに立っている。

一番高いところはこの家の屋根より高いところにある。

私は勉強をする事を忘れて外に出ると、いくら残暑と言えど外は嫌な温度に包まれていた。

そしてそこには灰色の壁が立ちはだかっていた。



「うわぁ……」

包囲と言う言葉以上にぴったりの言葉が見つからなかった。

私の家は灰色の壁に包囲されていた。徹底的に、逃げ出す隙もなく囲まれていた。

どう考えても誰かの悪戯と言うわけではなさそうだ。

そもそも何人の人間が集まれば一夜でこれだけの壁を築き上げる事が出来るのだろうか。

そしてそこには一体どんな意味があるのだろうか???

「それにしても暑いなあ……」

暑かった。取りあえず家の中に入ってこれから一体どうすればいいか考えよう。

コップ一杯の水を飲む、少し落ち着いた。取りあえず今の状況を整理しよう。

壁は家を囲むようにある。

高さは10mと言った所か、私の家にそんなに高い脚立は無いので上からの脱出は不可能。

そう言えば倉庫にスコップがあったか。

しかし一体地下にも壁が続いていた場合、どこまで掘ればいいのか全く分からない。

となると誰かに助けを求めるしかない。私は取りあえず警察に電話してみた。

『はいもしもし、警察署です』

「あ、もしも実は今家が壁に包囲されていて」

『……はい??? 壁に包囲されているんですか???』

「はい」

『……住所を教えてください』

「~~~~~です。出来れば急いでください」

私はゆっくり受話器を置いた。

こんな状況なのによくもここまで落ち着いていられる物だ。

何だか以前にもこういう事があったような……。

いや壁が現れたのは初めてなのだが。

なんだろう??? なにか引つかかる。

取りあえずやれる事はやった、私は再び宿題に取り掛かろうと勉強机に座った。

暫く勉強していると電話が鳴る。





「はいもしもし」

『 警察署です。えー、貴方の住所は~~~~~  
で間違いないですか???.?』

「はい。その通りですけど」

『……今そこに居るんですけどね……』

『どう見ても空き地なんですよ』

「……は????」

『いや、だからですね。貴方の言った通りの住所には空き地しかないんですよ。』

『もし悪戯なら少し度が過ぎてませんか????』

私はゆっくりと受話器を置いた。

なぜだ……??？ 私のいるこの場所が空き地だ??？？

違う。違う違う違う違う違う……!!!!

私はここに居る!!!! 私と言う存在はここに居る!!!!



何という理不尽。

もしかしたら私はこの時、18年の人生の中で始めて死を意識したのかもしれない。

昨日までは何気ない一日だった。

何気ない一日過ぎたのかもしれない何か面白い事起きないかなくらい思っていた。

「……………」

納得できない。

嫌なのはこの感覚。理解不能なままに、わけのわからないまま死ぬ事が嫌なのだ。

何としても抵抗してやりたい。死ぬなら、死に納得して死にたい。

それはつまり、この状況に答えを出すという事。

訳のわからないままじゃ嫌だ。種明かしして欲しい。

「キモチワルイ」

一体どの位時間が経っただろう。

それにしても心臓の音がなんと高く聞こえるのだろう。

今まで意識した事が無かっただけか。

死を意識した途端に心臓の音がドクンドクンと一定のリズムを刻む。

どうでもいいことばかり考えてしまう。

今まで積み上げてきた物とか将来なりたかった物だとか今となつては何の意味も持たない物。

そういう意味では私は世界から切り離されたのだ。

そして壁に閉じ込められた。

他人は外の世界で自由に生きている。

しかし自分には許されない。世界がじわじわ狭くなっていく。



あ  
⋮  
⋮  
⋮

「!」

瞬間、電光が頭を走る。

思い出した。

そつだ。壁を意識した気持ちは前にも味わった事があった。

子供の頃、世界は無限に広いと感じていた。

将来なんだつて出来るんだつて思っていたし、何処にだつていけると信じて疑わなかった。

しかし大人になるにつれ、それがどうやら違っていたのに気がついた。

実際そんなに思うようには行かないのだ。

世界に限界を感じ始めた。

どうやらそこに“何か”あるのだ。

自分と世界の間を遮る何かがある。越えられない壁が。

そうだ。確かに存在していたのだ。

人間は最初おぼろげに、やがて確実に壁の存在を認識していく。壁はある。

絶対的な壁が。出口は無い。

自分がそれを壁と認識した時点で突如目の前に現れる。

やがて人間は自分の出来ない事の多さに絶望する。

その時　その時初めて人間は壁に囲まれる。

自分の出来る事が無くなっていく……自分の世界が狭まっていく。

「あゝ」

私は何か安心した。

私自身この考えが全世界の人間に理解されるなんて思っていない。

むしろ笑われるだろう。

これが事実だとか、これが真理だとか主張するつもりも無い。

完全な私の思いつきなのだから。

しかし、私は私なりに謎を解いて答えを出したのだ。

勿論壁に包囲された原因だとか理由だとか、そういった事が解つたわけではない。

最初は理不尽だと思った。なぜ私が、なぜ私だけが。

違う。そもそも死なんてものは理不尽な物なのだ。

人間は病名とか死因とか、死の原因を知りたがる。

しかしそれを得られても救われる事は無い。

それを思えば私が得た「答え」は死因などよりはるかに価値があるといえる。

7

7

今生きている奴。

死の順番待ちをしている奴、せいぜい怯えろといひ。

いつかくる。この絶望に。

見渡してみる。壁があるはずだ、ないとは言わせない。

お前には見えているはずだ、壁の存在に気づいているはずだ。

見ないふりしたって無駄だ。

いつかお前が壁を意識した時、その途端に壁が姿を現す。



いつか いつの日か

ぼやけていた壁が



第?話 『視線』 閲覧注意

【警告】 ヤマアラシより

まず始めに一言断っておきます。

このページに関しては小説ではありません。

皆様に注意を促す為のものです。

本来このページには『視線』と言う話を掲載していました。

内容は、一人暮らしの女性がある日を境に視線を感じ………といったありきたりなホラーでした。

しかしこの小説を掲載してからと言うもの、私自身の周りで不思議な事が起こり始めたのです。

視線を感じるのです。

それはまるでこの話のように、何も無いはずの空間から何者かが私を見ているかのような、強烈な視線を感じるのです。

私だけなら良かったのですが、閲覧しただけの方々からメールが届き、私と同じような体験をしているのです。

こんな事が続いてしまい、この小説自体を誰の眼につかぬように二度とこのような事がないように削除しようと思いましたが、その晩

私のメールボックスに

『小説を消したらお前を消す』

そういった理由で、閲覧禁止の注意をさせていただきました。

この次のページには「視線」の2ページ目が掲載されていますが絶対に見ないで頂きたい。

閲覧禁止です。

これは冗談ではありません。

作者として、被害に遭われた方には非常に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

どうか、この話を飛ばすか、前のページに戻ってこのお話には絶対に戻ってこないようにしてください。

もう一度言います。

【閲覧禁止】です。

これ以上読者様に何が起こりましても、私は責任を取れません。

このたびは本当にすみませんでした。

第?・?話 『視線』

閲覧禁止

女はもう一度玄関の扉付近を見渡す。

そこには誰もいない。ただの無機質な玄関。

先ほど感じた視線らしきものの正体はどこにも発見できなかった。

「疲れてるのかな……」



そう言えば昨日まで残業続きだった。

開いていた雑誌を閉じてソファーに倒れこむ。

一人暮らしはずっと憧れだったし、正直凄く楽しい。

だけどころいう時は凄く不安になるものだ。

くだらない事を考えていると眠たくなってきた。

このまま寝たらいい。朝起きたら視線のことなんて忘れてる。

そう言えば今何時だったけ??? そう思って女が顔を上げて時計を確認しよう

「ダレッ！！！」

女は慌てて起き上がり、誰もいない部屋を見渡す。

先ほどと同じように何者かの視線を感じたのだ。

辺りを見渡してみるが、視線の正体は分からない。だけど見られている。

部屋には誰もいない。帰ってきた時にも朝と全く同じだった。

だけど見られている。

女は部屋の隅に移動して毛布を被りその視線に恐怖して震える。

「イヤッ！……ダレナノ！……！」

「 ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ ㄣ 」

誰かが笑った気がした。



翌朝。

私はずっと視線を感じている。

朝起きて顔を洗っている時、背後から誰かが見ていた。

でも鏡には私しか居ない。

朝食を作っていたら私は包丁で指を切ってしまった。

すぐ横で誰かが笑っている気がした。

テレビをついたら政治家が逮捕されていた。

そのブラウン管の奥で誰かが私を見ている。

私は今日、友達と出かける予定があった。取りあえず彼女に電話してみる。

思いのほか会話が弾んで私はとっくに視線を感じていることなんて忘れていた。

じゅんじゅん

誰かが扉を叩いた。そう言えば私は通販で買ったイヤリングを今朝届くんだった。

私は受話器を片手に判子を持って扉を開けた。

一人暮らしなので念のためチェーンの隙間から相手を確認する。





そこには真つ赤に充血した眼球が私を見ていた。

あまりにも非現実的な事なのだが、眼球が、眼球だけがそこにはあつた。

私が落とした受話器からは友達の声が聞こえる。私は慌てて扉を閉める。

取りあえず落ち着こう。私は深呼吸してみる。

眼球だけが宙に浮いているなんてありえない。きつと何かの見間違いだ。

私は覗き穴から外を見る。

「~~~~~!!!!!!」

そこには充血した眼がこちらを覗きこんでいた。

声にならない声で絶叫しながら私は部屋の隅まで避難する。

視線を感じる……。

『どうしたの……！ 何があったの……！』

「ア……ア……」

『そこから出たら駄目だからね……！ 分かった……？』

電話は切れてツーツーと言う音が耳に残っていた。私は毛布に包  
まった。

そこで初めて気がついた。この視線は……

・

。ど  
う  
や  
ら  
—  
人  
だ  
け  
じ  
ゃ  
な  
い  
ら  
し  
い

•

•

友達はすぐに駆けつけて私にコーヒーを入れてくれた。

彼女は感じないのだろうか??？ この部屋に居る何人もの人間の視線を。

何にせよ。これでもう大丈夫だ。



「視線ねえ……ちょっと疲れてるんじゃないの??？」

「……そうなのかな……」

「そうよ……！　気にしすぎなだけよ……！」

それは何の根拠も無い言葉だった。

だけど彼女の言葉ほど助けられる物は無かった。

私は涙でぐしゃぐしゃになった顔を洗いたくなり、洗面台に向かう。

そつだ。気にしすぎているだけだ。

私は顔を上げて鏡を見る。

そこには数え切れないほどの眼がこつちを見ていた。

私はそれこそパニックになり靴もはかないまま、外へと飛び出した。

視線は私の後ろをずっとついて来る。どんなに逃げてもついて来る。



私は乗用車に跳ねられて地面に叩きつけられる。

体中に液体を感じる。地面には私の血が汚らしく撒き散らされた。  
空を見上げる。

そこには巨大な二つの眼が私をジッと睨みつけていた

貴方は動かなくなった女をパソコンの画面を通してみる。

次の短編はどんな物語なのだろうと……。

まだ気づいていないのだろうか??? 彼女が感じていた視線の  
正体。

それは貴方自身。貴方が彼女をずっと見ていたために、

貴方が彼女を殺した。

貴方さえ見なければ、貴方が見た為に彼女は、

車に引かれたはずの女がふらふらと立ち上がった。

女はじつと貴方を見つめる。

「あなたのせいなのね……」



女は少しずつ貴方のもとに近づいてくる。

「あんなに……あんなにいい……」

あなたのせい。

彼女が死んだのは全部あなたのせい。

だってあんなに

あれほどまで……

「あんなに閲覧禁止って言ったのにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい……」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0198z/>

---

歪に素敵な短編集

2012年1月14日00時57分発行